

発達や学びをつなぐ スタートカリキュラム

スタートカリキュラム導入・実践の手引き

文部科学省
国立教育政策研究所
教育課程研究センター 編著

発達や学びをつなぐ スタートカリキュラム

スタートカリキュラム導入・実践の手引き

文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 編著



子供の発達や学びをつなぐ



幼児期の学びは
大切な根っこ



園での生活
〈劇ごっこ〉

「これから劇を始めますよ」「あるところに・・・」「ここで踊ることにしようよ」「いいね。そうしよう」
ストーリーを考えたり, 想像したことを表現したりして, みんなでつくった劇を見てもらいます。





園での生活 〈砂場で遊ぶ〉

「水を入れるよー。ちゃんと押さえてね」「オッケー。これでいいかな」
 「大変、こっちから流れてきた」「どうしよう」
 砂遊びを楽しみながら、砂や水の性質に気付いたり、いろいろ試したりします。



「こんなに登れるようになったよ」「ここを持つと登りやすいよ」
 「もっと上まで登りたいな」
 体を伸び伸びと動かす心地よさの中で多様な動きを経験したり、挑戦しようとしたりします。

園での生活 〈遊具で遊ぶ〉



園での生活 〈お店ごっこ〉

「いらっしゃい。いらっしゃい」「輪投げ屋さん、1回やりたいです」
「この券で、3回できます。並んで少しお待ちください」
自分がやりたいお店を決めて、準備もお客さんのお世話も自分たち
でします。



園での生活

季節ごとにたくさんの遊びや生活を通して、先生や友達
と関わりながら学んでいます。



入学前〈小学校へ〉

「思いっきり走ると気持ちいい」「小学校の運動場, 広いね」

小学校の運動場で遊んだり, 小学校の生活をのぞいてみたりすることで, 入学への期待が高まります。



入学後 〈1年生を迎える会〉

「楽しかったね」「ちょっとドキドキした」
「お兄さんやお姉さん, 優しい」
みんなに迎えられ, 嬉しそうな1年生です。

スタートカリキュラム 〈みなさんよろしくね!〉

僕から先に
名前を言うね。



出会いのうれしさが広がります

私の好きな動物は
ウサギだよ。

私もウサギが好き!
一緒だね。



スタートカリキュラム 〈春を探そう〉



「タンポポを見つけたよ。花の絵をいっぱい描きたいな」
幼児期に親しんだ活動を行うことで、子供は安心して取り組むことができます。



スタートカリキュラム 〈リズムで楽しく遊ぼう〉

「あひるのあくびはあ・い・う・え・お」
音読にも動きを付けて、体全体で伸び伸び表現します。

スタートカリキュラム 〈アサガオを育てよう〉



「葉っぱの裏側がフワフワだよ。」
「本当だ。柔らかい。」
友達と関わることで自分のアサガオへの
気づきが生まれます。

スタートカリキュラム 〈学校を探検しよう〉

「分からないことがあったので、もう1回聞き
に来ました」「どんなことかな」
学校の探検を通して、いろいろな先生とのつ
ながりが生まれます。



はじめに

平成29年3月31日、これからの時代に求められる教育の実現に向け、必要となる教育課程の基準を大綱的に定めた新しい学習指導要領が公示されました。

新しい学習指導要領においては、資質・能力の三つの柱である「知識及び技能の習得」、「思考力、判断力、表現力等の育成」、「学びに向かう力、人間性等の涵養」が偏りなく実現されることが求められており、各教科等における教育目標や内容が、資質・能力の三つの柱を踏まえて再整理されています。一方、同時に改訂された幼稚園教育要領においても、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱から構成される資質・能力を一体的に育むように努めることを示し、幼児期の教育の特質を踏まえ、ねらいや内容を領域別に示しつつ、資質・能力の三つの柱に沿って内容の見直しが図られています。また、幼児期の教育を通して資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿が、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として示されています。このような見直しは、幼保連携型認定こども園教育・保育要領と保育所保育指針においても同様に行われています。

これらにより、幼稚園・幼保連携型認定こども園・保育所と小学校、さらには中学校、高等学校まで、縦のつながりで見通していくことができるようになりました。

さらに、小学校学習指導要領第1章総則「第2 教育課程の編成」では、「4 学校段階等間の接続」が新設され、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすることが示されるなど、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の実現への期待が高まっています。

しかしながら、遊びや生活を通して総合的に学んでいく幼児期の教育課程と、各教科等の学習内容を系統的に学ぶ児童期の教育課程は、内容や進め方が大きく異なり、その接続は決して容易ではありません。この課題に応える具体的な手立てとして、平成20年の「小学校学習指導要領解説生活編」で示されたのが、スタートカリキュラムでした。国立教育政策研究所では、スタートカリキュラムの意義や効果等の周知・啓発を目的として、パンフレット「スタートカリキュラムスタートブック」（平成27年）を作成し、各学校における取組を支援してきました。

この度、先述した新しい学習指導要領等の理念の実現に加え、スタートカリキュラムの取組を学校全体として一層充実させていくことを目的として、新たにこの手引きを作成しました。本手引きには、各学校が抱える様々な実態に対応できるよう、スタートカリキュラムを実際に編成・実施していくために必要な考え方や具体的な手順、事例等を盛り込みました。

本手引きが多く的小学校等で活用されることにより、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえた教育活動が充実し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことを可能とする教育課程の実現につながることを切に願っております。

平成30年3月

国立教育政策研究所教育課程研究センター長
加藤 弘樹

発達や学びをつなぐスタートカリキュラム 目次 ～スタートカリキュラム導入・実践の手引き～

第1章 スタートカリキュラムの必要性

- 1 学習指導要領におけるスタートカリキュラムの位置付け 2
- 2 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえたスタートカリキュラム
..... 4
- 3 合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定に配慮した
スタートカリキュラム 7

第2章 スタートカリキュラムをデザインしよう

- 1 スタートカリキュラムをデザインする基本的な考え方 10
- 2 各学校で行うスタートカリキュラムのデザイン 10
 - (1) 幼児の発達や学びを理解する 11
 - (2) 期待する児童の姿を共有する 13
 - (3) 各学校のスタートカリキュラムをデザインする 14

第3章 スタートカリキュラムを実践しよう

- 1 生活科を中心とした学習活動の実践事例 24
- 2 教科の学習活動の実践事例 34
- 3 安心して学校生活を送るための活動の実践事例 50
- 4 児童が安心して学べる環境構成 53

第4章 スタートカリキュラムのマネジメント

- 1 **Plan** 校内組織を立ち上げて準備しよう 60
 - (1) 意義，考え方，ねらいなどを全教職員で共通理解し，保護者へ説明する 60
 - (2) 園への訪問や教職員との意見交換，指導要録等から子供の実態をつかみ，
指導に生かす 62

2 Do	全校で協力体制を組み、スタートカリキュラムに取り組もう	63
(1)	全教職員で協力体制を組み、見守り、育てる	63
(2)	発達の特性を生かし、具体的な活動や体験を取り入れた授業を工夫する	63
(3)	環境構成を工夫し、安心感をもてるようにする	64
(4)	学級便り、懇談会などで保護者に伝える	64
3 Check	子供の姿・指導の在り方を語り合おう	64
(1)	取組がねらいに沿っているか、児童の姿を通して日々評価する	64
(2)	スタートカリキュラム作成委員会や職員会議等で、実施状況を共有する	64
(3)	園の教職員や保護者に児童の様子を見てもらう	65
4 Action	時期を捉えて、反省・検証・改善しよう	66
(1)	改善点を次の指導に即座に生かす	66
(2)	週案等の資料をデータベース化し共有する	67
(3)	次年度に向けて、スタートカリキュラムの改善を図る	68

巻末資料

小学校学習指導要領関連項目	70
小学校学習指導要領解説生活編関連項目	71
幼稚園教育要領関連項目	78

本書で記載している語句等については、主に幼稚園教育要領を基にしている。幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針は、今回の改訂で一層の整合性が図られている。なお、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針においては、次のような語句を使用している。

幼稚園教育要領	幼保連携型認定こども園教育・保育要領	保育所保育指針
5歳児	5歳児	卒園を迎える年度
教師（教職員）	保育教諭等（保育教諭等職員）	保育士（保育士等）
幼児	園児	子ども
幼稚園教育	幼保連携型認定こども園の教育及び保育	保育所保育

本書では、幼稚園教職員、保育教諭等、保育士等の幼児教育の担当者をまとめて「教職員」と記載している。また、幼稚園、認定こども園、保育所等の施設をまとめて「園」としている。

第1章

●

スタートカリキュラムの 必要性

1 学習指導要領におけるスタートカリキュラムの位置付け

平成29年3月に改訂された学習指導要領においては、知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むため、全ての教科等の目標及び内容が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理された。また、同じく改訂された幼稚園教育要領や幼保連携型認定こども園教育・保育要領、改定された保育所保育指針（以下「幼稚園教育要領等」という）においても、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱から構成される資質・能力を一体的に育むように努めることを示し、幼児期の教育の特質を踏まえ、資質・能力の三つの柱に沿って内容の見直しが図られている。

このように、今回改訂された学習指導要領においては、各教科等個別の学習のみならず、教科等や学校段階等を越えて育成を目指す資質・能力を育成していくことが求められており、各学校にはその実現に向けたカリキュラム・マネジメントが期待されている。今回の改訂においては、学校段階等間の接続の観点から、第1章総則で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること」が規定され、幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続については重要性が一層高まっている。しかし、遊びや生活を通して総合的に学んでいく幼児期の教育課程と、各教科等の学習内容を系統的に学ぶ児童期の教育課程は、内容や進め方が大きく異なり、小学校教育への接続は容易ではない。

これまで、幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続については、平成20年の「小学校学習指導要領解説生活編」の中で、幼児期の学びから小学校教育への円滑な接続を目的としたカリキュラム編成の工夫として、スタートカリキュラムが示されてきた。

今回の改訂においては、第1章総則で、低学年における教育全体において、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続を図る役割が生活科に期待されるとともに、「特に、小学校入学当初において、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと（スタートカリキュラムの編成・実施）」が規定されたことを受け、低学年の各教科等（国語科，算数科，音楽科，図画工作科，体育科，特別活動）の学習指導要領にも同旨が明記されている。

以上のことから明らかなように、各小学校においては、入学した児童が、幼児期の教育における遊びや生活を通じた学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにするためのスタートカリキュラムの充実が求められている。

(参考1)「小学校学習指導要領第1章総則」(平成29年告示)に
新設された第2の4「学校段階間の接続」(1)

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。

また、低学年における教育全体において、例えば生活科において育成する自立し生活を豊かにしていくための資質・能力が、他教科等の学習においても生かされるようにするなど、教科等間の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるよう工夫すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。

(参考2)「小学校学習指導要領解説総則編」(平成29年)第3章第2節4 学校段階間の
接続(1) 幼児期の教育との接続及び低学年における教育全体の充実より

小学校低学年は、幼児期の教育を通じて身に付けたことを生かしながら教科等の学びにつなぎ、児童の資質・能力を伸ばしていく時期である。幼稚園教育要領等においては、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱から構成される資質・能力を一体的に育むように努めることや、幼児期の教育を通して資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿を幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として示している。

この幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりに幼稚園の教師等と子供の成長を共有することを通して、幼児期から児童期への発達の流れを理解することが大切である。

小学校においては、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かい、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を更に伸ばしていくことができるようにすることが重要である。

その際、低学年における学びの特質を踏まえて、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育むことを目的としている生活科と各教科等の関連を図るなど、低学年における教育課程全体を見渡して、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるように工夫する必要がある。特に、小学校の入学当初においては、幼児期の遊びを通じた総合的な指導を通じて育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、スタートカリキュラムを児童や学校、地域の実情を踏まえて編成し、その中で、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うことが求められる。

2 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた スタートカリキュラム

入学当初の児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるためには、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を更に伸ばしていくことができるようにすることが重要である。

幼稚園教育要領（平成29年改訂）においては、幼稚園において、幼稚園教育の基本を踏まえ、小学校以降の子供の発達を見通しながら教育活動を展開し、幼稚園教育において育みたい資質・能力を一体的に育むよう努めることが示されている。

幼稚園教育の基本とは「環境を通して行う教育」のことである。幼稚園では、幼児が自ら興味や関心をもって環境に取り組み、試行錯誤を経て、環境へのふさわしい関わり方を身に付けていくことを意図した教育が行われており、特に教師が重視すべき事項としては、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること、遊びを通しての総合的な指導が行われるようにすること、一人一人の特性に応じた指導が行われるようにすること、が挙げられている。（巻末資料「幼稚園教育要領解説 第1章総説 第1節 幼稚園教育の基本」参照）

こうした幼稚園教育の基本に基づいて、幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより、幼稚園教育において育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」であり、以下の10の項目で示されている。

(1) 健康な心と体

幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

(2) 自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

(3) 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

(4) 道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

(5) 社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中

で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

(6) 思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

(7) 自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることをもちながら関わるようになる。

(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

(9) 言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

(10) 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

これらの姿は、到達すべき目標ではなく、自発的な活動としての遊びを通して、一人一人の発達の特性に応じて育っていくものであり、全ての幼児に同じように見られるものではないことに留意する必要がある。

幼児期の教育と小学校教育を接続するに当たっては、一方が他方に合わせるのではなく、それぞれの発達の段階を踏まえた教育活動を充実させることが重要である。そのため、小学校では、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりに幼児期の実態を理解するとともに、園の教職員と子供の成長を共有することを通して、幼児期から児童期への発達の流れを理解することが求められる。なお、これらについては、幼稚園教育要領において、以下のように示されている。

(参考)「幼稚園教育要領第1章総則」(平成29年告示)の「第3 教育課程の役割と編成等」の「5 小学校教育との接続に当たっての留意事項」(2)

幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。

また、「小学校学習指導要領第1章総則」(平成29年告示)の「第5 学校運営上の留意事項」において、「2 家庭や地域社会との連携及び協働と学校間の連携」の項で、以下のように示されている。

教育課程の編成及び実施に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

イ 他の小学校や、幼稚園、認定こども園、保育所、中学校、高等学校、特別支援学校などとの間の連携や交流を図るとともに、障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習の機会を設け、共に尊重し合いながら協働して生活していく態度を育むようにすること。

3 合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定に配慮したスタートカリキュラム

スタートカリキュラムの編成・実施に当たっては、生活科を中心に行うこととしている。それは、生活科が、幼児期の教育と小学校教育との接続を意識するとともに、児童の発達を踏まえ、児童の思いや願いを基に活動を展開していく教科だからである。

「小学校学習指導要領第2章第5節生活」（平成29年告示）「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の1(4)においては、スタートカリキュラムについて以下のように示されている。

他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高め、低学年における教育全体の充実を図り、中学年以降の教育へ円滑に接続できるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期における遊びを通した総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能となるようにすること。その際、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。

国語、算数、音楽、図画工作、体育、特別活動においても、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」について以下のように示されている。

低学年においては、第1章総則の第2の4の(1)を踏まえ、他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、生活科を中心とした合科的・関連的な指導（特別活動においては、「関連的な指導」）や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。

スタートカリキュラムの編成・実施に当たっては、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定に配慮することが必要である。なお、これらについては、「小学校学習指導要領第1章総則」（平成29年告示）「第2 教育課程の編成」の「3 教育課程の編成における共通的事項」においても示されている。

(2) 授業時数等の取扱い

ウ 各学校の時間割については、次の事項を踏まえ適切に編成するものとする。

(イ) 各教科等の特質に応じ、10分から15分程度の短い時間を活用して特定の教科等の指導を行う場合において、教師が、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通した中で、その指導内容の決定や指導の成果の把握と活用等を責任をもって行う体制が整備されているときは、その時間を当該教科等の年間授業時数に含めることができること。

(3) 指導計画の作成等に当たっての配慮事項

エ 児童の実態等を考慮し、指導の効果を高めるため、児童の発達の段階や指導内容の関連性等を踏まえつつ、合科的・関連的な指導を進めること。

スタートカリキュラムの編成・実施に当たっては、これまで述べてきたように「生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと」が求められている。これは、個別の教科や1時間ごとの学習活動だけではなく、小学校入学当初の児童の学校生活全体を対象とし、その教育課程を各学校や児童の実態に応じてデザインすることを意味している。このことは、「小学校学習指導要領第1章総則」(平成29年告示)「第1 小学校教育の基本と教育課程の役割」に示されている「カリキュラム・マネジメント」の考え方と深く関わっている。

4 各学校においては、児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと(以下「カリキュラム・マネジメント」という。)に努めるものとする。

なお、「カリキュラム・マネジメント」については、第4章「スタートカリキュラムのマネジメント」(p.59～)で詳しく説明している。

第2章



スタートカリキュラムを デザインしよう

スタートカリキュラムをデザインすることは、学習指導要領で求められている小学校入学当初における指導の工夫や指導計画の作成を、各学校や児童の実態に応じて行うことである。本章を参考に、各学校に応じたスタートカリキュラムを全教職員でデザインすることが大切である。

1 スタートカリキュラムをデザインする基本的な考え方

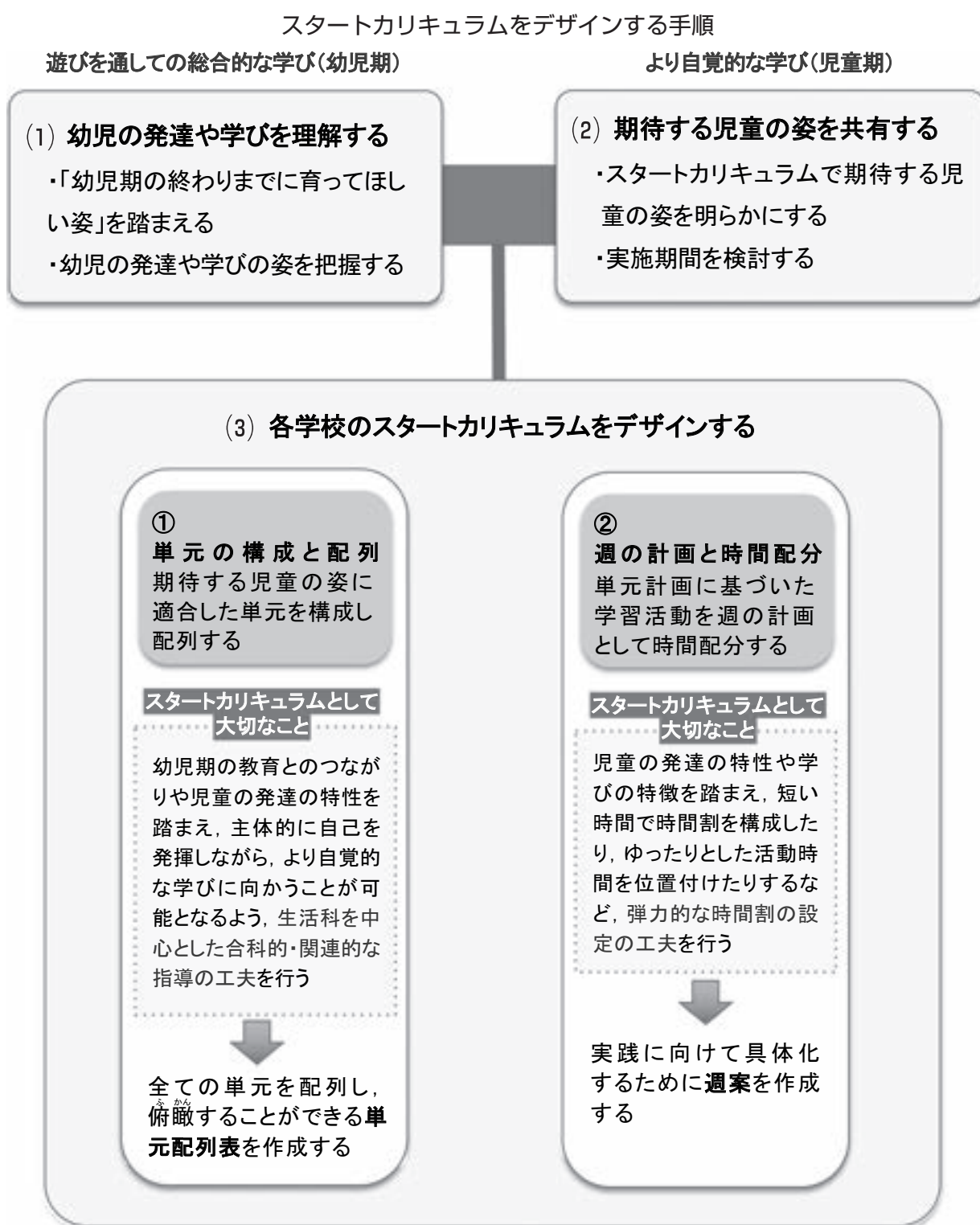
スタートカリキュラムをデザインする際の基本的な考え方としては、次の4つが考えられる。こうした考え方について学校全体で共通理解を図った上で、スタートカリキュラムをデザインすることが求められる。

基 本 的 な 考 え 方	
■一人一人の児童の成長の姿からデザインしよう	入学時の児童の発達や学びには個人差があり、それぞれの経験や幼児期の教育を考慮したきめ細かい指導が求められる。そのため、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえるなどして、幼児の発達や学びの様子を理解した上で、カリキュラムをデザインすることが重要である。
■児童の発達の特性を踏まえて、時間割や学習活動を工夫しよう	入学当初の児童の発達の特性やこの時期の学びの特徴を踏まえて、10分から15分程度の短い時間を活用して時間割を構成したり、具体的な活動の伴う学習活動を位置付けたりするような工夫が必要である。また、児童の意欲の高まりを大切に、自らの思いや願いの実現に向けた活動をゆったりとした時間の中で進めていけるように活動時間を設定することなども考えられる。
■生活科を中心に合科的・関連的な指導の充実を図ろう	自分との関わりを通して総合的に学ぶという、この時期の児童の発達の特性を踏まえ、生活科を中心とした合科的・関連的な指導の充実を図ることが重要である。このような指導により、児童の意識の流れに配慮したつながりのある学習活動を進めていくことが可能となる。
■安心して自ら学びを広げていけるような学習環境を整えよう	児童が安心感をもち、自分の力で学校生活を送ることができるように学習環境を整えることが重要である。児童の実態を踏まえること、人間関係が豊かに広がること、学習のきっかけが生まれることなどの視点で、児童を取り巻く学習環境を見直す必要がある。

2 各学校で行うスタートカリキュラムのデザイン

幼児期における遊びを通しての総合的な指導を通じて育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるようにするためには、小学校入学当初の学校における教育活動全体を対象として、カリキュラムをデザインしていくことが欠かせない。基本的な考

え方を踏まえ、スタートカリキュラムをデザインする際には、次のような手順で進めることが考えられる。



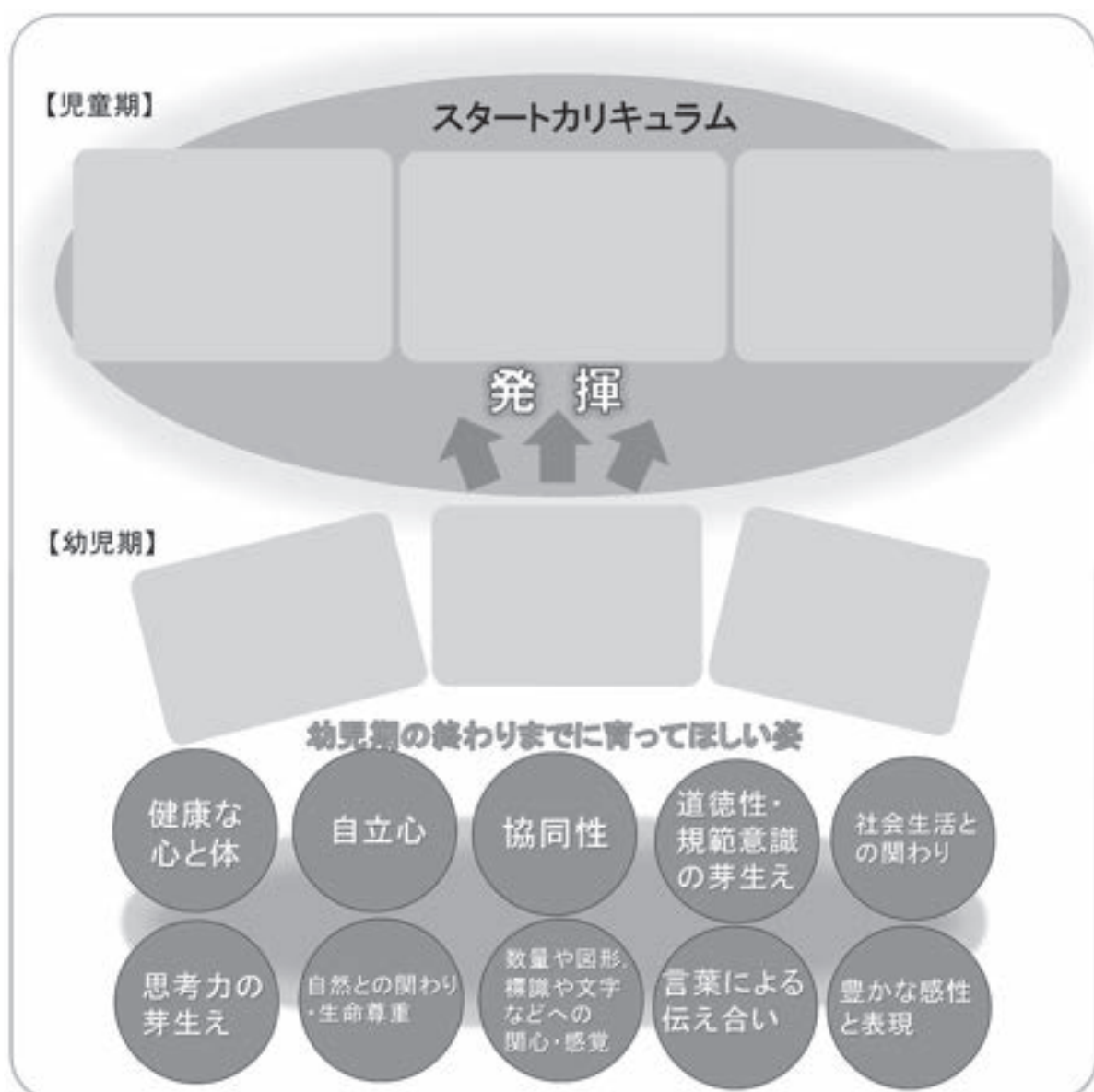
(1) 幼児の発達や学びを理解する

児童が主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能となるようにするためには、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施す

ることが大切である。幼稚園教育要領等に示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、日々の遊びや生活の中で幼児期の教育において育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿をまとめたものである。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、「(1)健康な心と体、(2)自立心、(3)協同性、(4)道徳性・規範意識の芽生え、(5)社会生活との関わり、(6)思考力の芽生え、(7)自然との関わり・生命尊重、(8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、(9)言葉による伝え合い、(10)豊かな感性と表現」の10の項目で示されており、こうした具体的な育ちの姿を手掛かりとして、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力について理解し、児童の成長を把握しながらカリキュラムのデザインを行うことが重要である。スタートカリキュラムをデザインするに当たっては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を通して実際の幼児の姿について共通理解を図り、小学校へ入学した児童が、安心して学校生活を送るとともに、自信をもって成長し、学習者として確かに歩んでいくことができるようにすることが望まれる。

そのためには、園への訪問や教職員との意見交換、幼稚園幼児指導要録等を活用するなど、

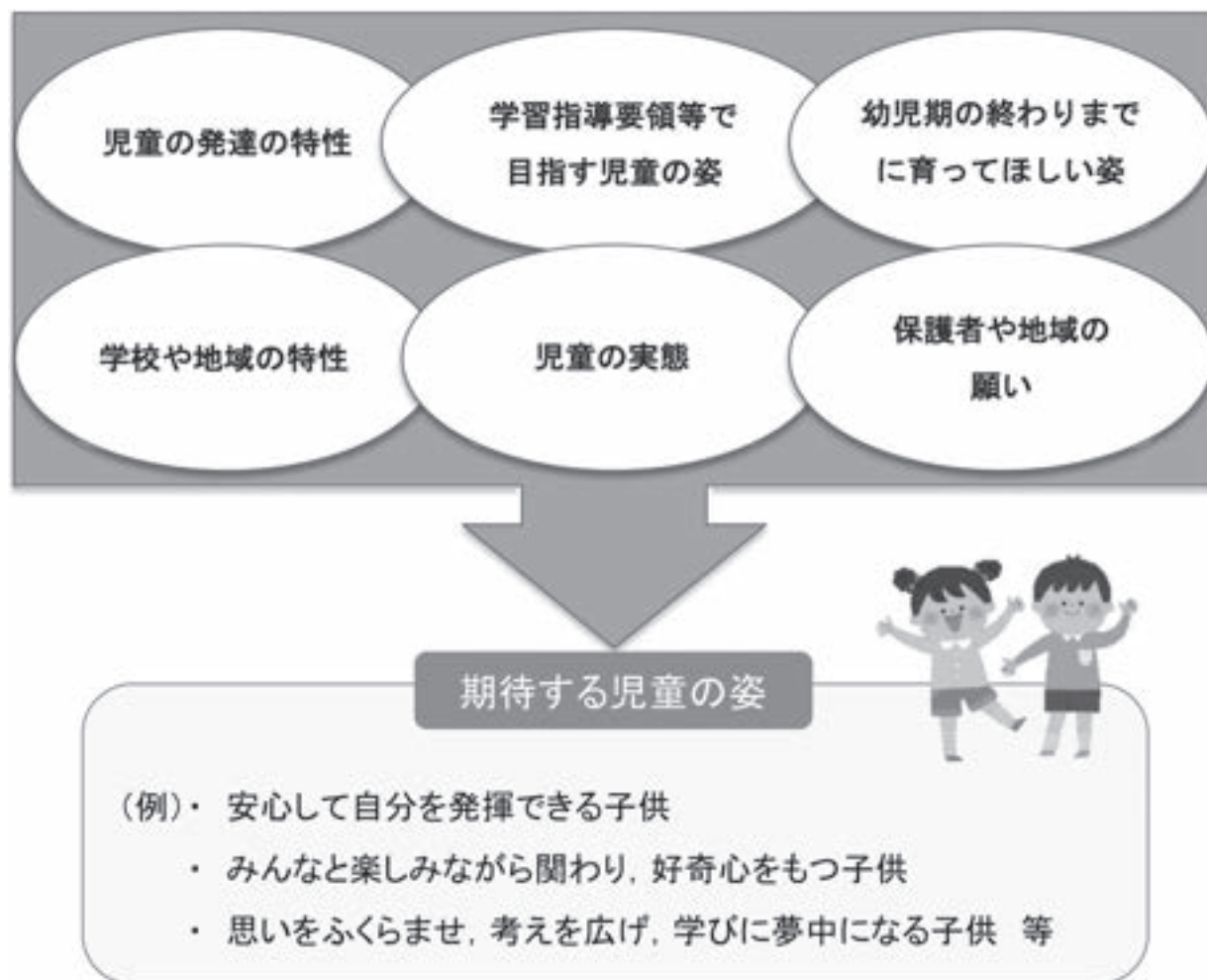


幼児の発達や学びの様子や指導の在り方を把握することが重要である。

(2) 期待する児童の姿を共有する

① 期待する児童の姿の共有

スタートカリキュラムは、児童の発達の特性や幼児期の発達を踏まえてデザインすることが重要である。スタートカリキュラムを通して一人一人が確かに成長することを目指し、期待する児童の姿を明らかにすることが欠かせない。



期待する児童の姿については、小学校入学当初の教育課程全体を通して学校全体で育んでいくための目標として、第1学年担任だけでなく、全教職員で検討するとともに共通理解を図ることが大切である。そのことが、協力体制を組んで第1学年の児童を見守り育てることにもつながる。その際、保護者にもスタートカリキュラムの意義や期待する児童の姿などを伝え、安心感や信頼感を生み出すようにしたい。また、近隣の園と共有しておくことも考えられる。

② 実施期間の検討

スタートカリキュラムの実施期間としては、入学後2週間、1か月、2か月など、多様に想定することができる。例えば、入学直後の学校生活の充実を図るためには2週間

程度、5月の連休を視野に入れる場合には1～2ヶ月程度のスタートカリキュラムをデザインすることが考えられる。大切なことは、児童や各学校の実態を基に、期待する児童の姿を目指して、必要な期間を設定することである。

実施期間の設定後も、スタートカリキュラムにおける児童の姿等を評価しながら、期間を短くしたり、伸ばしたりするなどして、柔軟に対応することが必要である。また、実施期間が終わってからも、長期休業後などには、スタートカリキュラムの考え方を生かした指導の工夫を行い、1年間を通して、児童の状況に応じた対応を心掛けたい。

(3) 各学校のスタートカリキュラムをデザインする

スタートカリキュラムの期間全体のうち、はじめの頃は、特に児童の安心感を高めたり、初めて出会った先生や友達と関わったりする学習活動を多くし、それ以降は、より自覚的な学びに向かうことを意識した単元を位置付けるなどして、単元の構成や配列、指導の重点を考えることが大切である。このように、児童が安心して小学校生活を楽しみ、自らの力を発揮しながら主体的な学習者として育っていく過程を思い描き、全体をイメージすることが効果的である。

① 単元の構成と配列

スタートカリキュラムをデザインする際には、幼児期の発達や遊びを通した総合的な学びが小学校の学習や生活において発揮できるように、また、児童の思いや願いをきっかけとして始まる学びが自然に教科等の学習につながっていくように、単元の構成と配列を行うことが大切である。

単元の構成においては、体験活動を取り入れる、友達との関わりを重視する、児童の意識の流れを大切にするなど考えられる。

単元の配列においては、各教科等間のつながりを意識することが大切である。そのため、「小学校学習指導要領第2章第5節生活」（平成29年告示）においては、生活科を中心とした合科的・関連的な指導の工夫が示されている。

一人の児童の学びは個別の教科内で閉じるものではなく、それぞれの学びが相互に関連付き、つながり合っている。幼児期における遊びを通した総合的な学びは、感性を働かせてよさや美しさを感じ取ったり、不思議さに気付いたり、気付いたことやできるようになったことなどを使いながら試したり、いろいろな方法を工夫したりすることなど、思いや願いをきっかけとして発展していく。こうしたことを踏まえ、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出そうとする児童の姿を実現するための方法として、生活科を中心とした合科的・関連的な指導の工夫が求められている。

①合科的・関連的な指導の工夫

スタートカリキュラムにおいて、合科的・関連的な指導の工夫により単元を構成し配列する際には、生活科における学習活動が他教科等での学習材となったり、生活科で身に付けた資質・能力を他教科等で発揮したり、他教科等で身に付けた資質・能力が生活科において発揮されたりして確かに育成されるようにするなど、いくつかのタイプが考えられる。次の表では、合科的な指導と関連的な指導の捉え方や考えられる複数のタイ

プを示している。

合科的・関連的な指導

	捉え方	タイプ(例)
合科的な指導	各教科のねらいをより効果的に実現するための指導方法の一つで、単元又は1コマの時間の中で、複数の教科の目標や内容を組み合わせて、学習活動を展開するもの	【合科】 生活科を中心とした単元の学習活動において、複数の教科の目標や内容を組み合わせて学習活動を展開することで、指導の効果を高める <div> 生活科 ↓ 他教科 </div>
関連的な指導	教科等別に指導するに当たって、各教科等の指導内容の関連を検討し、指導の時期や指導の方法などについて相互の関連を考慮して指導するもの	【関連 A】 生活科の学習成果を他教科等の学習に生かす <div> 生活科 ↓ 他教科等 </div>
		【関連 B】 他教科等の学習成果を生活科の学習に生かす <div> 生活科 ↑ 他教科等 </div>

スタートカリキュラムにおける合科的・関連的な指導の具体例としては次のようなことが考えられる。

【合科】	生活科の学校探検で気付いたことなどを言葉で表現したり、友達と伝え合ったりする学習活動において、国語科の資質・能力「伝えたい事柄や相手に応じて、声の大きさや速さなどを工夫すること」について指導することで、より効果的にねらいの実現を図る
【関連 A】	生活科で春の自然を観察したり、自然のもので遊んだりする体験が、音楽科で春の歌の曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて気付くことに生かされるように関連を意識して指導する
【関連 B】	算数科で育成する、ものとものを対応させることによって、ものの個数を比べることや、個数の順番を正しく数えたり表したりする知識及び技能が、生活科の学校探検で見つけたものを数える際に生かされるように関連を意識して指導する

② 単元配列表の作成

合科的・関連的な指導の工夫を行う際には、学習指導要領で各教科等の目標や内容を確認し、より効果的に展開できるように実施時期や指導方法を調整するなどの工夫が求められる。そのために、生活科と各教科等との単元の関連を明示した単元配列表を作成することが考えられる。「小学校学習指導要領解説生活編」（平成29年）においても、「生活科と他教科等において学んだことがどのように関連付いていくのかを意識し、児童の思いや願いを生かした学習活動を展開するために、全ての単元を配列し、それを俯瞰することができる単元配列表の作成が効果的である」と示されている。

次のページに示したのは、第1学年の1年間全体を見渡した単元配列表から、スタートカリキュラムの実施期間を取り出した「単元配列表（例）」である。この表においては、縦軸に各教科等を、横軸にスタートカリキュラムの実施期間を位置付けて単元を配列している。そして、生活科の単元を中心として、二重線（合科）や矢印（関連）でつなぐことで、生活科と各教科等との合科的・関連的な指導の工夫について示している。

例えば、本書第3章の実践事例にあるように、生活科「がっこうだいすきみんななかよし」の単元を中心として他教科等との合科的・関連的な指導の工夫について考える際には、本単元の主たる学習活動である学校探検との関連から、国語科の「みつけたよ」や「よろしくね」、算数科の「なかまづくりとかず」、図画工作科の「すきなもののいろいろ」、体育科の「ゆうぐあそび」などとのつながりを考えて単元を配列する。学校探検などの活動をきっかけとして、児童の意識の流れを重視して各教科等の単元を配列することは、学び手である児童にとって自然で豊かな学びをつくっていくことになる。

単元配列表を作成し、各教科等の内容の関連を想定しておくことで、例えば学校探検で「見つけたことを家の人に伝えたい」「先生たちに名前カードを渡したい」「校庭の遊具で遊びたい」など、授業の中で児童から発せられる言葉を受け止め、次の活動につながるしながら、学びを展開していくことが可能となる。こうして、単元配列表を基に、合科的・関連的な指導の工夫をすることで、児童の意欲の高まりや主体性の発揮が期待できる。

第1学年 単元配列表(例)

各教科等	第1週	第2週	第3週	第4週	第5週		
国語	あいうえおであそぼう						
	いちねんせい	よろしくね	はるのあさ	みつけたよ	ことばのひみつ	あめのひ	ともだちとはなそう
算数	なかまづくりとかず	くらべよう	10までのかず		なんばんめ	いくつといくつ	
生活	がっこうだいすき みんななかよし						おおきなあれ
音楽	みんなであうたおう			おんがくにあわせて			
図画工作	すきなものいろいろ	じぶんマーク	こんなことあったよ	ねんどであそぼう	すなやつちとあそぼう		
体育	からだほぐし		ゆうぐあそび		おにあそび		
道徳	げんきにあいさつ		みんなであそぶもの		ともだちとなかよく		いきものとなかよし
特別活動	入学式	1年生を迎える会					
	よろしくね	たのしいきゅうしよく		おしごとたのしいな			

ここで大切なことは、単に学習材や活動を関連付けるだけでなく、各教科等でどのような資質・能力を育成したいのかを意識し、児童の意識の流れを想定した上で、相互の関連について検討し位置付けていくことである。また、合科的指導においては、関連した教科の目標が生活科の目標とともに実現されていくように意識する必要がある。

② 週の計画と時間配分

① 週案の作成

幼児期においては、園の生活における一日の流れの中で、夢中になって遊んだり、共通の目的の実現に向けて協力してやろうとしたり、活動の区切りでは気持ちを切り替えて、しなければならないことを自覚したりするようになることなどを大切にしている。小学校においても、幼児期のこうした発達や学びを土台とし、児童が興味・関心をもつ

たことを一人一人のペースで追究していけるような、ゆったりとした時間の流れの中で、少しずつ小学校での学習や生活に慣れていくようにするための工夫が求められる。

そこで考えられるのが、弾力的な時間割の設定である。特に入学当初は、登校してからの時間や朝の会から1時間目などについて、幼児期の生活リズムや園での過ごし方を参考に、幼児期に近い生活をつくるようにすることが大切である。例えば、登校してきたら朝の支度を済ませ、友達と誘い合って自由に遊べる時間とすることや、朝の会から1時間目を連続した時間とし、幼児期に親しんできた遊びや活動を取り入れたり、友達と仲良く交流する活動を行ったりすることで、楽しい気持ちで1日の学校生活を始めることができるようにすること、児童が慣れるまで同じ活動を同じ時間で繰り返したり、慣れてきたら少し発展的な内容にしたりするなど、様々な工夫が考えられる。なお、この時間については、授業時数以外の教育活動として位置付けたり、各教科等で実施したりすることが考えられる。(各教科等で実施する場合には、学習活動がその教科等の目標や内容を実現するものである必要がある。)

また、この時期の児童の発達の特性に配慮し、学びの特徴を踏まえて、10分から15分程度の短い時間で時間割を構成したり、児童が自らの思いや願いの実現に向けた活動をゆったりとした時間の中で進めていけるように学習活動を2時間続きで設定したりすることも考えられる。

このような弾力的な時間割の設定については、スタートカリキュラムを実施する期間の週案に位置付けることで、計画的・組織的な取組として学校全体で共通理解を図りながら進めていくことができる。また週案の作成は、前項で述べた単元配列表を、実践に向けて具体化するためにも必要なことである。単元配列表は、長期的な視点で単元を配列したものであることから、それらを実際にスタートカリキュラムとして展開するに当たっては、各単元の配列や関連などと併せて、上で述べた弾力的な時間割の工夫などを週案に反映させていくことが大切である。その際、児童の成長の姿を評価しながら、それらを生かして週案を作成することはもとより、見直しを加えながら改善していくというカリキュラム・マネジメントの視点が欠かせない。




次に示したのは、スタートカリキュラム第2週の週案の例である。

スタートカリキュラム第2週の週案（例）

	第6日	第7日	第8日	第9日	第10日
日	4／○(月)	4／○(火)	4／○(水)	4／○(木)	4／○(金)
朝	「なかよくなろう」※ ・手遊び ・お話読んで ・お話聞いて ・歌って踊ろう	「なかよくなろう」※ ・手遊び ・お話読んで ・お話聞いて ・歌って踊ろう	「なかよくなろう」※ ・手遊び ・お話読んで ・お話聞いて ・歌って踊ろう	「なかよくなろう」※ ・手遊び ・お話読んで ・お話聞いて ・本がたくさん	「なかよくなろう」※ ・手遊び ・お話読んで ・お話聞いて ・本がたくさん
ポイント1 安心をつくる時間	「がっこうだいすき みんななかよし」 ・自己紹介をしよう (国「よろしくね」2/3) ・学校のはてなや	「あいうえおであそ ぼう」 ・ひらがな (国 2/3) 「くらべよう」 ・数を比べよう (算 1/3)	「あいうえおであそ ぼう」 ・ひらがな (国 2/3) 「はるのあさ」 ・リズムに合わせて 読もう(国 1/3)	「がっこうだいすきな かよいっぱい」 ・遊具で遊ぼう (体「ゆうぐあそび」1)	「あいうえおであそ ぼう」 ・ひらがな (国 2/3) 「はるのあさ」 ・聞き合おう (国 1/3)
ポイント2 生活科を中心とした 学習活動	びっくりを見付けよ う(生1と1/3)	「はるのがっこう こんにちは」 ・春と遊ぼう (生2)	「10までのかず」 ・数えてみよう (算1)	・見付けたものを数 えてみよう (算「10までのかず」1)	「10までのかず」 ・絵を見て数えよう ・数字を書こう (算1)
ポイント3 教科等を 中心とした 学習活動	「あいうえおであそ ぼう」・ひらがな (国 2/3) 「なかよくだいさくせ ん」 ・みんなでおいしく 給食を食べよう		「はるですよ」 ・みんな生きている (道1)	「はるのあさ」 ・工夫して読もう (国 1/3) 「あいうえおであそ ぼう」 ・ひらがな (国 2/3)	「からだほぐし」 ・二人、三人、みん なで遊ぼう (体1)
ポイント4 5	「くらべよう」 ・数を比べよう (算 2/3) 「みんなでうたおう」 ・知っている春の歌 を歌おう (音 1/3)	「はるのがっこう こんにちは」 ・春のTシャツを作 ろう (図工「はるとなかよ し」1)	「はるのがっこう こんにちは」 ・春のTシャツを飾 ろう (図工「はるとなかよ し」1)	「みんなでうたおう」 ・わらべうたで遊ぼ う (音1)	
昼					

※の時間については、授業時数以外の教育活動として位置付けたり、各教科等で実施したりすることが考えられる。(各教科等で実施する場合には、学習活動がその教科等の目標や内容を実現するものである必要がある。)

週案を作成する際には、次のような学習の類型を参考にすることが考えられる。

スタートカリキュラムを構成する活動の類型	
	一人一人が安心感をもち、新しい人間関係を築いていくことをねらいとした活動（安心をつくる時間）
	合科的・関連的な指導による生活科を中心とした学習活動
	教科等を中心とした学習活動




次に示したのは、「週案（例）」を作成する際に意識したポイントである。各学校においては、こうしたポイントを確認し、期待する児童の姿に向けて週案を作成することが求められる。

「週案（例）」を作成する際に意識したポイント

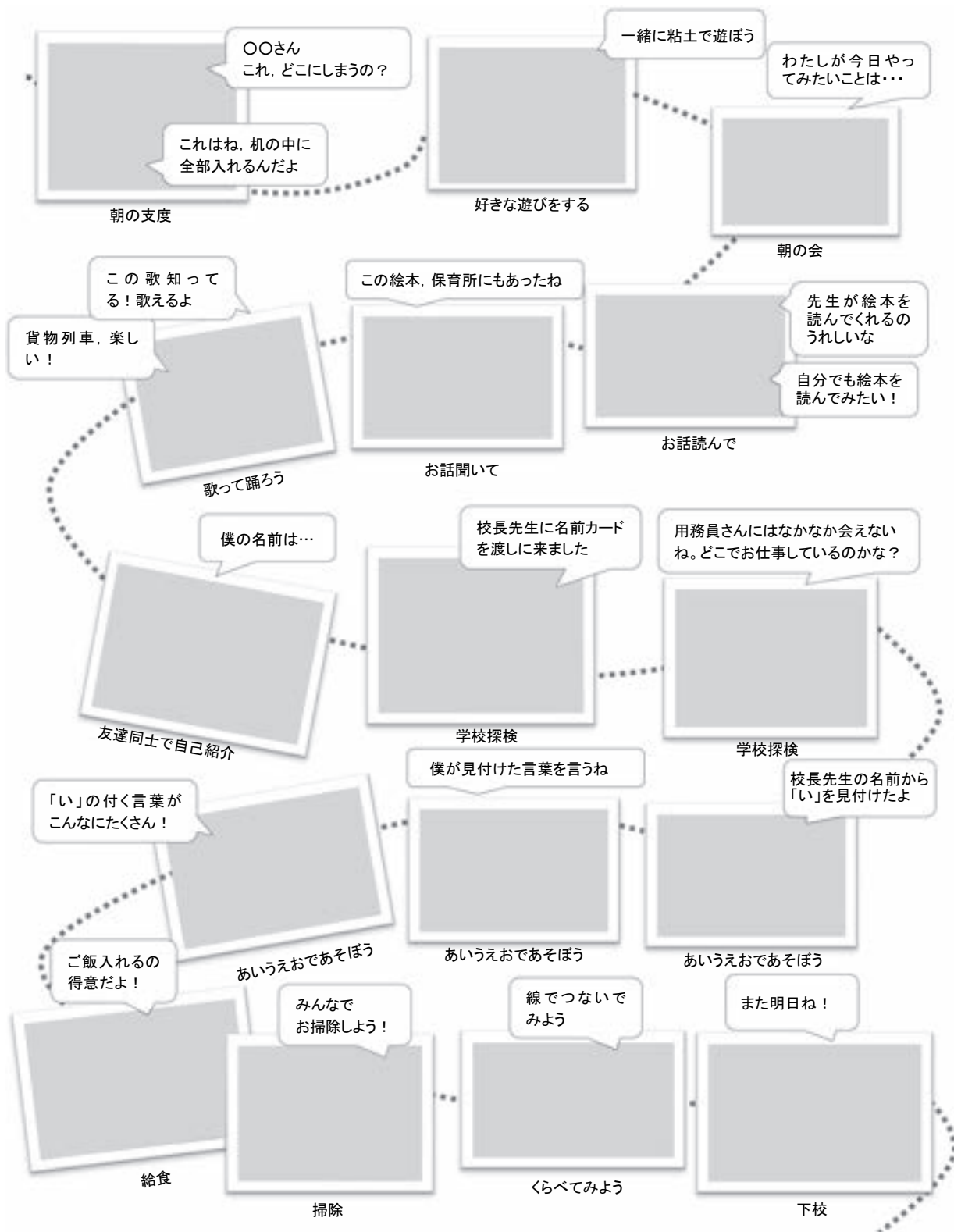
	スタートカリキュラムとして大切にすること
ポイント 1	<ul style="list-style-type: none"> ○朝の会から 1 時間目を連続した時間とし、幼児期に親しんできた遊びや活動、交流する活動などを位置付け、楽しい気持ちで 1 日がスタートするように 1 週間の時間割を計画する ○児童が安心して学校生活を楽しむことができるように、一定の期間は同じ学習内容を繰り返す連続性と、少しずつ内容が高まっていく発展性を意識する
ポイント 2	<ul style="list-style-type: none"> ○児童の思いや願いの実現に向けた主体的な学習がつながっていくように、1 週間の時間割を計画する ○生活科を中心に、つながりのある他教科等のねらいを考えながら合科的・関連的な指導を行う ○思いや願いの実現に向けた主体的な学習活動をゆったりとした時間の中で進めていけるように、2 時間続きなどの学習活動を位置付ける
ポイント 3	<ul style="list-style-type: none"> ○入学当初の児童の学習に対する期待感を生かし自覚的な学びにつなぐために、教科等の学びの時間を 1 週間の時間割に位置付ける ○児童の学習意欲が続いていくように、他教科等の指導の際に生活科との関連を意識する ○入学当初の児童の発達特性に配慮し、10 分から 15 分程度の短い時間を利用して時間割を構成したり、具体的な活動の伴う学習活動を位置付けたりする
ポイント 4	<ul style="list-style-type: none"> ○入学当初の児童の発達特性に配慮し、午後の時間は具体的な活動の伴う学習活動を位置付ける ○1 日の終わりには、明日への期待感を高める活動を設定する

② 1日の学校生活の実例

次は、P.19の「週案（例）」から第6日目を取り出し、児童の生活リズムや1日の過ごし方を意識して示したものの一部である。このように、1日の学校生活を、学び手である児童を中心にデザインすることが重要である。

第6日 4月〇日（月）			
時刻	類型	学習活動	○予想される児童の姿 ★環境の構成 ●教師の働きかけ
8:10 8:30 1時間目		<ul style="list-style-type: none"> ○登校する ○ランドセルの片付けをする ○宿題や連絡帳を出す ○好きな遊びをする ○朝の会 ○「なかよくなろう」 <ul style="list-style-type: none"> ・手遊び ・お話読んで ・お話聞いて ・歌って踊ろう 	<ul style="list-style-type: none"> ○登校してからの手順が分かり、自分で朝の支度ができる。 ○新しい友達と歌を歌ったり、体を動かして一緒に遊んだりすることを通して、新しい出会いを楽しむ。 ●笑顔で迎え、登校したうれしさが感じられるようにする。まだ不安な心もちで登校している児童がいることに配慮し、先週までの活動を繰り返すことで安心感を高める。 ★朝の支度などが自分でできるように、目で見分ける表示をする。 ★園で読んでいた絵本や、みんなで遊べる積み木、ブロック、粘土などを準備しておく。 ●「先生や友達と過ごすのは楽しい」と感じられるように、教師も一緒に歌ったり、笑顔を交わしたりして楽しい雰囲気をつくる。
2時間目 3時間目		<ul style="list-style-type: none"> ○「がっこうだいすき みんななかよし」 ・友達同士で自己紹介をする ・先週ゲストとして出会った先生たちを探し出して自己紹介をし、質問をする ・自己紹介の時の様子や見付けた「はてな」や「びっくり」を交流し合う 	<ul style="list-style-type: none"> ○先生たちに名前カードを渡して自己紹介をし、聞きたいことを尋ねたり、話をしたりする。 ●担任以外にもたくさんの先生方が見守ってくれていることが実感できるように、校長先生・教頭先生・保健室の先生・用務員さんなどとの関わりの場面をつくる。 ★児童が校内外を自由に探検できるように、全教職員に協力を依頼するとともに、児童とも学校探検のルールなどについて事前に確認しておく。
4時間目		<ul style="list-style-type: none"> ○「あいうえおであそぼう」 ・学校探検でお話した校長先生の名前の頭文字をきっかけにして言葉見付けをする ・見付けた言葉を紹介し合う ・「い」を丁寧に書く 	<ul style="list-style-type: none"> ○「い」のつく言葉見付けをし、それを交流したり丁寧に書いたり、これからの学習で使ってみることを考えたりする。 ●児童の「書いてみたい」「伝えたい」という思いがつながっていくように、ひらがなの学習も学校探検などと関連付けるようにする。 ★ひらがな学習を楽しく、そして見通しをもって学べるように、言葉見付けや見付けた言葉の紹介、リズム遊びなど、発達特性を踏まえて一連の学習活動を設定する。

写真で表した1日の学校生活の実際（第6日目の例）



第3章



スタートカリキュラムを 実践しよう

1 生活科を中心とした学習活動の実践事例

低学年児童は、心と体を一体的に働かせて学ぶという特性をもっている。幼児期における遊びを通しての総合的な学びを生かし、具体的な活動や体験を通して感性を豊かに働かせるとともに、身近な出来事から気づきを得て考えるなど、中学年以降の学習の素地を形成していくことが重要である。

特に入学当初の児童においては、幼児期における遊びを通しての総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能となるようにすることが求められている。思いや願いを生かして学習活動を展開する生活科という総合的な学びの中で、他教科等の自覚的な学びを合科的・関連的に指導し、必要な資質・能力を身に付けていくことが大切である。

そのために、生活科と他教科等との合科的・関連的な指導を行ったり、低学年の児童の生活とつながる学習活動を取り入れたりして、教科等横断的な視点で教育課程の編成、実施上の工夫を行うことが重要である。それにより、生活科における学習活動が他教科等での学習材となったり、生活科で身に付けた資質・能力を他の教科等で発揮したり、他教科等で身に付けた資質・能力が生活科において発揮されたりして確かに育成されるなど、一層の学習の効果が期待できる。

ここでは、生活科を中心とした学習活動の実践事例を紹介する。生活科の単元の学習活動において、他教科で育成を目指す資質・能力がより効果的に育成されると期待できる場合、その資質・能力を合科的に扱うことで、生活科と他教科のねらいの効果的な実現を図るという学習活動を示した。

その際、学びを豊かにするために、以下のポイントに配慮することが考えられる。

学びを豊かにするポイント

○思いや願いを生かした学習活動を構成する

生活の中で見付けた疑問を解決したり、子供の思いや願いを実現したりすることで学ぶことへの意欲を高めていく。そのためにも、子供のつぶやきを大切にして、子供の意識の流れに沿った学習活動の計画を立てて実践する。

○体験をきっかけにして、各教科等につなげる

具体的な活動や体験を通して、見付けたり、遊んだり、不思議だなと感じたり、やってみたいなど思ったことが、「話したい」「伝えたい」という気持ちにつながる。それは、例えば、国語科における「話す・聞く」の学習活動などの動機付けとなり、格好の学習材となる。

○生活上必要な習慣や技能が身に付くように指導する

生活上必要な習慣や技能は、思いや願いを実現する過程において身に付いていくものであり、取り出して指導するものではない。例えば、学校を探検する学習活動では、学校の公共性に意識を向けることで、学校の施設はみんなのものであること、学校にはみんなで

気持ちよく生活するための決まりやマナーがあることなどに気付くことができるように指導する。

COLUMN 【入学当初の特別活動における学習活動のポイント】

特別活動は、学級活動、児童会活動、クラブ活動及び学校行事における多様な集団活動を通して、児童がよりよい人間関係を形成したり、集団や自己の課題の解決に向けて取り組んだりする実践的な活動である。小学校入学当初においては、徐々に大きな集団における幅広い人間関係の中で活動できるようにして、集団で活動する楽しさを味わい、安心して学校に通うことができるようにすることが求められる。

そのためにも、学級活動や児童会活動、学校行事をはじめ、朝の時間における交流など、様々な集団活動を通して、1年生が学校生活に慣れ、友達とよりよい人間関係を築き、楽しく豊かな学校生活を送ったり、安心して学習に励んだりすることができるように、計画的に指導することが重要である。その際は、幼児期の教育との接続に配慮した指導を工夫するようにする。

学級活動(1) 議題「みんなともだち にこにこかいをしよう」

○学級担任が司会役となり、以下のように展開する。

- ・幼稚園等での遊びの経験を話し合う
- ・お互いのことを知り、なかよくなるための遊びについて話し合う
- ・話し合って決めた遊びでみんなで遊ぶ
- ・活動を振り返り、「みんなで話し合って、みんなで決めたことで遊んだら楽しかったね。仲良くなれたね。」ということを実感できるようにする。

異年齢交流活動

○入学当初、朝の時間に6年生が読み聞かせをしたり、給食や掃除の手順について6年生が1年生に関わったりする活動を行っている学校も多い。その際には、幼児期の教育における育ちを踏まえ、1年生が主体的に自己を発揮しながら学校生活に慣れていくことができるように計画的に実施するようにする。また、児童会集会活動など異年齢で楽しく交流する活動を通して、1年生は上学年の児童への親しみやあこがれ、尊敬の気持ち、「自分もこうなりたい」という思いや願いをもち、そのことが学校生活において目標や希望をもって生活することにもつながっていく。

児童会集会活動 「1年生を迎える会」

○「1年生を迎える会」は、年度当初に1年生を温かく迎えるために児童会の主催により、全校児童で行う集会活動であり、1年生による発表が行われることも多い。その際は、児童の発意・発想や幼児期の教育において経験してきた様々な表現活動を生かし、集団で活動する楽しさや、学校の一員となった喜びを味わうことができるように留意する。

実践事例 1 「がっこうだいすき みんななかよし」

単元の目標

学校を探検し、気付いたことを絵や言葉で表現する活動を通して、学校の施設の様子や学校生活を支えている人々や友達などについて考えたり、伝えたいことを選んで身近な人々に学校を案内・紹介したりすることができ、学校での生活は様々な人や施設と関わっていることが分かり、楽しく安心して遊びや生活をすることができるようにする。

単元の展開（全20時間：生活科12＋国語科 5 ＋音楽科 1 ＋図画工作科 2）

小単元名 (時間数)	○主な学習活動	・指導上の留意点 ★合科的な指導
1 がっこう たんけん はじめるよ (4時間)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>〔小単元の目標〕 みんなで給食室を探検したり、気付いたことを表現したりして、学校の施設の様子や学校生活を支えている人々などに関心を持ち、もっと探検してみたい場所などを出し合ったり、探検の約束や名前、歌などを考えたりする。</p> </div> <p>○給食で知りたいことや心配なことなどを出し合ったり、給食室を見にいたりする。(生1)</p> <p>○気付いたことなどを絵や言葉で表現したり、友達と伝え合ったりする。(図2／3・国1／3)</p> <p>○もっと探検してみたい場所などを出し合い、探検の約束や名前、歌などを考える。(生1・音1)</p>	<p>・本をもっと読みたいという思いから図書室へ、といったきっかけも考えられる。</p> <p>・栄養士との連携を図り、児童の興味・関心や疑問に応えるようにする。</p> <p>★感じたことから表したいことを見付け、どのように表すかについて考えること【図】</p> <p>★伝えたい事柄や相手に応じて、声の大きさや速さなどを工夫すること【国】</p> <p>★音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度を養うこと【音】</p>

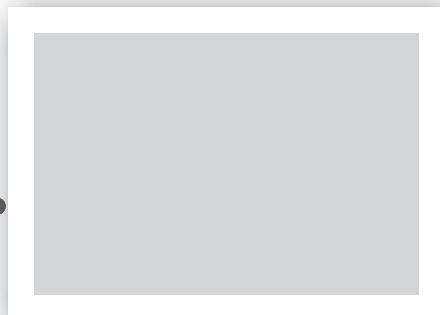
小単元名 (時間数)	○主な学習活動	・指導上の留意点 ★合科的な指導
<p>2 がっこうの はてなや びっくりを みつけよう (12時間)</p>	<div data-bbox="448 331 1401 472" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>〔小単元の目標〕学校を探検したり、見付けたことなどを表現したりして、学校の施設の様子や学校生活を支えている人々などについて考えようとする。</p> </div> <p>○学校を繰り返し探検して、驚いたこと（びっくり）やもっと知りたいこと（はてな）を個人やペア、グループなどで見付ける。(A) (生6)</p> <p>○学校を探検して見付けたことなどを絵や言葉に表したり、友達に伝えたりする。(B) (生2・国2⅓・図1⅓)</p> <p>* 学校を探検する活動(A) (生活科：1時間)とそこで見付けたことなどを表現する活動(B) (生活科+国語科又は図画工作科：1時間)の2時間を一つのまとまりとして6回繰り返す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全教職員に活動の意図などを伝えて、学校全体の協力体制を作る。 ・学校を探検する活動とそこで見付けたことなどを表現する活動を何度も繰り返す。 ★感じたことから表したいことを見付け、どのように表すかについて考えること【図】 ★伝えたい事柄や相手に応じて、声の大きさや速さなどを工夫すること。互いの話に関心をもち、相手の発言を受けて話をつなぐこと【国】
<p>3 じぶんの だいすきや なかよしを おしらせ しよう (4時間)</p>	<div data-bbox="448 1216 1401 1395" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>〔小単元の目標〕学校探検を通して気付いたことなどの中から、自分が伝えたいことを選んだり伝え方などを考えたり、保護者に学校を案内・紹介したりして、学校での生活は様々な人や施設と関わっていることが分かり、楽しく安心して生活しようとする。</p> </div> <p>○自分が伝えたい「学校の大好き」「学校の仲よし」を選んで、伝え方などを考える。(生1・国1)</p> <p>○授業参観などで、保護者に「学校の大好き」「学校の仲よし」を伝えたり、案内・紹介したりする。(生1・国1)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ★経験したことから話題を決め、伝え合うために必要な事柄を選ぶこと【国】 ・伝えたい内容に合う伝え方を考えることができるように、伝え方の例を提示したりアイデアを出し合って整理したりする。 ★伝えたい事柄や相手に応じて、声の大きさや速さなどを工夫すること【国】 ・保護者に簡単な感想などを伝えてもらおうと、自分たちの活動や頑張りに自信をもつことができる。 ・伝えたいことを教室のテレビ等に映しながら紹介することも考えられる。

がっこうだいすき なかよしいっぱい



**「学校のこと、もっと知りたいな」
「私も行きたい」**

入学当初の子供にとって学校は不思議や驚きでいっぱい。そのわくわく感を大切に探検を始めましょう。



**「わあ、お皿がたくさんあるね」
「お鍋も大きいよ」**

大きな鍋、調理員さんの長いエプロン、厚い手袋。給食室には、学校の施設や人に興味をもつきっかけがたくさんあります。



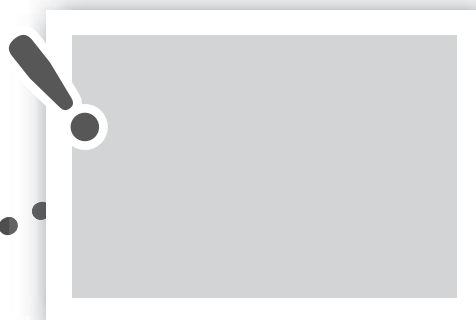
「音楽室の上に、『謎の的』がありました。何の的だろうと思いました」

子供は、自分で発見したことを伝える中で、話し方を学んでいきます。国語科における「伝えたい事柄や相手に応じて、声の大きさや速さなどを工夫すること。互いの話に関心をもち、相手の発言を受けて話をつなぐこと」を合科的に指導します。



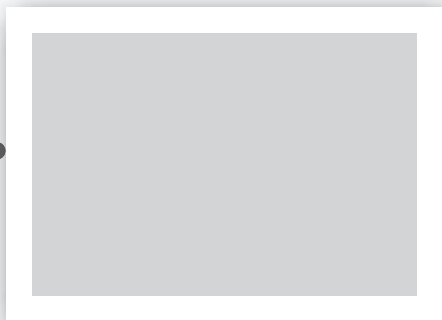
**「わあ、きれいな声が聞こえるよ」
「何年生かな」**

目に見えるものだけでなく、音やにおいなど諸感覚を働かせて探検する子供たち。発見した驚きが、次々と探検する場所を広げていきます。



**「音楽室の『謎の的』は、何ですか」
「あれは、声の的です」**

自分の謎を解決するために、進んでインタビューする子供たち。学級の友達とインタビューの練習をしてから、探検に出かけます。



**「先生、あのね。こんなに大きな
お鍋があったんだよ」**

子供は、探検での発見や驚きをすぐ伝えたいくなります。教師は、子供の思いをしっかり受け止め、次への活動につなげましょう。



**「先生、絵を描きたいな」
「私も」**

豊かな体験をすると子供は絵に描き表したくなります。図画工作科における「感じたことから表したいことを見付け、どのように表すかについて考えること」を合科的に指導します。



**「廊下は静かに歩いていくといいよ」
「幼稚園でもそうだったよ」**

次の探検では自分の経験を基に、学校のルールやマナーを確認していきます。



**「学校って楽しいよ」
「学校のことをたくさん教えてくれて、
うれしいよ」**

伝えたことに自信をもった子供は、また、次の活動にチャレンジしていきます。



**「優しく教えてくれたよ。
声を集める的だなんて、びっくり」**

繰り返し探検する中で、子供は、学校の施設やそこで働く人に出会います。発見した喜びを保護者にも伝えたいくなります。

実践事例 2 「はるのがっこう こんにちは」

単元の目標

校庭の春を見付けたりそれを使って遊んだり表現したりする活動を通して、校庭の春で楽しく遊ぶことについて考え、春の校庭の様子に気付くとともに、校庭で見付けた春や遊んで楽しかったことなどについて、表し方を工夫して描くことを楽しんだり、自分たちの作品のよさなどについて感じ取ったりし、楽しく安心して遊びや生活をすることができるようにする。

単元の展開（全 8 時間：生活科 6＋図画工作科 2）

小単元名 (時間数)	○主な学習活動	・指導上の留意点 ★合科的な指導
1 はるを たのしもう (生活科 2 時間)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> [小単元の目標] 校庭に出掛けて春を感じたり、楽しんだりして、校庭の春に関心をもつ。 </div> ○校庭の春を感じる。 ○楽しかったことや見付けたもの、気付いたこと、知りたいこと、もっとやりたいことなどについて、発表し合う。	・季節の変化を諸感覚を通して感じられるようにする。 ・校庭に出たいという児童の思いを大切にして、入学当初から校庭で活動できる学校体制を整える。
2 はると あそぼう (生活科 4 時間)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> [小単元の目標] 校庭の春を見付けたり、それを使って遊んだりして、春の校庭で遊ぶことの楽しさに気付き、その特徴を生かして楽しく遊ぼうとする。 </div> ○校庭の春を見付ける。 ○校庭の春を使って、楽しく遊ぶ。	・園庭の草花で遊んだ経験などを引き出しながら活動を進める。 ・国語科の教科書に春に関係するページがある場合には、その部分と合科的・関連的に指導することも考えられる。 ・校庭で見付けた植物や学校で飼育している動物との出会いをきっかけに、生活科の飼育・栽培単位につなげていくことも考えられる。

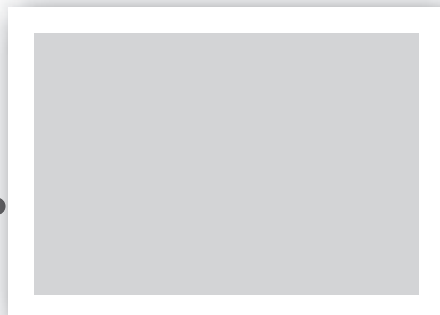
小単元名 (時間数)	○主な学習活動	・指導上の留意点 ★合科的な指導
3 はるが いっぱい (図画工作科 2時間)	<div data-bbox="446 344 1401 526" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>〔小単元の目標〕学校探検を通して気付いたことなどの中から、自分が伝えたいことを選んだり伝え方などを考えたり、保護者に学校を案内・紹介したりして、学校での生活は様々な人や施設と関わっていることが分かり、楽しく安心して生活しようとする。</p> </div> <p>○校庭で見つけた春や遊んで楽しかったことなどを絵に描く。</p> <p>○描いた絵を教室中に貼って、友達の絵を見たり、教室が春でいっぱいになったことを楽しんだりする。</p>	<p>★感じたことから表したいことを見付け、どのように表すかについて考えること【国】</p> <p>・伝えたい内容に合う伝え方を考えることができるように、伝え方の例を提示したりアイデアを出し合って整理したりする。</p> <p>★自分たちの作品の造形的な面白さや楽しさ、表したいこと、表し方などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げること【国】</p> <p>・保護者に簡単な感想などを伝えてもらおうと、自分たちの活動や頑張りに自信をもつことができる。</p>

はるのがっこう こんにちは



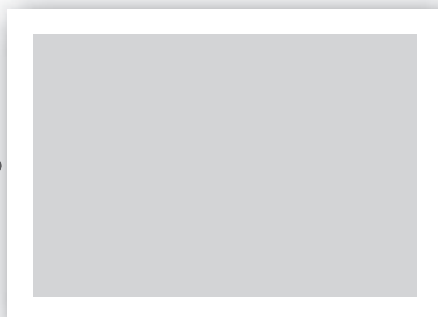
「広い校庭で遊んでみたい！」
「花がいっぱい咲いていて楽しそう。」

入学当初の子供たちは、広い校庭で遊ぶことが楽しみで仕方ありません。その思いや願いを実現しながら、学びへとつなげましょう。



「うわあ！校庭って広いなあ。」
「私はこっちに行ってみよう。」

初めての校庭には、驚きがいっぱい。好奇心も高まります。思い思いに遊ぶことで、一人一人のよさが発揮されます。



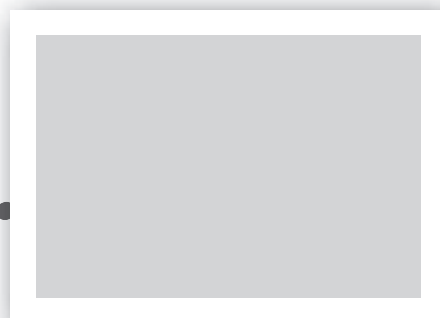
「チューリップがいいにおいだね」
「本当？どれどれ…。」

諸感覚を働かせて春を感じていきます。友達の様子を見たり声を聞いたりしながら、自分もやってみたいと、関心を広げていきます。



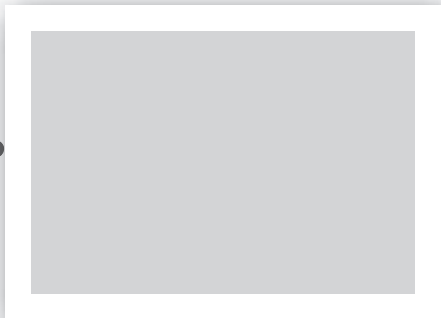
「ここにオタマジャクシがいるよ！」
「校庭には池もあるんだね。」

意欲が高まった子供たちは、校庭の隅々まで進んで出掛けていきます。発見を友達と伝え合いながら、また新しい発見をしていきます。



「シロツメクサで冠ができたよ。」
「綿毛が遠くまで飛んでいくよ。」

子供たちの多くは、幼児期に園庭などの草花で遊ぶ経験をしています。それを発揮したりほかの子供たちに広げたりしながら、春の楽しさを味わいます。



「あっ！これはタンポポ。」

「保育所にもいっぱい咲いていたよ。」

探したり見付けたりする活動を通して、友達関係が自然と広がっていきます。園などでの経験を大切にしながら、それを引き出したりつないだりしていきます。



「広い校庭で遊ぶと楽しいです。」

「お花がいっぱい咲いていました。」

気付いたことや楽しかったことを伝え合うと、もっとやりたいことが生まれてきます。それをきっかけに、次の活動へとつなげていきます。



「見て見て！暖かくなったから、

石をどけたらダンゴムシがいたよ。」

園などでの経験から、どこにどの生き物がいるかを知っている児童も多くいます。そのような経験を引き出し、広げていくと、学級の活動が活性化していきます。



「友達が描いた春も素敵だね。」

「教室が春でいっぱいになったよ！」

自分たちの作品を教室中に展示して鑑賞することで、友達の作品のよさに気付いたり、春の校庭の楽しさを実感したりしていきます。クラスの友達との一体感も味わいます。



「校庭で見付けた生き物を描くぞ！」

「綿毛の白はどうやって描こうかな。」

図画工作科における表現や鑑賞の内容と合科的に指導します。表したいことを見付けたり、表し方を考えたりする場面を設定します。

2 教科の学習活動の実践事例

平成29年3月に改訂された小学校学習指導要領では、第1章総則第2の4「学校段階等間の接続」において、幼児期の教育と小学校教育の接続について、次のように示されている。

(1) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。

また、低学年における教育全体において、例えば生活科において育成する自立し生活を豊かにしていくための資質・能力が、他教科等の学習においても生かされるようにするなど、教科等間の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるよう工夫すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。

スタートカリキュラムでは、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を発揮できるように指導方法や時間配分、活動内容等を工夫することで、より自覚的な学びに向かうことが可能となる。

その際、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導の工夫を教科等の学習の始めに組み込み、児童が主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうようにしたい。

その際、以下のポイントに配慮することが考えられる。

学習活動を構成するポイント

- 幼児自身が自発的・能動的に環境に関わりながら生活に必要な能力や態度などを獲得していくという幼児期の特性を生かせるように、体験活動を取り入れる。その際、一人一人の経験の違いや園での活動の違いに留意する。
- 安心して取り組めるように、友達と触れ合ったり、関わり合ったりするゲーム、名前を呼び合う活動などを多く取り入れる。
- 「安心をつくる時間」で行った活動をきっかけとしたり、活動にストーリー性をもたせたりする等、児童の実態や意識の流れを大切にする。
- 児童の生活リズムや集中する時間、意欲の高まりを大切にして、10分から15分程度の短い時間を活用して時間割を構成したり、2時間続きの学習活動を位置付けたりする。
- 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりに、幼児期の実態を把握し、児童が主体的に自己を発揮できるようにする場面を意図的につくるようにする。

ここに挙げた実践事例は、入学当初に考えられる事例として、国語科・算数科・図画工作科を、5月以降に考えられる事例として、音楽科・体育科を取り上げた。

4月	スタートカリキュラム 教科の実践例（国語科）
----	------------------------

1 単元名「よろしくね」

2 本単元につながる幼児期の子供の姿

幼児は、安心して話することができる雰囲気の中で、教職員や友達など身近な人々の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり話したりしながら、言葉で表現する楽しさや伝え合う喜びを味わう経験を積み重ねている。

また、幼児は遊びや生活の中で、人に何かを伝える、あるいは人と人とがつながり合うために文字が存在していることを感じ取り、文字が様々なことを表現するためのコミュニケーションの道具であることに気付いていく。例えば、レストランでメニューを作る際、本物らしくしようとする気持ちが高まってくると、絵だけでなく文字を使おうとする。分からない文字があると教職員や友達に聞いたり、「『めろんじゅうす』の『め』は、めいちゃんの『め』だね」と気付いて友達の名札を見て書いたり、「私、『め』は書けるよ」と友達が助けたりしながら、メニューを作り上げていく。そして、「いらっしゃいませ。何にしますか」「『めろんじゅうす』ください」などのやり取りが行われ、文字があることで相手に伝わる楽しさや遊びが面白くなることを感じ、文字への関心は更に高まっていく。

3 単元について

（1）単元の目標

名刺カードを作ったり交換したりする自己紹介の活動を通して、相手によく分かるように、自分の名前などを丁寧に書いたり、友達に知ってもらいたいことを考えたりする。

（2）単元の指導計画（全6モジュール）1モジュール＝15分

	○主な学習内容 ・学習活動
2モジュール	○姿勢や鉛筆の持ち方に気を付けて、自分の名前などを丁寧に書く。 ・書くときの姿勢や鉛筆の持ち方を知り、学年・組・自分の名前を練習する。
2モジュール	○自分の名前などを丁寧に書いたり、友達に知ってもらいたいことを考えたりする。 ・名刺カードに、自分の名前などを書き、友達に知ってもらいたいことを絵で表す。
2モジュール	○自分の名前や友達に知ってもらいたいことを友達に伝えて、自己紹介をする。 ・名刺カードをクラスの友達と交換する。

4 本単元におけるスタートカリキュラムの指導について

幼児期には、自分の話や思いが相手に伝わり、相手の話や思いが分かる楽しさを感じる体験や、一人一人の幼児がその幼児なりの必要感をもって、標識や文字などに関心をもち、その役割に気付いたり使ったりしながら、感覚が磨かれるような体験をしている。

このような経験を生かし「自分のことを知ってもらいたい」「友達をいっぱい作りたい」という児童の思いや願いを実現する必要感をもったやり取りができるような言語活動を構成することが大切となる。

本単元は児童の発達特性を踏まえて、集中力や意欲を持続させるために、15分間の短時間学習6回で構成している。名刺カードの交換で児童は多くの友達と関わり、それを通して新しい友達関係を築き、安心感をもったり仲間意識が高まったりする。また、この時期の児童は、文字を書く経験の個人差が大きく、不安を抱いている児童も少なくない。教科書や児童のワークシートの拡大版を黒板に貼ったり、イラストを使って視覚的に指示をしたりするなど、どの児童にも分かりやすい環境を構成することが重要である。


5 授業の実際（本時5～6／6モジュール）

（1）本時の目標

自己紹介に向け、作成した名刺の交換の仕方を考えたり、友達に話したいことや聞いてみたいことなどについて進んで話したり聞いたりしようとしている。

（2）本時の展開【吹き出しはスタートカリキュラムの指導のポイント】

主な学習活動	指導上の留意点
<p>○前時を振り返って、本時のめあてや見通しを立てる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>ともだちを いっぱい つくるために なまえかあどを こうかんしよう</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・名刺カードに自分の名前などを書いたことを想起できるようにし活動の目的を明確にする。
<p>○名刺カードの交換方法を話し合っ て決める。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・挨拶（はじめまして。よろしくね。友達になってね。） ・自分の名前 ・絵に描いたこと（好きなものや好きな色など） ・握手 など </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・名刺カードの交換方法を児童と考えることを通して、活動への意欲を高める。 ・児童と教師が教室の前で名刺カードの交換を実際にやってみるなどして、活動の仕方を理解できるようにする。 <div style="background-color: #e0e0e0; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>アイデアをみんなで出し合い、モデルを自分たちでつくる経験をすることで、「学校も自分たちで考えて決めていくんだ!」という安心感や意欲、学習への構えが生まれる。</p> </div>

<p>○自己紹介をしながら、名刺カードを交換する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はじめまして。友達になってね。 ・犬が好きなんだね。私も好きだよ。家で飼っているの？ ・うん、かわいい犬がいるよ。今度見に来てね。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分から声を掛けることができない児童には、声の掛け方を教えて一緒にやってみたり、他の児童とつないだりする。 ・男女間や違う園出身の友達と自分から交換している児童や、友達の名刺カードの絵を見て質問をするなどしている児童を「ともだちいっぱい」の視点で褒め、学級全体に紹介する。 <p>絵が話すきっかけになる。質問する力や対話する力は全ての学習において重要となるので、繰り返し取り上げて指導する。</p> <p>名刺カードは、新しくできた友達の人数を可視化することができる。家庭に持ち帰って話もでき、保護者の安心感につながる。</p>
<p>○本時を振り返って、名刺カードを交換した感想を発表し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8人も友達ができて嬉しいな。 ・もっと友達をつくりたいな。 ・名刺を作ってまた交換しよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい友達ができた喜びを共感的に受け止める。 ・継続的な活動に応えられるよう日常的に白紙の名刺カードを教室に準備しておく。

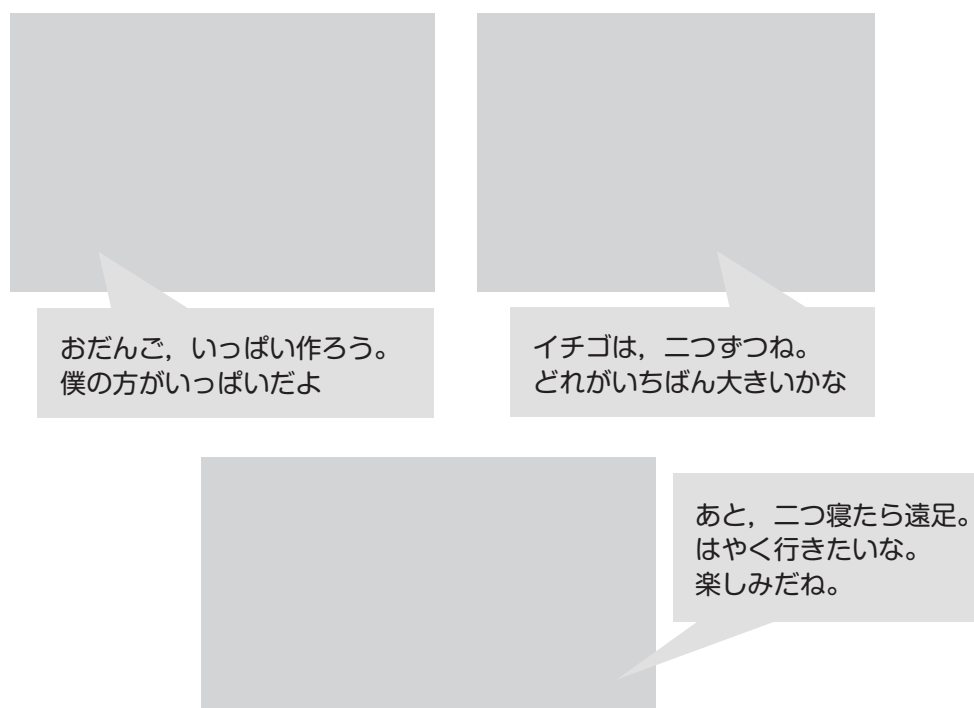
4月	スタートカリキュラム 教科の実践例（算数科）
----	------------------------

1 単元名 「なかまづくりとかず」

2 本単元につながる幼児期の子供の姿

幼児は、遊びや生活の中で、必要感をもって人数や事物を数えたり、量を比べたりすることを体験している。

例えば、ドッジボールで負けたことが悔しくて両チームの人数を数え、「少ないから負けた」と言って同じ人数に分けることで遊びが続き、楽しくなっていく。また、芋掘りをして袋の大きさを見ながら持ち上げて重さの違いに驚き、袋から芋を出して見比べる幼児がいたり、芋の大きさや形の違いに気づき、友達と一緒に分けることを楽しむ幼児がいたりする。それぞれの過程では、自分の気付いたことや考えたことを教師や友達と伝え合い、そのことを共有しながら、遊びが発展していく。



また、積み木などの遊具だけでなく、様々な形の空き箱や身近な自然を取り入れて遊びに必要なものを作ったり、身近な動植物に親しむ中で、花びらや葉、昆虫や魚の形などに気付いたりするなど様々な場面で図形に親しんでいる。

3 単元について

(1) 単元目標

10までの数について、個数の数え方や数の読み方、書き方、数の構成などを理解し、数を用いることができるようになる。

(2) 単元の指導計画（全11時間） 1 モジュール=15分

	○主な学習内容 ・学習活動
3モジュール	○いろいろな観点や条件に応じて、集合を作ったり、一つの集合に対してその集合の観点や条件を考えたりすることができる。 ・絵を見て自由に話し合いながら、同じ条件の集合に着目する。
3モジュール	○集合の要素の個数の多少を1対1対応の方法で比べることができ、数が同じ、違うなどの意味を理解する。 ・数の多少を線で結んだり、ブロックを用いたりして比較する。
3～11	○数の大きさを表す数詞と数字が対応していることを知り、ものの数を数えることができる。 ・絵を見て、いろいろな集合を見付け、要素の個数に着目する。 ・数詞を対応させる。 ・各要素の数や数図に数字を対応させる。 ・具体物を数える練習をする。 ・数字の書き方を知り、書く練習をする。 ・数の大小比較をする。・0という数について知る。・大きい数から小さい数の順に唱えたり、途中の数から唱えたり、2ずつ交互に唱えたりする。

4 本単元におけるスタートカリキュラムの指導について

幼児期には、一人一人の幼児がその幼児なりの必要感をもって、数量等に関心をもち感覚が磨かれるような体験や、安心して考えを伝え合う中で、自分とは異なる考えに気付く、新しい考えを生み出す喜びを味わうような体験もしている。児童が算数のよさを認識し、学ぶ楽しさや意義を実感できるようにするには、こうした幼児期の体験などを生かし、実生活との関わりを意識した数学的活動の充実を図ることが大切である。

まずは、何でも話してよいという安心感のもてる学級の風土づくりから始めたい。教科書にある動物の絵を見て、発見したこと、気付いたことを出し合う。自分が感じたことをどんどん話してもよいのだと児童自身が実感できることが大切である。児童が自分の言葉で伝え合う中で、数についての関心や学び方を少しずつ身に付けていくことができるからである。

そして、教科書で学んだことを教室や学校の中での具体物や実生活での具体的場面に結び付ける活動を取り入れることで、くらしの中で数が存在していることを自覚化できるようにしていきたい。

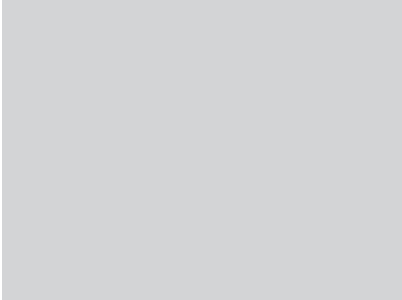

なお、次の事例は、入学当初の児童の発達の特性に配慮し、単元の前半は15分間の短い時間を活用して授業を行っている。

5 授業の実際（本時1モジュール／11時間）

(1) 本時の目標

いろいろな観点や条件に応じて、集合を作ったり、一つの集合に対してその集合の観点や条件を考えたりすることができる。

(2) 本時の展開【吹き出しはスタートカリキュラムの指導のポイント】

主な学習活動	指導上の留意点
<p>○教科書の絵を見て、気が付いたことや思ったことを出し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カバがいます。・ネコがいます。 ・本当だね。ランドセルもあります。 ・ライオンは、先生だと思います。 <p>「座っているのは、どの動物ですか」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ネコです。・パンダもです。 <p>「ランドセルを背負っている動物は何ですか」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブタです。・イヌも背負っています。 ・背負っていないイヌもいるよ。 <p>「どうして間違えちゃったんだと思う」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・座っていたから気付かなかったんじゃない。 ・なるほどね。 ・ブタは帽子をかぶっているよ。 ・イヌは、帽子をかぶっていないね。先生におはようございますって挨拶しているから帽子を取ったんじゃない。  <p>「どうしてそう思ったの」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・僕もね野球のコーチに挨拶するとき帽子を取るからなんだ。 ・なるほどね。 <p>「いろいろな仲間が作れたね。次はみんなでやってみよう」</p>	<p>○教科書の絵を見て、自由に話し合いながら同じ観点や条件の集合に着目できるようにする。</p>  <p>数のことに直接関係がない発言も大いに認め、まずは、みんなの前で自分が考えたことを安心して発言できる雰囲気をつくることが大切である。</p> <p>○どうしてそう思ったか、前に出て説明できるように、教科書を拡大して示すようにする。</p> <p>どうして間違ってしまったかを考えることは、必要感をもった話合いにつながるので、大切にしたい。間違った児童に対して「〇〇さんのおかげで、いい勉強ができたね」などと声を掛けたい。</p> <p>○友達の発言について、隣同士で確かめる機会をつくるなどして集合として捉えられているか確認する。</p> <p>○「半そでの服を着ている人」「ハイソックスの靴下を履いている人」など、集合の観点や条件を変えて集合作りを楽しめるようにする。</p>

5月

スタートカリキュラム 教科の实践例（音楽科）

1 題材名「はくをかんじとろう」

2 本題材につながる幼児期の子供の姿

幼児は、感じたり考えたりしたことをそのまま率直に表現することが多い。また、身振りや動作、顔の表情や声など、自分の身体の動きや音や形などに託して、自分なりの方法で表現している。

遊びや生活の中では身近にあるいろいろな物を楽器のようにして遊ぶ、身近な楽器の音色を楽しんだり、リズムを感じたりする、即興的に歌う、誰かが歌い出すと合わせて歌いはじめる、友達と一緒に踊ったり合奏したりするなどのことを楽しんでいる。

幼児は、自分なりの表現や楽しさを教職員や友達と受け止め合いながら音や音楽で十分に遊び、友達と一緒に表現する楽しさを味わっている。

3 題材について

(1) 題材の目標

音楽に合わせて歌ったり体を動かしたりしながら、拍の流れにのって表現する喜びを味わう。

(2) 題材の指導計画（全4時間）

	○主な学習内容 ・学習活動
1	○「なまえあそび」など言葉を使った遊びを通して、拍の流れにのって言葉のリズムをつくる。 ・ 拍打ちに合わせて「○○○・」（タンタンタンウン）に入る言葉を見付ける。 ・ 「なまえあそび」のリレーをして楽しむ。
2	○ わらべうたを使った遊びを通して、拍の流れにのって表現を工夫する。 ・ 知っているわらべうたを紹介し合い友達と遊ぶ。 ・ 「おちゃらか」「なべなべそこぬけ」等、速度に変化をつけ、歌いながら手遊びをする。
3	○ 歌ったり体を動かしたりして、拍の流れにのって表現を工夫する。
4	・ 「さんぽ」を聴いて歌ったり手拍子をしたりする。 ・ 「さんぽ」に合わせて足踏みや行進をする。 ・ 教師の伴奏による様々な速度や強弱の「さんぽ」を聴いて歩いたり体を動かしたりする。

4 本題材におけるスタートカリキュラムの指導について

幼児期には、幼児自らが興味のある音や音楽で十分に遊び、感じたことや考えたことを自分なりに工夫して表現する楽しさを味わうとともに、友達同士で表現する過程を楽しむ体験をしている。

本題材では、わらべうたや手遊びうたなど、園で遊んだことのある曲を、可能な限り教師が取り上げ、児童が周囲と共有・共感しながら、みんなと楽しく歌ったり踊ったりすることを心掛けたい。そのことで、自分の知っている曲を聞いて活動できる充実感や、友達と一緒に遊ぶ満足感を得て、これからも音楽科の時間を楽しく安心して取り組むことができる雰囲気が醸成される。また、一緒に歌ったり踊ったりする環境構成としては、児童が自由に体を動かすことができる場を整えたい。音楽室のほかにも、オープンスペース、多目的ホール等を活用したり、教室でも机や椅子を後方や廊下等に移動して児童がすぐに手遊びできる場をつくったりすることを心掛けたい。なお、本題材で取り上げるわらべうたや手遊びうた、「なまえあそび」のリレーや楽曲「さんぽ」（作詞：中川李枝子，作曲・編曲：久石譲）を使った足踏みや行進などの学習活動は、音楽科の時間に限らず、朝の時間、昼休み、帰りの時間などで、時間を見付けて継続的に取り上げることで、仲間づくり、居場所づくりにも効果的に働く。

5 授業の実際（本時 1 / 4）

（1）本時の目標

「なまえあそび」など言葉を使った遊びを通して、拍の流れを感じ取るとともに、拍にのって言葉のリズムをつくり出す喜びを味わうことができるようにする。



(2) 本時の展開【吹き出しはスタートカリキュラムの指導のポイント】

この時期の児童にとって、学級への所属感をもつことは、大変重要である。少ない時間でも日頃から児童の知っている曲を取り上げ、歌ったり踊ったりしておくことで、自分の存在が認められ安心して音楽の授業に臨むことができると思われる。

主な学習活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ○「なまえあそび」をして拍の流れを感じ取る。 ・教師の打つ拍に合わせて、 「教師：『○○さん・』 児童：『はあい・』」 の遊びをする。 ・「お名前は」「○○です」の遊びを教師と児童、または友達同士でする。 <ul style="list-style-type: none"> ○拍打ちに合わせて、「なまえあそび」を工夫する。 ・「○○○・」に入る好きな3文字をみんなで見つける。 ・1人→1人、1人→全員などで拍打ちにあわせて「なまえあそび」をする。 <ul style="list-style-type: none"> ○「なまえあそび」のリレーをして楽しむ。 ・拍の流れにのって、「○○○・」の中に入る言葉のリズムを当てはめながらリレーをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○教師は一定の速度で拍打ちをするようにするとともに、児童の様子を見ながら、その速度を調整して、児童が安心して答えることができるようにする。 ○「タンタンタンウン」の4拍子のリズムに合わせて、児童の名前を呼び、教師が例示しながら、「はあい・」とリズムをとることができるようにする。 <div data-bbox="783 902 1428 1055"> <p>拍に乗れるように教師がテンポを調整するとともに、励ましたり誉めたりしてなごやかな雰囲気の中で進められるようにする。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ○児童から出た言葉を板書したりヒントになる絵や言葉のカードを掲示したりしながら、どの子も拍打ちに合わせて唱えられるようにする。 ○「タンタンタンウン」と4拍目（ウン）に休符を入れながら、みんなの手拍子がそろうように助言する。 ○リレーをする際は、3文字の言葉を自分の隣の子へ丁寧に渡すような気持ちで、唱えるように助言する。 <div data-bbox="783 1641 1428 1794"> <p>拍にのることや、3文字に収めることができなくとも、一生懸命取り組んだり丁寧に取り組んだりしていることを取り上げて、褒めたい。</p> </div>

第2時では、わらべうた、手遊びうたなどは、園で覚えた曲を可能な限り取り上げ、一人一人を認めながら進めたい。第3、4時では、ペアや4、5人のグループで活動を行い、児童が友達と一緒に楽しく活動できるように配慮したい。

4月

スタートカリキュラム 教科の実践例（図画工作科）

1 題材名「すきなもの いろいろ」

2 本題材につながる幼児期の子どもの姿

幼児は、園生活の様々な場面で、不思議さや美しさなどを感じ、心を動かしている。そのような心の動きを自分なりに表し、教師や友達に受け止められ、さらに表現することを楽しむようになる。また、体験したことなどをかいたり、様々なものをつくったり、それを遊びに使ったり、飾ったりして楽しんでいる。

例えば、丸をかいて「ぶどう」と教師に見せ、教師がそれをおいしそうに食べるふりをすると、様々な色で丸をかき、食べ物に見立てて楽しむ。遊びに必要なものができる、素材や用具の置いてある場所に行き、色や形、質感などを選んでつくり、そこに模様などをかいて大切に使う。親しみをもって世話をしている生き物を友達と一緒にかいているうちにお話が生まれ、思い付いたことを伝え合いながら自由にかき足していく。

このように、幼児は表現したい思いや遊びの中での必要性から、自分のつくりたいもの、かきたいもののイメージがはっきりしてきて、そのイメージに合った素材や表現の仕方を考えるなど、工夫して楽しむようになっていく。

3 題材について

（1）題材の目標

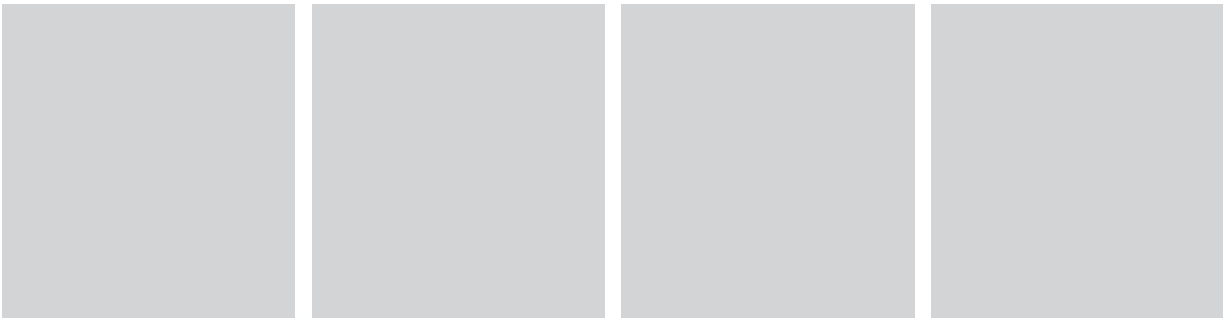
自分の好きなものや好きなことから表したいことを見付け、表し方を工夫して絵に表す。

（2）題材の指導計画（全2時間）

	○主な学習内容 ・学習活動
1、2	<p>○自分の好きなものや好きなことを思い浮かべ、表したいことを見付ける。</p> <p>○好きなものや好きなことの形や色を考えながら、画用紙やクレヨンやパスの色を選ぶ。</p> <p>○手や体全体の感覚などを働かせ、好きなものや好きなことをクレヨンやパスを使って工夫して表す。</p> <p>○自分や友達の作品を見て、面白さや楽しさを感じ取り、自分の見方や感じ方を広げる。</p>

4 本題材におけるスタートカリキュラムの指導について

幼児期には、心を動かす出来事などに触れてイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ中で身近にある素材の特徴や表現の仕方などに気付き、自分なりに工夫して表現する楽しさを味わっている。また、友達と思いなどを伝え合い、イメージや考えを広げながら遊びを進めていく体験もしている。本単元では、子供の好きなことや好きなものなどについて、話をしたり聞いたりして、楽しい気持ちでかくことができるようにしたい。



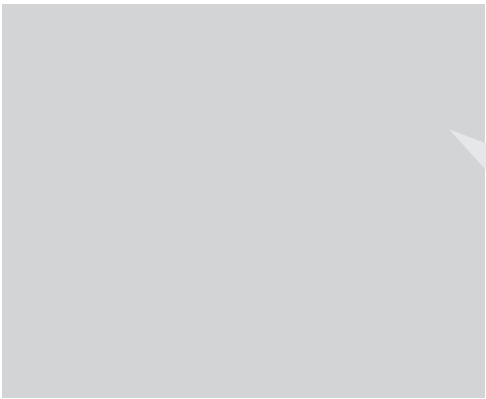
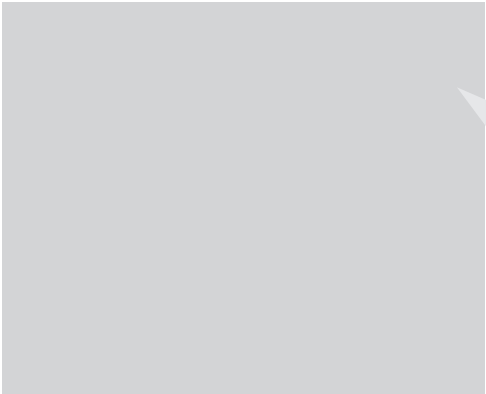
5 授業の実際（本時 1， 2 / 2）

（1）本時の目標

自分の好きなものや好きなことから表したいことを見付け、表し方を工夫して絵に表す。

（2）本時の展開【吹き出しはスタートカリキュラムの指導のポイント】

主な学習活動	指導上の留意点
<p>みんなの好きなものは何かな？絵に表してみよう。</p> <p>○自分の好きなものや好きなことをかく活動に興味や関心をもつ。</p> <p>友人の発言をきっかけにして様々な体験や経験を想起し、表したいことを見付けられるようにする。</p>	<p>○「みんなの好きなものは何かな？」と問いかけ、それぞれの子供が好きなものや好きなことを思い浮かべられるようにする。</p> <p>○子供の言葉を、動物、食べ物、乗り物、植物などに分けて板書し、それを見ながら発想できるようにする。</p>
<p>画用紙の大きさや、クレヨンやパスの色を選んで、工夫して絵に表そう。</p> <p>○自分の好きなものや好きなことの形や色を考えたり選んだりしながら、画用紙の大きさやクレヨンやパスの色を選ぶ。</p> <p>○思いのままにかいたり、色を付けたり試したりしながら、クレヨンやパスなどを使って、表し方を工夫してかく。</p>	<p>○画用紙は小さく切ったものを用意し、何枚もかけるようにし、かきたいものを次々と思い浮かべかくことを大切にする。</p> <p>○かいた絵を見ながら、好きなものや好きなことについての話を聞き、さらに表したいことを思い付き、絵に表すことに主体的に取り組めるようにする。</p>

	<p>「かくことが楽しい！」という気持ちを基にいろいろな形や色を選んだり，考えたりしながら，どのように表すかについて考えられるようにする。</p>
<p>友達の作品を見てみよう。</p>	
<p>○絵に表した自分の好きなものを紹介したり，友人のかいた絵の楽しいところや面白いところを話したりして，自分たちの作品を楽しく見る。</p>	<p>○グループの中で見合ったり，学級全体で見合ったりする。学級全体で見合う場合は，かいた絵を机の上に並べ，作品を見やすくする。</p>
	<p>友達の作品から感じたことや考えたことなどを自由に話し合い，その面白さや楽しさ，表し方などについて自分の見方や感じ方を広げられるようにする。</p>

COLUMN 【道徳科における指導の留意点】

道徳科は，道徳的諸価値の理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方について考えを深める学習を通して，道徳性を養うことを目的として行われる。第1学年の発達段階から，道徳的諸価値のよさに気付いていなかったり，実現されていなかったりする実態が考えられることから，道徳的価値について理解する学習を欠かすことはできない。しかし，指導の際には，特定の道徳的価値を絶対的なものとして指導したり，本来実感を伴って理解すべき道徳的価値のよさや大切さを観念的に理解させたりする学習に終始することのないように配慮することが大切である。

5月

スタートカリキュラム 教科の实践例（体育科）

1 単元名「みんなで あそぼう」**2 本単元につながる幼児期の子供の姿**

幼児は、走ったり、跳んだり、転がったり、ぶら下がったり、投げたり、好きなものになりきって動いたりといった自分の体を動かすことが好きである。園にある遊具や用具に興味をもったり、教職員や友達の動きに誘われたりして、次第に全身を動かし、その楽しさや心地よさを味わうようになる。そして、「できるようになりたい」と自分なりの目標に向けて取り組む中で、教職員や友達の動きをよく見てまねたり、やり方を聞いたり、応援されたりしながら繰り返し挑戦し、やり遂げる達成感を味わうようになる。

また、友達とルールのある遊びを楽しみ、競ったり協力したりして自分たちの力を発揮するようになる。さらに、様々な遊びにおいて、その遊びが楽しくなるように考えを出し合いながらルールをつくったり変えたりもするようになる。

3 単元について**(1) 単元の目標**

関わり合いながら行う手軽な運動をしたり、固定施設を使って自分の体を動かしたりすることを通して、運動遊びの仕方を知り、楽しく遊ぶことができる遊び方を選ぶとともに、場の安全に気を付け、友達と仲よく取り組むことができる。

(2) 単元の指導計画（全4時間：体づくり運動2時間・固定施設を使った運動遊び2時間）

	○主な学習内容 ・学習活動
1～2	<p>○関わり合いながら行う手軽な運動をする。</p> <p>・「だるまさんがころんだ」や簡単な鬼遊びなど、幼児期に親しんできた遊びや活動（伝承遊びや集団による運動遊び）を楽しむ。</p> <p>○いろいろな登り下りやぶら下がり、懸垂移行、渡り歩きや跳び下りなどをする。</p> <p>・ジャングルジムや鉄棒、雲梯、登り棒などの校庭の固定施設を使って、いろいろな動きをして遊ぶ。</p>
3～4	<p>○用具などを用いた運動をする。</p> <p>・ボール挟みリレー、フラフープ送り、ゴム跳び遊びなど、伸び伸びとした動作で用具などを用いた遊びや活動を楽しむ。</p> <p>○いろいろな登り下りやぶら下がり、懸垂移行、渡り歩きや跳び下り、逆さ姿勢などをする。</p> <p>・ジャングルジムや鉄棒、雲梯、登り棒などの校庭の固定施設を使って、工夫した動きをして遊ぶ。</p>

4 本単元におけるスタートカリキュラムの指導について

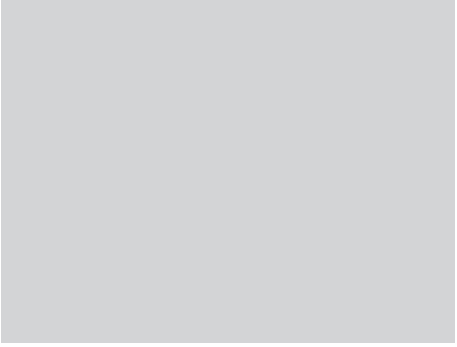
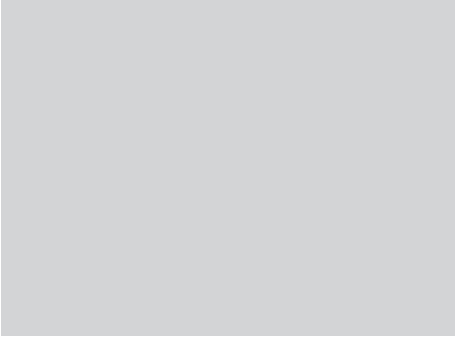
幼児期には、遊びや生活の中で自分のしたいことに向かって、心と体を十分に働かせること、見通しをもつこと、自分たちで進めること、やり遂げることで自信をもつことなどを体験している。また、友達と共通の目的の実現に向けて、考えなどを共有し、工夫したり協力したりなどもする。このような経験や入学直後の施設への関心を生かし、友達と関わり合う活動や遊具を使って遊ぶ活動を取り入れ、協力して目的に向かう喜びを味わうことが大切である。その際、安心して取り組むことができるように、幼児期に親しんできた遊びや活動を取り入れたり、経験してきたルールやきまりを想起したりして、体づくり運動に取り組むとよい。このような運動の経験が、休み時間などの遊びにもつながり、友達と過ごす学校での生活を豊かにしていく。

5 授業の実際（本時2／4）

(1) 本時の目標

関わり合いながら行う手軽な運動や固定施設を使った運動遊びをすることで、いろいろな動きをすることができる。

(2) 本時の展開【吹き出しはスタートカリキュラムの指導のポイント】

主な学習活動	指導上の留意点
<p>○遊びながら運動に向かう準備をする。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・体でじゃんけんをしたり，動物や忍者になりきって動いたりするなど，楽しみながら体を動かすことができる遊びを取り入れる。
<p>○「だるまさんがころんだ」や簡単な鬼遊びなど，幼児期に親しんできた遊びや活動（伝承遊びや集団による運動遊び）を楽しむ。</p> <div data-bbox="284 1146 608 1361"> <p>広い校庭に不安を抱く児童もいる。新しく出会った施設を実際に利用することで，安心感が生まれる。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時でしたい遊びや活動を出し合うために，前時を振り返る。 ・幼児期に親しんできた遊びや活動を取り入れて，安心して運動できるようにする。 <div data-bbox="794 963 1385 1099"> <p>「こんなときはどうしていたの？」などと問い掛ける。困ったことも自分たちで解決していくという自覚を育む。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・園によって経験してきた遊びや活動が異なるので，ルールを話し合う活動などを適宜行う。 ・誰もが楽しんだり友達との関わりを増やしたりするために，遊びの工夫を教師から提案することも考えられる。 ・教師も児童と遊びや活動を楽しんだり，輪に入ることが難しい児童と一緒に取り組んだりする。
<p>○ジャングルジムや鉄棒，雲梯，登り棒などの校庭の固定施設を使って，いろいろな動きをして遊ぶ。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・固定施設を使って遊ぶ時の楽しい遊び方，ルールやきまり，してみたいことを出し合う。 ・児童が気付いていない安全面での注意事項は，教師が分かりやすく端的に示す。 ・ほかの児童が行っていない動きをしている児童を褒めたり紹介したりして，いろいろな動きを引き出したり広めたりする。 <div data-bbox="836 1787 1353 1899"> <p>実際の遊びや活動を通して，ルールやきまりを実感的に理解できるようにする。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・固定施設に苦手意識をもつ児童には，教師と一緒に遊んだり友達同士で遊べるよう声を掛けたりする。

3 安心して学校生活を送るための活動の実践事例

入学に際して、児童は期待と同時に不安を抱いている。スタートカリキュラムにおいて、幼児期に親しんだ活動を取り入れることにより、児童は安心して小学校での生活をスタートすることができる。加えて、教師や友達と関わる活動を通して、出会いの喜びや学校の楽しさを感じることができる。また、幼児期に大切にしてきた生活リズムや一日の過ごし方に配慮するなどして、時間の設定を工夫することも重要である。

例えば、週案を作成する際には、朝の会から1時間目を連続した時間として設定することも考えられる。そこに、幼児期に親しんできた手遊びや歌、リズムに乗って体を動かすことや絵本の読み聞かせ、児童からのお話タイムなど、児童が一日の始まりを楽しい気持ちで迎えられよう学習活動を取り入れることが、児童の安心や楽しさ、自己発揮につながっていく。

その際、以下のポイントに配慮することが考えられる。

活動を構成するポイント

○一つ一つの遊びや活動の特性を踏まえる。

児童が安心感をもち、新しい人間関係を築いていくためには、どのような特性をもった遊びや活動を取り入れるとよいかを考える必要がある。その特性とは、例えば、幼児期の経験を存分に発揮することができる、自分の好みやその日の気分に合わせて遊びや活動を選ぶことができる、友達と楽しく交流することができる、体を動かしたり声を出したりすることができる、児童一人一人のよさや発想、創意工夫を生かすことができる、などが考えられる。児童の実態と活動の特性を踏まえて、その時期により適切な活動を取り入れることが重要である。

○1時間の中での遊びや活動の構成を考える。

一つの遊びや活動を10～15分間程度と考えると、複数の遊びや活動（例えば3～5個）で1時間を構成するイメージをもつことができる。その際、複数の遊びや活動を単に並べていくだけでは、児童の安心感や人間関係の構築という目的を実現することができない。そこで、動きのあるものとそうでないもの、個別のものと（小）集団でのものといったものを、効果的に組み合わせることが重要である。例えば、始まりは自己選択の余地のある好きな遊び、次に落ち着いた雰囲気の中での読み聞かせ、そして体を動かしたり声を出したりしながら友達と関わっていく歌や手遊び、最後に教室の中で生き生きと体を動かしながら遊ぶじゃんけん列車、といった1時間の構成が考えられる。

○1週間の中での遊びや活動の連続性と発展性を考える。

この時間は、朝の会から1時間目を連続した時間として、毎日設定されることが考えられる。その際、1週間の中での遊びや活動の連続性と発展性を考えることが重要である。連続性とは、例えば、前日までと同じ遊びや活動や同じ構成で行うことであり、そのことは、安心感や自信、見通しをもって活動することにつながっていく。発展性とは、例えば、

遊びや活動の難易度が上がることで、友達との関わりが増えること、活動場所が広がること、などである。また、活動の中に、言葉や数といった教科等の学習につながる要素を意図的に取り入れていくことも考えられる。このようなことを意識して週案を作成することによって、児童は安心して楽しい遊びや活動に取り組みながら、前日より難しいことに挑戦したり、新しい友達関係を築いたり、学校の施設の様子などに気付いたりすることができる。

遊びや活動の具体例

活動例① 幼児期に親しんできた手遊びや歌

園では、心をほぐしたり、動きやリズムを楽しむんだり、注目を集めたりするために、日常的に手遊びを行っている。また、季節に合った歌や就学に向けて期待を膨らませるような歌を歌ってきている。それらの手遊びや歌を取り入れることで、「知っているよ!」「歌えるよ!」と安心感や意欲を生んだり、友達との関わりを増やしたりすることができる。

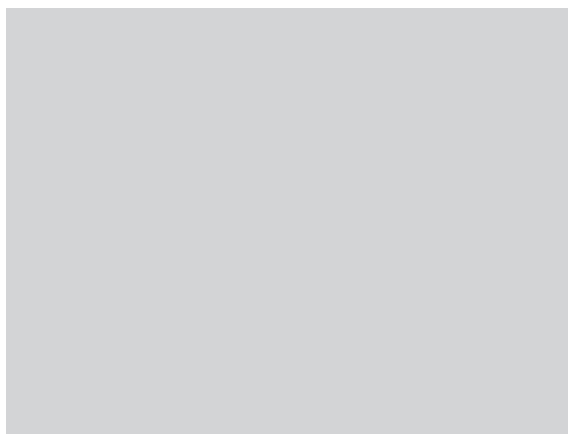
〈例〉ゲーチョキパーでなにつくろう、キャベツのなかから、1ねんせいになったら など



活動例② リズムに乗って体を動かすこと

園では、歌を歌いながら自然と体を動かすことを楽しんでいる。1日のスタートにそれらの活動を取り入れることで、気持ちが解放され、その後の活動にも意欲的に取り組むことができる。

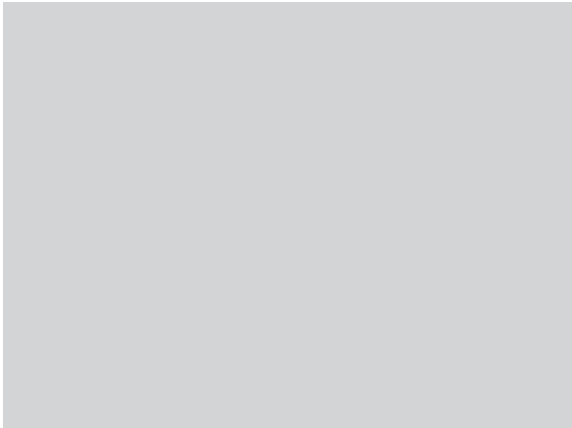
〈例〉さんぽ、じゃんけん列車、なべなべそこぬけ、アイアイ など



活動例③ 絵本の読み聞かせ

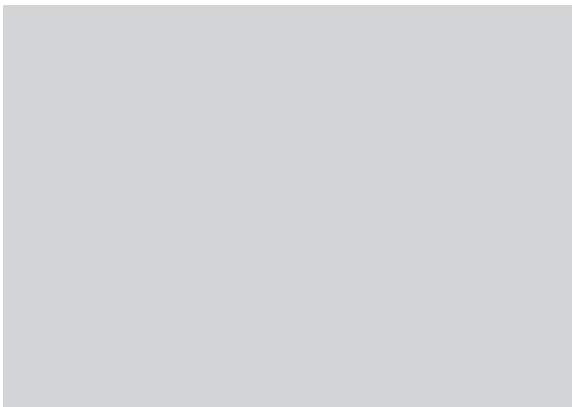
園では、教職員の絵本の読み聞かせを聞いたり、好きな絵本を自分で読んだりして楽しんでいる。幼児期に親しんできた絵本の読み聞かせをすることで、「これは読んだことがあるよ!」「私も知っている!」「僕は初めて見るよ。楽しみだな。」などと、園での経験やその違いを多くの友達と共有し、安心感だけではなく一体感も高まっていく。また、絵本を通して季節を感じることができると、それが教科等の学習や日常生活にも生かされていく。

〈例〉はらぺこあおむし、ぐりとぐら、はなのみち など

活動例④ 児童からのお話タイム

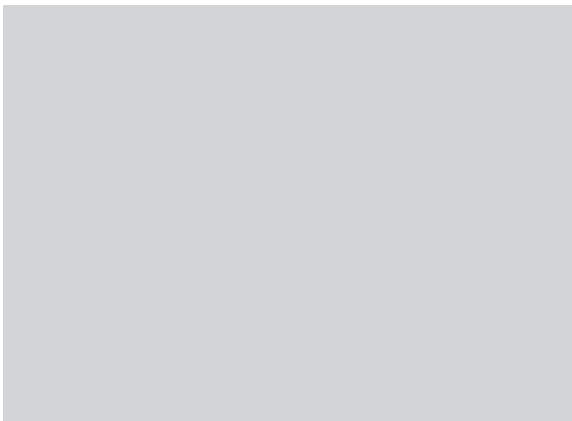
園では、当番活動や帰りの集まりなどで、みんなの前で話す経験をしている。入学当初に、好きなものなどを伝え合う活動を取り入れることで、互いのことを知ることができ、友達との関わりも増えていく。また、その活動を通して、よい話し方や聞き方も学ぶことができる。

〈例〉好きな食べ物、好きな色、好きな遊び、学校で楽しみにしていること、学校で知りたいこと など

活動例⑤ 園で親しんできた好きな遊びや活動

園では、登園して支度を終わると、遊び始めることが多い。入学当初は、それと同じように、登校して支度を終わったら、自由に好きな遊びができる場と時間を準備することも考えられる。そうすることで、1日の学校生活を自分のペースで始めたり、友達との関わりを広げたり、自分のよさを一層発揮したりすることができるようになる。

〈例〉折り紙、お絵かき、ブロック、積み木、工作、カルタ、読書 など





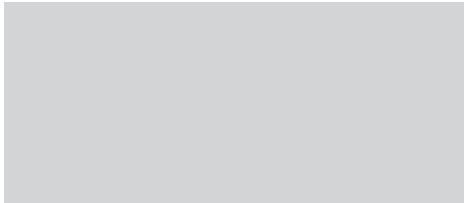
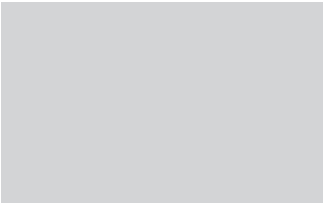
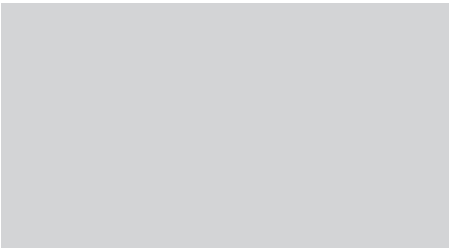
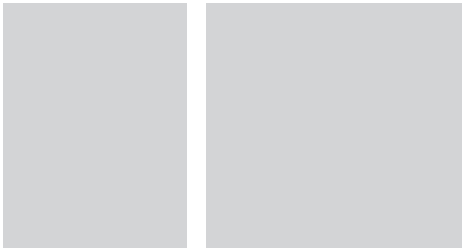


4 児童が安心して学べる環境構成

スタートカリキュラムの実施に当たっては、子供が安心して学べる環境を整えることが重要である。幼児期の教育は、「環境を通して行う教育」を基本としており、教職員に支えられながら幼児が自分の力で生活をつくっていくことができるように環境を構成している。小学校教育においても、児童が安心感をもち、自分の力で学校生活を送ることができるように、児童の実態を踏まえること、人間関係が豊かに広がること、学習のきっかけが生まれることなどの視点で学習環境を見直すことが大切である。

環境の構成に当たっては、近隣の園を見学するなどして、園の中では、教育的な配慮の下に幼児が友達に関わって活動を展開するのに必要な遊具や用具、素材、十分に活動するための時間や空間、自然や動植物などの様々な環境が用意されていることや、園の中だけでなく近くにある自然の多い場所や高齢者のための施設への訪問などの機会も重要な環境として捉え、これらの環境が幼児の発達を促すものとなるよう、教職員が環境を構成していることを知ることが大切である。

なお、小学校における学習環境の面から捉えると、園と小学校には、以下のような違いが見られることがある。

園		小学校
<ul style="list-style-type: none"> ・園舎や園庭の規模が比較的小さい。 ・トイレ、水飲み場など、幼児用に低く小さな物が設置されている。 	施設	<ul style="list-style-type: none"> ・校舎や校庭の規模が比較的大きい。 ・トイレ、水飲み場など、標準的な高さ、大きさの物が設置されている。 
<ul style="list-style-type: none"> ・活動に応じて、机と椅子を使用する。 	室内環境	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の机と椅子がある。 
<ul style="list-style-type: none"> ・図や絵などの情報が中心である。 		<ul style="list-style-type: none"> ・文字による情報が中心である。 
<ul style="list-style-type: none"> ・時間の区切りが緩やか。 ・様々な環境に触れ、興味や関心をもって関わり、個別または集団で遊ぶ。 	時間と学び方	<ul style="list-style-type: none"> ・時間割がある。 ・めあてに向かって、学級全体で学ぶ。 

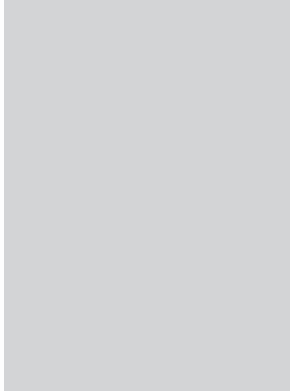
このように、園と小学校では環境に大きな違いがあり、そのことに戸惑いや不安を感じる児童も少なくない。小学校において、環境を構成するに当たっては、児童の実態を踏まえること、人間関係が豊かに広がること、学習のきっかけが生まれることなどを大切に、児童が安心感を持ち、自分の力で学校生活を送ることができるように環境を見直すことが求められる。

次に、「安心して自己を発揮できる環境」、「主体的に学びに向かうことができる環境」、「安心を生み、成長・自立を支える人的な環境」の三つについて、具体例を紹介する。

(1) 安心して自己を発揮できる環境

① 見通しをもって生活できるようにする

a 1日の時間の流れ



b 朝の支度の手順

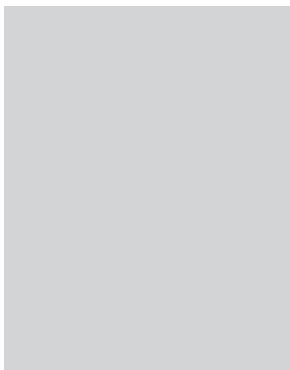


c 当番などの役割表示

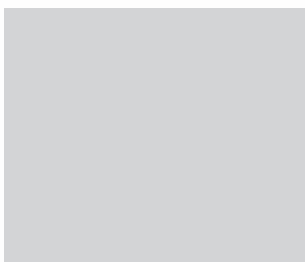
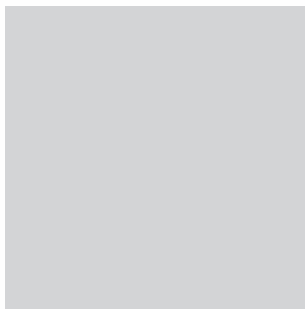


② 生活上のきまり等を視覚的に理解できるようにする

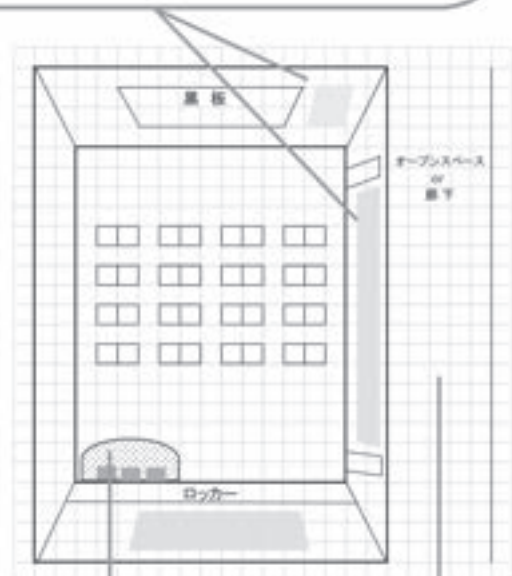
a 道具箱の整理整頓



b トイレ前の靴の揃え方



c 目の高さの掲示

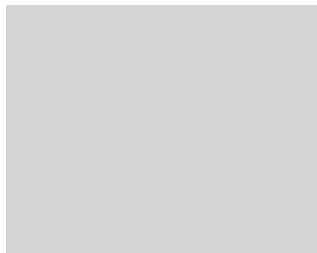


③ 自分で選択して活動できるようにする

a 教室内の遊びコーナーの設置



b オープンスペースの活用



c クールダウンの場を用意



(2) 主体的に学びに向かうことができる環境

① 学習形態を工夫し、 協働的に学べるようにする

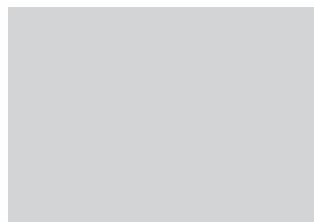
a 机を寄せ合い、隣の
友達とペーパーサート



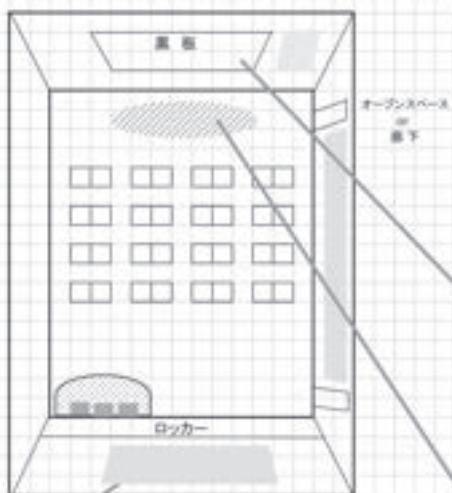
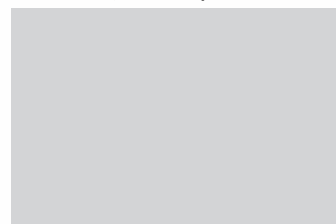
b 椅子を寄せ合い、
グループで相談



c 床を使って、興味関心が
同じ友達と試行錯誤



d その場で立ち上がって
ロールプレイ

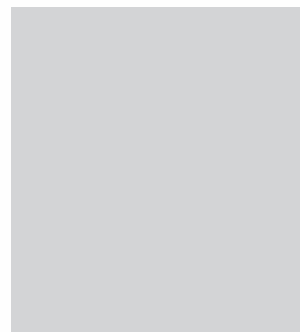


② 学習に集中できるようにする

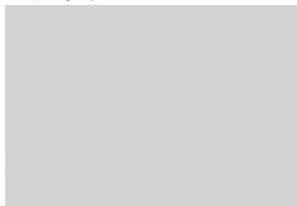
a すっきり整理された教室前面



c 視覚に訴える板書の工夫



b 子供が活用しやすい
黒板前



③ 学習のきっかけが 生まれるようにする

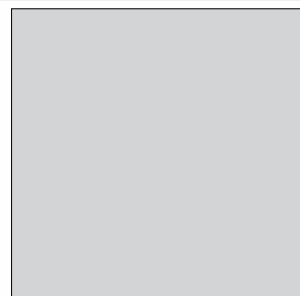
a 学習に活用でき
る資料の常設



b 次の活動への意欲を
高めるICTの活用



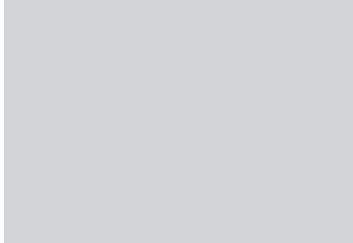
c 学びの足跡の掲示



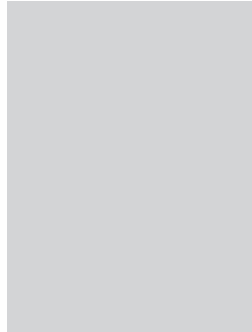
(3) 安心を生み、成長・自立を支える人的な環境**① 教職員**

・学年、学級

a 児童と一緒に活動を楽しむ



b 児童の様子を温かく見守る

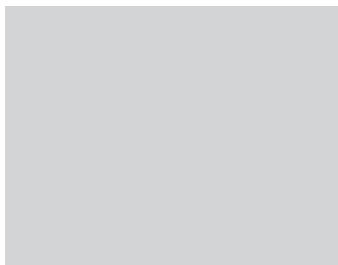


c 児童の目線で話を聞く

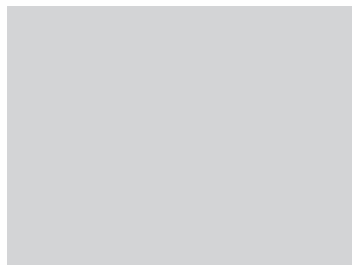


・校内体制

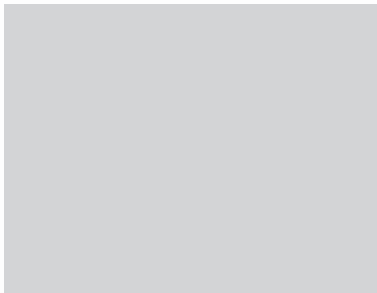
a 笑顔で児童を迎える



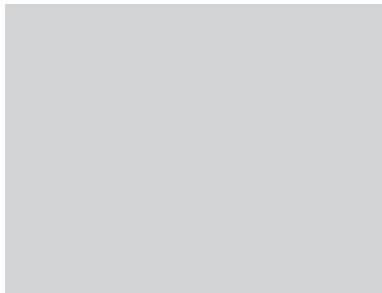
b 全教職員が1年生に関わる

**② 他学年の児童**

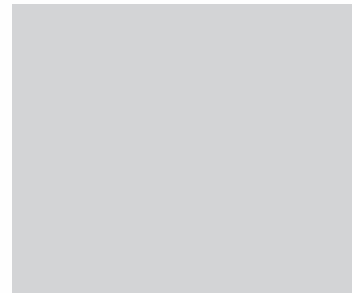
a 上級生と集団登校



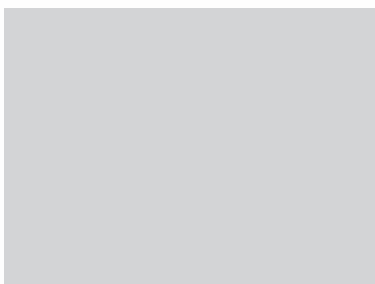
b 6年生との遠足



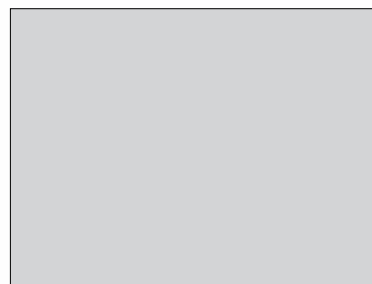
c 他学年との集会活動

**③ 家庭や地域の人々**

a 安全を見守る地域ボランティアの人



b 家庭や地域との連携を図るための情報発信





第4章

●

スタートカリキュラムの マネジメント



（「スタートカリキュラムスタートブック」国立教育政策研究所教育課程研究センター，平成27年）P.14～15より

各学校においては、「カリキュラム・マネジメント」を行い、スタートカリキュラムの質の向上を実現することが求められる。

「カリキュラム・マネジメント」については、平成28年12月の中央教育審議会答申で次のように三つの側面で示されている。

- ① 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- ② 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCA サイクルを確立すること。
- ③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

具体的な取組について、①は第2章で説明してきた。本章では、②と③の具体例について、**Plan Do Check Action** の順に紹介する。

1 Plan 校内組織を立ち上げて準備しよう

- (1) 意義、考え方、ねらいなどを全教職員で共通理解し、保護者へ説明する
スタートカリキュラムは、小学校生活のスタートを円滑に、そして豊かにするものであ

る。校長のリーダーシップの下、1年の担任だけでなく、全教職員が協力することで効果的に行うことができる。

例えば、今までの入学式準備委員会を基に、校長、教頭、教務主任、現1年担任、新1年担任、生活科主任、養護教諭、特別支援教育コーディネーター等で構成されるスタートカリキュラム作成委員会の校内組織を立ち上げる。この組織で、スタートカリキュラムの意義、考え方、ねらいなどを共通理解し、昨年度の1年生の週案、学年会の記録、ビデオや写真等から、2週目までの計画を立てる。この計画を、就学時健康診断や入学説明会、園との引き継ぎなどでの情報収集を基に更新していく。さらに、これを近隣の園に見てもらいなどして、入学する子供たちの特徴、活動の傾向などを聞きながら、入学式までに、子供たちの実態に沿ったカリキュラムとなるようにする。

それと並行して、スタートカリキュラムの意義、考え方、ねらいとその必要性を全教職員に伝えることも大切である。1年生は小学校生活の6年間のスタートであり、児童が安心して学校生活を円滑にスタートすることは、その後をも大きく支えることになるからである。

また、入学説明会等で保護者にスタートカリキュラムの意義やねらいを丁寧に伝えることで、安心して入学を迎えられるようにする。

事例 前年度の記録を引き継ぐと教師も安心

私が一緒に学年を組んだ先生は、初めて1年生を担当する2人の先生でした。低学年の経験もなく、とても不安そうでした。週案だけでは見通しがもちにくいようでした。

そこで、前年度の流れを参考に、1日の計画を作り、その年の子どもの実態に合わせて修正しながら、1日の流れや活動のねらいを確認するようにしました。

学年で共有しておくことで、私自身も安心して自分の学級の子供と過ごすことができました。放課後には、この流れを基に1日を振り返り、翌日以降の指導に役立てました。

<p>12月、スタートエデュアム 募集案内 3月分、12月-14、15 期1期のおおひこをほす。学校に対する夢心をもつ、学校という環境にふれる</p>	
<p>12月 10日(土)</p>	<p>ひまわり ●併行編成した「国・生」ができれば、超える ●出ていない道に寄り道しつつも、「できた!」「おもしろい」 という気持ちで大冒険にしたい。</p>
<p>12月 11日(日)</p>	<p>●朝の先生が選んだら、<u>ひまわり</u>でまたは、<u>国語</u> ・チャームで、読書に慣れ、1冊を1週間、 1週間、<u>先生と生徒の先生が先生</u>。 教室まで歩いてくることができる。国語人である。9時-10時 国語 で国語の先生が先生をいかにする。 一冊の先生が先生をいかにする。子どもは夢心をもつ。国語として、国 の先生が先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 12日(月)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 13日(火)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 14日(水)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 15日(木)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 16日(金)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 17日(土)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 18日(日)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 19日(月)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 20日(火)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 21日(水)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 22日(木)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 23日(金)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 24日(土)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 25日(日)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 26日(月)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 27日(火)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 28日(水)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 29日(木)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>
<p>12月 30日(金)</p>	<p>●子どもは先生が先生をいかにする。 国語に慣れ、チャームに慣れ、 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。 国語に慣れ、先生を先生をいかにする。</p>

(2) 園への訪問や教職員との意見交換、指導要録等から、 子供の实態をつかみ、指導に生かす

園では、ゆったりした時間の中で子供たちの主体性を大切にしたい指導を行っている。園を訪ね、実際の指導の様子をすることで、生活リズム、環境構成、教職員の関わり方等、幼児期の教育の考え方や子供の発達や学びの姿を知ることができる。その際、教職員との意見交換を行うことも有効である。互いに顔の見える関係ができてくると、4月の授業を園の教職員が参観することを通して、児童の姿や指導の在り方を語り合うことができる。

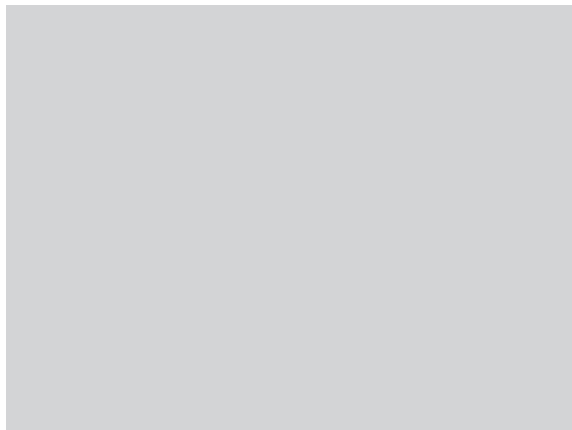
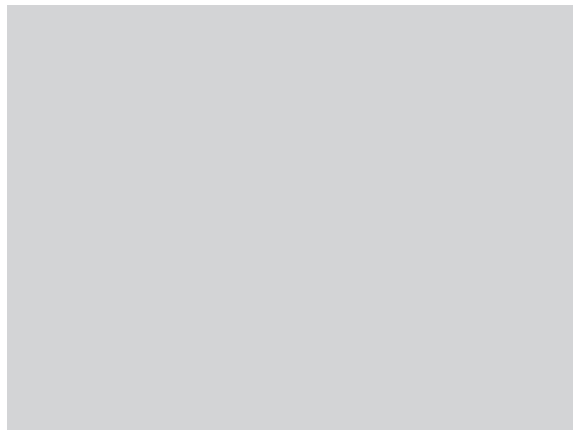
また、子供のよさや指導の過程が具体的に記された幼稚園幼児指導要録等から一人一人の子供の实態をつかみ、指導につなげていくことも重要である。

事例 子供のよさや指導の過程を園からつなぐ

園からの情報で「何事も時間はかかるが几帳面」という A さんの特性を知っていました。ですから、図工の制作など時間内に終わらなくてはならない場合、ほかの子に気付かれないうち支援ができました。几帳面という A さんのよさを生かし、褒めるようにしました。A さんは、みんなと一緒に満足できる作品を作り上げることができ、次への意欲につながりました。園からの引き継ぎの重要性を実感しました。

事例 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有する保育参観・研修会

夏季休業期間を利用して、近隣の小学校と園の教職員で保育参観・研修会を実施しました。園児の姿を参観しながら、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が表れていると感じた場面を付箋に書き、その後、グループワークで意見交換をしました。参加者からは次のような声が聞かれました。



小学校の教職員

- ・「10の姿」を共有しながら、その姿が表れるためには、先生方の言葉掛けや環境構成など指導の積み重ねが大切であることを改めて感じました。
- ・幼児の発達段階の魅力的な部分・特徴が活動の中に生かされていました。穏やかな生活の中にも一つ一つの活動に多くの学びがあり、成長につながっているのだと感じるとともに小学校就学前の関わりの大事さを学びました。
- ・園では遊びの中に気付きや思いをもてるように工夫していることが分かりました。幼児ができることやもっている力を理解した上で、1年生の指導を行うことの大切さを学びました。

園の教職員

- ・子供の様々な行動、発言、関わり合いなどが「10の姿」のどの部分に入るだろうか、と考えていく作業によって私たちが支え伸ばしていきたい方向性も個々に見えてくると感じました。
- ・小学校の先生方との関わりでたくさんのお話ができ、新しい発見をする事もできたのでよい機会になりました。子どもたちの姿は、「10の姿」のどこか一つに属するのではなく、いくつものが重なり合っていることを再認識しました。
- ・遊びの中で学んでいるということを小学校の先生に理解していただけてうれしいです。成果物を園に掲示し、保護者にも見ていただこうと思います。

2 Do 全校で協力体制を組み、 スタートカリキュラムに取り組もう

(1) 全教職員で協力体制を組み、見守り、育てる

入学当初は、養護教諭、栄養士、専科担当教師、スクールカウンセラーなど様々な立場の教職員が1年生の教室にサポートに入れるよう時間割を調整することが考えられる。例えば、専科担当教師の授業を2週目から始めることにし、1週目は、1年生の学級の支援に入るようにする。そうすることで、全校体制でスタートカリキュラムを始めることができる。

園では、子供の様子を連絡帳を通してやりとりしてきた保護者も多く、連絡帳は担任と保護者を結ぶ大切な道具である。特に、1週目は提出物も多く、学童保育の出欠席などを連絡帳に書くことも多い。朝のうちに丁寧に読み、返事を書くことが保護者との信頼関係を築くことにつながる。そんなとき、チームで1年生を応援する体制があると、1年生担任にとっては心のゆとりを生むことにもつながる。

(2) 発達の特性を生かし、具体的な活動や体験を取り入れた授業を工夫する

低学年児童は、心と体を一体的に働かせて学ぶという特性をもっている。授業を行うに当たっては、幼児期における遊びを通した総合的な学びを生かし、具体的な活動や体験を通して感性を豊かに働かせるとともに、身近な出来事から気付きを得て考えることが行われるなど、中学年以降の学習の素地を形成していくことが重要である。具体的な授業の工

夫については、第3章1～2を参考にしてほしい。

(3) 環境構成を工夫し、安心感をもてるようにする

幼児期の教育は、「環境を通して行う教育」を基本としており、教職員に支えられながら幼児が自分の力で生活をつくっていきけるよう環境を構成している。小学校において、環境を構成するに当たっては、児童の実態を踏まえること、人間関係が豊かに広がること、学習のきっかけが生まれることなどを大切にし、児童が安心感をもち、自分の力で学校生活を送ることができるように環境を見直すことが求められる。具体的な環境構成の工夫については、第3章4を参考にしてほしい。

(4) 学級便り、懇談会などで保護者に伝える

学級便りや懇談会などで児童が興味や関心をもって学習に取り組む様子をエピソードで語るようにしたい。児童自らが主体的、協働的に学ぶ姿の価値を理解した保護者は、家庭でもすぐに答えを教えず、分かっていく過程を大切にするなど、保護者の意識の変容につながっていく。

3 Check 子供の姿・指導の在り方を語り合おう

(1) 取組がねらいに沿っているか、児童の姿を通して日々評価する

スタートカリキュラムで期待する児童の姿

- (例)
- ・安心して自分を発揮できる子供
 - ・みんなと楽しみながら関わり、好奇心をもつ子供
 - ・思いをふくらませ、考えを広げ、学びに夢中になる子供

児童の発達の特長や幼児期の発達などを生かして、各学校で設定した「スタートカリキュラムで期待する児童の姿」に即して、その日の児童の姿を日々評価し、翌日の授業に生かすことが大切である。

また、毎週の学年会等で、児童の成長する姿や指導方法について情報交換し、翌週の週案作成に生かしていく。その際、可能であれば、校長、教頭、養護教諭など、児童に関わった教職員も参加することで、児童のよさを多面的に理解することにつながる。

なお、日々の評価や情報交換の際には、継続的に記録を残すことが重要である。

例えば、子供の書いたものや作品からスタートカリキュラムが機能しているか評価し、週案にメモ書きしたり、学年会等のノートに書き込んだりしていくことが考えられる。これらの足跡は、次年度以降のスタートカリキュラムのベースとなる。

(2) スタートカリキュラム作成委員会や職員会議等で、実施状況を共有する

毎月の節目や学期末にスタートカリキュラム作成委員会等を中心にして、実施状況を共

有する。期待する児童の姿に近づいているか、単元構成や環境構成、協力体制やサポートの期間は有効だったか等について評価する。話し合ったことについては、職員会議等で共有し、全教職員で1年生を育てる意識を醸成する。

事例 管理職対象チェックポイント等を使って評価する

管理職のみなさんへ スタートカリキュラムの編成・実施は、管理職のみなさんのリーダーシップの下、学校全体で行うことが重要です。

スタートカリキュラムを効果的に進めるための管理職対象チェックポイント

■ 構成の前に

スタートカリキュラムの編成・実施は、学校の現状や児童の姿に照らして、学校・地域関係の協力を得ながら行うことが重要です。また、校内でもスタートカリキュラムの進捗状況を定期的に確認し、必要に応じて調整を行います。

- ☐ スタートカリキュラムの進捗を確認していますか？
- ☐ 学校・地域関係の協力を得ていますか？
- ☐ 校内の進捗状況を定期的に確認していますか？

■ 実施に当たって

スタートカリキュラムは、学校全体のスタート地点として、そして進捗を確認しながら実施することによって効果を高めることができます。また、この機会に、どのような進捗状況があるかを把握し、必要に応じて調整を行います。

- ☐ 校内の進捗状況を定期的に確認していますか？
- ☐ 学校関係者の協力体制ができていますか？
- ☐ 保護者への説明をしっかりと行っていますか？

■ 次年度に向けて

スタートカリキュラムの進捗状況を定期的に確認し、必要に応じて調整を行います。また、この機会に、どのような進捗状況があるかを把握し、必要に応じて調整を行います。

- ☐ スタートカリキュラムの進捗を確認していますか？
- ☐ 進捗状況を定期的に確認し、必要に応じて調整を行っていますか？

（「スタートカリキュラムスタートブック」
国立教育政策研究所教育課程研究センター，平成27年）巻末より

5月末に、「スタートカリキュラム作成委員会」で1年生以外の職員がスタートカリキュラムにどれだけ関わったか評価する機会を設定しました。その際に、スタートカリキュラムスタートブックの巻末にある管理職対象チェックポイントやP.14, 15のチェックポイント例を活用しました。

1年担任からは、「専科や養護教諭の先生が、サポートに入ったことで朝のうちに連絡帳に目を通すことができてありがたかった。」「学校探検で、インタビューの仕方などを褒めていただき、子供たちの自信になった。」という声が聞かれました。

前回の4月末のチェックでも空欄で、今回もチェックできなかった「保護者への説明」については、うちの学校の弱みだと分かり、次回に向けての重点項目になりました。

「自分で考えて、自分で行動する1年生」という題名で、6月号の学校だよりやホームページで発信することになりました。早速ホームページ担当者に伝えたいと思います。

(3) 園の教職員や保護者に児童の様子を見てもらおう

4月の授業を参観した園の教職員と、児童の姿や指導の在り方について気が付いたことを話し合う機会をもつことで、園での様子と比較しながら児童の状況を把握したり、成長を実感したりすることができる。園と小学校の教職員が顔の見える関係であることは、保護者の安心感にもつながる。

また、授業参観や学期末等、保護者から感想をもらう機会を作ると、児童の様子の変化、成長などを共に喜び合うことができる。

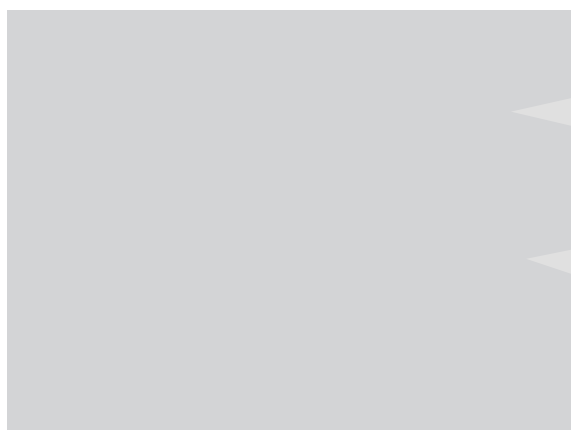
「社会に開かれた教育課程」の観点からも、学校内だけではなく、園の教職員や保護者等の様々な立場からスタートカリキュラムの評価を受けるなどして、質の向上を目指すことが重要である。

事例 園の教職員に4月の授業を参観してもらう



話し手の方を見て、先生や友達の話が聞けることができていますね。
机が班の形になっていて、園での話合いのスタイルに似ていました。
これならすぐに友達ができそうで、安心しました。

年長さんの時の先生が来てくれたよ。
うれしいな。



落ち着いて、学習に参加していてびっくりしました。まだ、1週間しか経っていないのに、もう別の園からきた子と楽しく話していました。

Aさんは、入園した時も、すぐに慣れることができません、泣いていました。Aさんなりに授業に参加していて、頑張っていると思います。しばらくは、見守り、笑顔で支えていただければと思います。

4 Action 時期を捉えて、反省・検証・改善しよう

(1) 改善点を次の指導に即座に生かす

毎月の節目や学期末に、スタートカリキュラム作成委員会を中心にして、スタートカリキュラムの反省、検証、改善を行い、夏休み明けや来年度の指導に生かしていく。実践と評価、改善を一体的に、同時進行で行うのは、スタートカリキュラムの特徴の一つである。

例えば、夏季休業中に7月までのスタートカリキュラムを振り返り、その成果を夏休み明けの指導に生かしたい。長期休業によって、学校生活に不安をもつ児童が多いからである。

また、環境構成については、園の環境を参考にしながら、全教職員で改善していくことが大切である。目に見える環境だけでなく、児童を見守り支えていく意識を共有することも、学校に一人一人の居場所をつくることにつながる。

(2) 週案等の資料をデータベース化し共有する

スタートカリキュラムの実践の様子が分かる週案、学年会の記録、ビデオ、写真、掲示物などの記録は、次年度に向けてデータベース化し共有する。これは、日々の実践を振り返り改善するときにも大事であるとともに、次年度のスタートカリキュラムを編成する際の貴重な資料となる。組織的、継続的にスタートカリキュラムの資料を蓄積し、そこから次年度の児童に沿ったカリキュラムへと改善することで、教職員の負担軽減にもつながる。学校の財産としてデータベース化し、いつでも取り出し活用できる資料としたい。

事例 壁面の環境や活動の様子を写真で保存

教室の背面や側面の児童の絵や文、学びの足跡の掲示や活動の様子を写真で保存し、データベース化しました。その際、吹き出しなどで、説明を加えておくと、次年度の担任にも意図が伝わりやすかったです。

4月からの学びの足跡を児童の言葉と写真で掲示しておく。3月、給食を食べながら、「4月からみんなでいろいろやったね・・・。」とつぶやいた児童の言葉をきっかけに、生活科の内容（9）自分の成長の単元に入ることができた。

国語と関連させたインタビューの仕方を掲示したことで、児童が他の場面でも活用して進んでインタビューをするようになった。

「たからばこ」は、年間を通して、その時期の生活科の学びの情報コーナーにした。これによって、進んで調べたり伝えたりしたいという意欲が高まった。

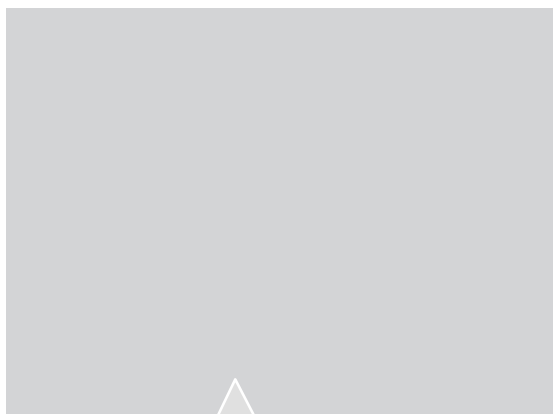
絵、物、写真、歌、動作等を加えて話すことでより具体的に伝わることを掲示した。

封筒を使った係活動の掲示。細長く切った厚紙に名前を書いて差し込めるようにしてある。この時期の児童は、様々なことに興味をもつので、気になった係の仕事にお試しで挑戦できるようにした。

算数と関連させたゲーム「何月生まれが多いかな？」
児童が同じ誕生月の友達を探し、誕生日の順に並べた。自ら数を数えたり長さで比べたり楽しんで活動できた。

活動が終わったら、お誕生日調べとして掲示した。

事例 わくわく感の高まるアイテム、板書等



わくわく感を高めるため、探検に必要なものはないか児童と考えた。園のお泊り会での経験を生かして、「探検バッジ」を作ることになった。アイデアを出し合い、自分たちの探検のイメージに合うものを選んだ。



リボンは、学級カラーの黄色にした。このバッジを着けていれば、授業中、校内を歩いても先生方に探検中だとわかってもらえる。わくわく感の高まるアイテムとなる。

学校探検での発見や驚きは、感動が新鮮なうちに学級で伝え合った。探検中や探検後の児童の小さな気付きを教師がまず受け止め、共感することで自信をもって発言できた。

黒板にある「ひかりのみち」は、給食室の様子を見られる渡り廊下のことである。光が差し込む様子から、児童が名付けた。このように、探検で発見したものに名前を付けることで、児童の表現が豊かになり、わくわく感を引き出すことができた。



「『ひかりのみち』を見てみたいです。」
次の探検で行きたい場所や見てみたいもの、人が決まったら名前のマグネットを貼っておくようにした。
「みんなに伝えてよかった」という気持ちが高まった。

(3) 次年度に向けて、スタートカリキュラムの改善を図る

スタートカリキュラムは、まさに、生活科を中核として、合科的・関連的な指導の工夫を進め、指導の効果を一層高めることが求められているカリキュラムである。

そのためにも、1月から3月に掛けて、今年度のスタートカリキュラムを検証し、次年

度に向けた改善を図ることが欠かせない。具体的には、合科的・関連的な指導の工夫や弾力的な時間割の設定の観点から、単元配列表や週案、これまで蓄積してきた資料を基に見直すことが考えられる。

事例 年間活動計画を基にスタートカリキュラムについて検証する

私の学校では、児童の生活全体が学びという考えから、年間活動計画そのものが学級経営案になっています。合科的な指導は、同じ枠の中に教科等の時間数を入れる、関連的に指導した教科等は矢印で表すなど、学校全体で共通理解を図っています。

学期末や研究授業の際に、教育課程全体を俯瞰し、教科等の配列や合科的・関連的な指導がどうだったか見直しを図り、その都度計画の書き換えを行い、年度末にその学級の学びの軌跡を示した「足跡カリキュラム」が完成することになります。

今までは、カリキュラムはつくって終わりと思っていましたが、児童の意識の流れで変わっていくものだと改めて思いました。昨年度までの「足跡カリキュラム」は、データベースで自由に見られるようになっているので、4月は、昨年度のものを参考にして計画を立てました。その後、学年で相談しながら、目の前の児童の実態に合わせて、合科的・関連的に指導できる教科があると単元の配列を変えるなどしています。

カリキュラム・マネジメントには、全体を把握する鳥の目、部分を把握する虫の目、流れを把握する魚の目が必要だと改めて感じました。【1年担任】

巻末資料

〈小学校学習指導要領関連項目〉

・「小学校学習指導要領」第1章総則第2の4 学校段階等間の接続

教育課程の編成に当たっては、次の事項に配慮しながら、学校段階等間の接続を図るものとする。

(1)幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。

また、低学年における教育全体において、例えば生活科において育成する自立し生活を豊かにしていくための資質・能力が、他教科等の学習においても生かされるようにするなど、教科等間の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるよう工夫すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。

・「小学校学習指導要領」第2章 国語，算数，音楽，図画工作，体育，第6章 特別活動 第3 指導計画の作成と内容の取扱い

低学年においては、第1章総則の第2の4の(1)を踏まえ、他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、生活科を中心とした合科的・関連的な指導（特別活動においては、「関連的な指導」）や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。

・「小学校学習指導要領」第2章生活 第3 指導計画の作成と内容の取扱い1の(4)

他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高め、低学年における教育全体の充実を図り、中学年以降の教育へ円滑に接続できるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期における遊びを通じた総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能となるようにすること。その際、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。

〈小学校学習指導要領解説生活編関連項目〉

・「小学校学習指導要領解説生活編」第4章1 p.55～

(2)児童の発達の段階や特性を踏まえ、2学年間を見通して学習活動を設定すること。

小学校低学年は、幼児期の教育と小学校教育との接続の時期に位置し、2学年間で、幼児期の発達の特性を強く残している状況から児童期の特性を示すようになるなど、身体面での成長はもちろんのこと、情緒的側面や認知的側面においても発達の変容が大きい。

ここで改めて児童の発達の段階や特性を踏まえ、2学年間を見通して学習活動を設定することと規定されたのは、低学年の2学年間での児童の情緒的側面や認知的側面での成長を把握すること、その時期の特性に見合った計画を立てることの重要性を再認識することが大切だからである。

つまり、九つの内容を実現する学習活動が、教える側の一方的な都合で計画されるのではなく、児童の発達の段階や特性に適合しているかを吟味した上で単元を構成し、2学年間を見通して効果的に配置することを今まで以上に心掛ける必要がある。その際、スタートカリキュラムが編成される第1学年前半の時期、社会科や理科、総合的な学習の時間などをはじめとする各教科等への接続を意識する第2学年後半の時期といった、2年間での児童の成長やその際に見せる空間認識や時間認識などの認知の特性の違いを意識し、それらを教師が自覚して学習活動に反映させることが考えられる。重要なことは、2年間の児童の発達や成長を見通して単元を構成し、配列することであり、そのことこそが正にカリキュラムをデザインすることでもある。

例えば、内容(1)の学習においては、入学直後の新しい環境に対する興味・関心をきっかけにして、いわゆる「学校探検」を通して、自分を中心にした身の回りの人・もの・ことへの関わりを深める等の活動が考えられる。このことがひいては、新しい環境に関する認識の深まり、順応そして安心へと結び付いていくものと考えられる。この空間の認知の特性を生かした取組として、例えば、学校の外に出掛けて行う内容(4)の学習においても、第1学年では、身近でより愛着度の高い公共施設としての「公園」に着目し、中でも日常生活において親しみの深い「遊具」を通して、公共物やそれを利用したり管理したりする「人」への気付きの質を高める取組が考えられる。一方、第2学年では、児童の生活圏の広がりや空間の認識の広がりから、内容(3)の学習として学校の周辺の探検を通して、身近な商店街や公共施設に着目し、お気に入りの場所や人との関わりをきっかけに気付きの質を高める取組が考えられる。こうした取組の積み重ねが、第3学年以上の学習を支える。

また、内容(6)においては、幼児期の教育における経験を生かした活動とその発展という形で、第1学年では、素材そのものの特性を生かした遊びを通して、素材そのものへの気付きを意図した活動を行うことが考えられる。第2学年では、素材を組み合わせたおもちゃづくりとそれに伴う遊びを友達と協力して行うことを通して、よりその面白さや自然の不思議さを意識した活動を行うことが考えられる。こうした取組の充実が、ひ

いては第3学年以上の学習を支える科学的な認識の基礎となる。

さらに、内容(7)においては、入学直後まで見られるアニミズム的な見方を生かした学習活動が考えられる。植物や動物を人に見立て、自分がその養育者となることで、植物栽培や動物飼育といった学習活動への自我関与を強め、活動への意欲の持続を図ることが考えられる。自我関与が強ければ強いほど、対象に関する気付きの質は高まるであろう。そうした取組の上に、第2学年における飼育・栽培では、それぞれの思いや願いを更に生かすために、一人一人が自己選択できるような学習材を用意し、細部にわたる観察などを行うことが考えられる。また、この時期の特性として、共通体験に基づいて交流することが気付きの質の高まりに影響することから、どのような植物や動物を扱い学習の対象とするかは極めて重要である。

以上のように、九つの内容を踏まえた学習活動を、児童の発達の段階や特性と結び付けて単元として構成するだけでなく、カリキュラム・マネジメントの視点から、単元相互の関係を意識し配列することも重要な視点である。

・「小学校学習指導要領解説生活編」第4章1 p.57～

(4) 他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高め、低学年における教育全体の充実を図り、中学年以降の教育へ円滑に接続できるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期における遊びを通した総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能となるようにすること。その際、生活科を中心とした総合的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。

低学年教育の充実と生活科の位置付け

今回の改訂では、これまで以上に低学年教育の充実が求められている。心と体を一体的に働かせて学ぶ低学年の特性から、幼児期における遊びを通した総合的な学びを生かし、具体的な活動や体験を通して感性を豊かに働かせるとともに、身近な出来事から気付きを得て考えることが行われるなど、中学年以降の学習の素地を形成していくことが重要である。

低学年における教科等の学習は、発達の段階等を踏まえて互いに関連付けて展開することが大切である。生活科においても、他教科等との関連が求められ、その指導に当たっては、これまでも、低学年教育全体を視野に入れることが求められてきた。今回の改訂では、低学年教育の充実の観点から、更に他教科等との関連を意識し、これまで例示されてきた国語科、音楽科、図画工作科はもちろんのこと、低学年の全ての教科等と生活科との関連を図り、指導の効果を高めていくことが求められている。このことは、児童の意識に沿った活動を展開する上でも、積極的に取り組む必要がある。これについては、第1章総則第2の4の(1)において、「(前略)低学年における教育全体において、例えば生活科において育成する自立し生活を豊かにしていくための資質・能力が、他教科

等の学習においても生かされるようにするなど、教科等間の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるよう工夫すること（後略）」と示されている。

また、今回の改訂では、幼児期の教育から小学校、中学校、高等学校までを含めた全体を見通し、育成を目指す資質・能力を整理してきた。あわせて、幼稚園教育要領等において「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」がまとめられ、幼児期の遊びや生活を通じて育まれる自立心や協同性、思考力の芽生えなどの大切さについて、共通理解が図られるようになり、幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続を図るための手掛かりが示された。この手掛かりを基に、小学校入学当初において生活科を中心としたカリキュラムのデザインを行うことで、小学校へ入学した児童が、安心して学校生活を送るとともに、自信をもって成長し、学習者として確かに歩んでいくようになることが期待される。

これらのことは、生活科が、低学年における教育全体の充実を図る上で重視すべき方向を表しており、教科等間の横のつながりと、幼児期からの発達の段階に応じた縦のつながりとの結節点であることを意識することが重要である。

他教科等との関連

他教科等との関連では、生活科と他教科等との合科的・関連的な指導を行ったり、低学年の児童の生活とつながる学習活動を取り入れたりして、教科等横断的な視点で教育課程の編成、実施上の工夫を行うことが重要である。それにより、生活科における学習活動が他教科等での題材となったり、生活科で身に付けた資質・能力を他の教科等で発揮したり、他教科等で身に付けた資質・能力が生活科において発揮されたりして確かに育成されるなど、一層の学習の効果が期待できる。

ここでいう合科的な指導とは、各教科のねらいをより効果的に実現するための指導方法の一つで、単元又は1コマの時間の中で、複数の教科の目標や内容を組み合わせて、学習活動を展開するものである。また、関連的な指導とは、教科等別に指導するに当たって、各教科等の指導内容の関連を検討し、指導の時期や指導の方法などについて相互の関連を考慮して指導するものである。

一人の児童の学びは、個別の教科内で閉じるものではなく、それぞれの学びが相互に関連付き、つながり合っている。生活科と他教科等において、学んだことがどのように関連付いていくのかを意識し、児童の思いや願いを生かした学習活動を展開するために、1年間の全ての単元を配列し、それを俯瞰することができる単元配列表の作成が効果的である。

他教科等との関連を図った指導の在り方として、具体的には次のようなことが考えられる。

第1は、生活科の学習成果を他教科等の学習に生かすことである。

生活科の内容には、他教科等へ発展する可能性をもっているものが多い。例えば、季節の変化と生活に関する学習活動では、身近な自然を観察したり全身で感じたりする。そうした活動を通して、自然の変化や四季それぞれの美しさを豊かに感じ取ることが、

言葉、絵、動作、劇化などの多様な方法によって表現したくなる気持ちにつながる。それは、国語科、音楽科、図画工作科、体育科などにおける学習活動の動機付けとなったり、題材となったりする。

特に、国語科との関連では、見たり、探したり、育てたり、作ったりしたことが、例えば、書くことを見付け、伝えたいことを明確にすること、自分の思いや考えを明確にすることなどへ発展することが考えられる。また、生活科における豊かな体験を、国語科における、報告する文章や記録する文章などを書く言語活動、日記や手紙などを書く言語活動などの題材として活用することは、表現することへの有効な動機付けとなる。

また、音楽科との関連では、例えば、身近な自然を観察したり身の回りのものを使って遊んだりする体験が、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて気付くこと、音遊びを通して音楽づくりの発想を得ることなどに発展する可能性をもっている。

体育科との関連においても、例えば、カタツムリ、ダンゴムシ、バッタ、カマキリなどの生き物をつかまえたり育てたりして生き物に触れ、様子や動きを観察した経験が、身近な題材の特徴を捉え、そのものになりきって全身の動きで楽しく踊るといった表現遊びのきっかけになることも考えられる。

指導に当たっては、他教科等には、それぞれの目標や内容があるので、生活科の目標や内容の実現とともに、関連する他教科等の目標や内容が一層効果的に実現できるよう配慮する必要がある。そのためには、単に題材や活動を関連付けるだけでなく、そのことを通して、それぞれの教科でどのような資質・能力を育成したいのかを意識する必要がある。

第2は、他教科等の学習成果を生活科の学習に生かすことである。

生活科の学習効果を上げるためには、児童が他教科等において身に付けた資質・能力を適切に生かして活動を展開する必要がある。これによって、児童は資質・能力を一層確かなものとして身に付けることになる。

例えば、算数科では、長さの単位について知り、測定の意味を理解することや、身の回りにある数量を分類整理し、簡単な表やグラフを用いて表したり読み取ったりすることなどの知識及び技能を育てる。こうした学習の成果が、生活科において野菜などを育てる過程で、茎やつるの長さの変化を記録したり、花の数や収穫した野菜の数などを整理したりする際に発揮され、栽培活動における気付きを確かなものにしていく。また、生活科の遊ぶ活動である的当てゲームなどでは、「この的は大きくて当たりやすいから3点」、「これは少し難しいから5点」、「一番遠いのは10点にしよう」などと、児童は遊びを面白くするために得点やルールなどを工夫していく。そして、算数科で学んだ整理の仕方や計算などの知識及び技能を活用して結果を集計し、友達と比べ合ったりする。こうした活動は、今回の改訂において算数科が目指している「算数で学んだことを生活や学習に活用する態度を養う」ことにもつながることである。

図画工作科では、絵や立体、工作に表す活動を通して、身近で扱いやすい材料や用具に十分慣れるようにする。ここで扱い慣れた土、粘土、木、紙、クレヨン、パス、はさみ、のり、簡単な小刀類などの材料や用具は、生活科での遊びや遊びに使うものを工夫してつくる活動に生かされ、それらの資質・能力は確かなものとして身に付いていく。

このように、他教科等の学習成果を生活科の学習活動の中で適切に生かすためには、相互の関連について検討し、指導計画に位置付けておく必要がある。

第3は、教科の目標や内容の一部について、これを合科的に扱うことによって指導の効果を高めることである。

生活科においては、生活科の特質や低学年の児童の発達の特性などを考慮して、単元又は1コマの時間の中で、複数の教科の目標や内容を組み合わせて、児童が具体的かつ総合的に学習できるように工夫することが考えられる。その際、関連した教科の目標が、生活科の目標と共に実現されていくように配慮しなければならない。例えば、児童が生活科における活動を歌や踊り、劇によって表現する単元の展開が考えられる。生活科の活動を基に発表内容を創り上げる際に、国語科、音楽科、図画工作科、体育科等の目標も効果的に達成することが考えられる。

(※「中学年以降の教育への接続」は省略)

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連

今回の改訂では、幼稚園教育要領等に示す「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を考慮することが求められている。幼児期の教育においては、幼児の自発的な活動としての遊びを中心とした生活を通して、一人一人に応じた総合的な指導を行っている。幼児期の遊びは学びそのものであり、遊びを通して達成感や満足感を味わったり、葛藤やつまずきなどの体験をしたりすることを通して様々なことを学んでいる。こうした日々の遊びや生活の中で資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿をまとめたものが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」である。小学校においては、こうした具体的な育ちの姿を踏まえて、教育課程をつないでいくことが重要である。

小学校入学当初に大切にしたいこと

今回の改訂においては、小学校入学当初に求められることとして、幼児期における遊びを通した総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能となるようにすることが新たに示された。

幼児期における遊びを通した総合的な学びは、遊びや生活の中で、感性を働かせてよさや美しさを感じ取ったり、不思議さに気付いたり、できるようになったことなどを使いながら、試したり、いろいろな方法を工夫したりすることなどを通じて育まれるものである。幼児は、遊びの楽しさを体いっぱいを感じながら、試行錯誤し、仲間と協同し、工夫し発見する楽しさを見いだしていく。そうした学びは、これが国語科、これが算数科などと分けられるものではないが、例えば、水道から樋をつないで水を流そうとして、水がこぼれないような仕組みを幼児同士で何度も試したりすることや、自分たちで考えた話を人形劇にして年少の幼児に見てもらおうと、身近にある段ボールで舞台を作ったり、紙やテープなどの素材を生かして、色や形を工夫して飾りつけた小道具を作ったりすることなど、小学校以降の学習の基盤は幼児の姿の中に確かにある。そうした学びを、小学校の生活科を中心とした学習において発揮できるようにし、児童の思いや願いをき

っかけとして始まる学びが自然に他教科等の学習へとつながっていくようにすることが、幼児期における遊びを通した総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行することである。

主体的に自己を発揮するとは、小学校へ入学した児童が、上に述べたような、幼児期における遊びを通した総合的な学びを生かし、小学校という新たな環境の中で、進んで自分らしさを表出し、自分のもっている力を働かせることである。また、より自覚的な学びに向かうとは、学ぶということについての意識があり、集中する時間とそうでない時間の区別が付き、自分の課題の解決に向けて、計画的に学んでいくことである。幼児期においても、幼稚園生活の一日の流れの中で、夢中になって遊んだり、活動の区切りに振り返ることで次の活動に期待をもったり、しなければならないことを自覚するようになることなどを大切にしている。小学校においても、幼児期のこうした学びと育ちを土台とし、児童が興味・関心をもったことを個々のペースで追究していけるような、ゆったりとした時間の流れの中で、少しずつ小学校での学習に慣れていくようにしたい。

小学校入学当初において、児童が主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能になるようにするためには、何より幼児期の学びと育ちに対する理解を前提として、児童が安心して小学校生活に慣れ、自らの力を発揮しながら主体的な学習者として育っていく過程を創り出すことが重要である。

スタートカリキュラムの編成

遊びや生活を通して総合的に学んでいく幼児期の教育課程と、各教科等の学習内容を系統的に学ぶ等の児童期の教育課程は、内容や進め方が大きく異なる。そこで、入学当初は、幼児期の生活に近い活動と児童期の学び方を織り交ぜながら、幼児期の豊かな学びと育ちを踏まえて、児童が主体的に自己を発揮できるようにする場面を意図的につくることが求められる。それがスタートカリキュラムであり、幼児期の教育と小学校教育を円滑に接続する重要な役割を担っている。

スタートカリキュラムは、平成20年の「小学校学習指導要領解説 生活編」において、「(前略) 学校生活への適応が図られるよう、合科的な指導を行うことなどの工夫により第1学年入学当初のカリキュラムをスタートカリキュラムとして改善することとした」と示された。今回の改訂においては、幼児期の教育と小学校教育の発達特性を踏まえた学校段階等間の円滑な接続の観点から、更にその重要性が高まっている。第1章総則第2の4の(1)でも、「(前略) 特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと」が示されている。

小学校入学当初に、幼児期の学びと育ちを踏まえて、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出そうとする児童の姿を実現するための具体的な視点や方法として、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うことなどが追記された。ここでいう生活科を中心とした合科的・関連的な指導とは、他教科等との関連について前述したことと関連が深い。特に入学当初においては、重要な意味をもつ

スタートカリキュラムにおける合科的・関連的な指導では、児童の発達の特性或幼児期からの学びと育ちを踏まえ、児童の実態からカリキュラムを編成することが特徴であり、児童の成長の姿を診断・評価しながら、それらを生かして編成することが求められる。そのためには、幼稚園・認定こども園・保育所への訪問や教職員との意見交換、指導要録等を活用するなど、幼児期の学びと育ちの様子や指導の在り方を把握することが重要である。

スタートカリキュラムを編成する際には、例えば、「がっこうだいすき なかよしいっぱい」といった大単元を設定することが考えられる。大単元には「学校探検に行こう」「学校のはてなやびっくりを見付けよう」「見付けたものや人をお知らせしよう」などの小単元を位置付けていく。小単元の主な学習活動には、探検で見付けたことを絵に表したり、見付けた不思議を友達に伝えたりするなど、図画工作科や国語科と合科的・関連的に実施することで効果が高まるものがある。このように、つながりのある他教科等のねらいを考えて合科的・関連的に進める単元を構想していくことができる。ここでは、児童の実態や意識の流れに配慮した時間配分の工夫が重要である。

ここでいう弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫とは、入学当初の児童の発達の特性に配慮し、この時期の学びの特徴を踏まえて、10分から15分程度の短い時間で時間割を構成したり、児童が自らの思いや願いの実現に向けた活動をゆったりとした時間の中で進めていけるように活動時間を設定したりすることなどが考えられる。

その際、幼児期に大切にしてきた生活リズムや一日の過ごし方に配慮することも重要である。例えば、週案を作成する場合には、朝の会から1時間目を連続した時間として設定することも考えられる。そこに、幼児期に親しんできた手遊びや歌、リズムに乗って体を動かすことや絵本の読み聞かせ、児童からのお話タイムなど、児童が一日の始まりを楽しい気持ちで迎えられよう学習活動を取り入れたりする。また、時間配分においても、児童の生活リズムや集中する時間、意欲の高まりを大切に、10分から15分程度の短い時間を活用して時間割を構成したり、2時間続きの学習活動を位置付けたりするなどの工夫が考えられる。

また、スタートカリキュラムの実施に当たっては、児童が安心して学べる学習環境を整えることが重要である。幼児期の教育は、「環境を通して行う教育」を基本としており、保育者に支えられながら幼児が自分の力で生活を創っていけるよう環境を構成している。小学校においても、児童が安心感をもち、自分の力で学校生活を送ることができるように、児童の実態を踏まえること、人間関係が豊かに広がること、学習のきっかけが生まれることなどの視点で学習環境を見直すことが求められる。

第1学年の児童にとっては、スタートカリキュラムにおいて、幼児期の生活に近い活動があったり、分かりやすく学びやすい環境の工夫がされていたり、人と関わる楽しい活動が位置付けられていたりすることが安心につながる。また、安心して生活することで自分の力を発揮できるようになり、友達や先生に認められる経験を重ねて更なる成長への意欲が高まる。そして、自分で考え、判断し行動するという学びのプロセスを歩んでいくことで、学習者として自立していくことができる。

スタートカリキュラムは、小学校生活のスタートを円滑に、そして豊かにするもので

ある。全教職員でその意義や考え方、大切にしたいことなどを共通理解し、協力体制を組んで第1学年を見守り育てるとともに、児童の実態に即して毎年見直しを行いながら改善し次年度につないでいくことが重要である。その際、保護者にスタートカリキュラムの意義やねらいとともに、主体的に学ぶ児童の様子を伝えることは、保護者の安心感や学校への信頼感を生み出す。あわせて、スタートカリキュラムで学ぶ児童の姿を、幼稚園・認定こども園・保育所の保育者に見てもらい、改善のための協議を行うことも、双方の取組を振り返るために効果的である。

小学校入学当初の生活科を中心としたスタートカリキュラムは、児童に「明日も学校に来たい」という意欲をかき立て、これからますます重要になる幼児期の教育から小学校以降の教育への円滑な接続をもたらしてくれる。

〈幼稚園教育要領関連項目〉

・「幼稚園教育要領」 第1章総則 第1 幼稚園教育の基本

第1 幼稚園教育の基本

幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。

このため教師は、幼児との信頼関係を十分に築き、幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。これらを踏まえ、次に示す事項を重視して教育を行わなければならない。

- 1 幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。
- 2 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。
- 3 幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。

その際、教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。

- ・「幼稚園教育要領」 第1章総則 第2 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

第2 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

- 1 幼稚園においては、生きる力の基礎を育むため、この章の第1に示す幼稚園教育の基本を踏まえ、次に掲げる資質・能力を一体的に育むよう努めるものとする。

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」

- (2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」

- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

- 2 1に示す資質・能力は、第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体によって育むものである。

- 3 次に示す「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものである。

- (1) 健康な心と体

幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

- (2) 自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

- (3) 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

- (4) 道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

- (5) 社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識する

ようになる。

(6) 思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

(7) 自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にしたい気持ちをもって関わるようになる。

(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

(9) 言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

(10) 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

・「幼稚園教育要領解説」 第1章総説 第1節 幼稚園教育の基本

1 人格形成の基礎を培うこと

教育は、子供の望ましい発達を期待し、子供のもつ潜在的な可能性に働き掛け、その人格の形成を図る営みである。特に、幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な役割を担っている。

幼児一人一人の潜在的な可能性は、日々の生活の中で出会う環境によって開かれ、環境との相互作用を通して具現化されていく。幼児は、環境との相互作用の中で、体験を深め、そのことが幼児の心を揺り動かし、次の活動を引き起こす。そうした体験の連なりが幾筋も生まれ、幼児の将来へとつながっていく。

そのため、幼稚園では、幼児期にふさわしい生活を展開する中で、幼児の遊びや生活といった直接的・具体的な体験を通して、人と関わる力や思考力、感性や表現する力などを育み、人間として、社会と関わる人として生きていくための基礎を培うことが大切である。

2 環境を通して行う教育

(1) 環境を通して行う教育の意義

一般に、幼児期は自分の生活を離れて知識や技能を一方向的に教えられて身に付けていく時期ではなく、生活の中で自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、この時期にふさわしい生活を営むために必要なことが培われる時期であることが知られている。

幼稚園では、小学校以降の子供の発達を見通した上で、幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児期にふさわしい生活を通して育むことが大切である。

幼児期の教育においては、幼児が生活を通して身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことが重視されなければならない。その際、幼児が環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになることが大切である。

教師は、このような幼児期の教育における見方・考え方を生かし、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めることが重要である。

こうしたことにより、幼児は、環境とのよりよいまたはより面白い関わり方を見いだしたり、関連性に気付き意味付けたり、それを取り込もうとして更に試行錯誤したり、考えたりして、捉えなおし、環境との関わり方を深めるようになっていく。

本来、人間の生活や発達は、周囲の環境との相互関係によって行われるものであり、それを切り離して考えることはできない。特に、幼児期は心身の発達が著しく、環境からの影響を大きく受ける時期である。したがって、この時期にどのような環境の下で生活し、その環境にどのように関わったかが将来にわたる発達や人間としての生き方に重要な意味をもつことになる。

幼稚園は、幼児期にふさわしい幼児の生活を実現することを通して、その発達を可能にする場である。そのためには、家庭や地域と連携を図りながら、幼稚園でこそ得られる経験が実現できるようにする必要がある。

したがって、幼稚園教育においては、学校教育法に規定された目的や目標が達成されるよう、幼児期の発達の特性を踏まえ、幼児の生活の実情に即した教育内容を明らかにして、それらが生活を通して幼児の中に育てられるように計画性をもった適切な教育が行われなければならない。つまり、幼稚園教育においては、教育内容に基づいた計画的な環境をつくり出し、幼児期の教育における見方・考え方を十分に生かしながら、その環境に関わって幼児が主体性を十分に発揮して展開する生活を通して、望ましい方向に向かって幼児の発達を促すようにすること、すなわち「環境を通して行う教育」が基本となるのである。

(2) 幼児の主体性と教師の意図

このような環境を通して行う教育は、幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つものである。

幼稚園教育が目指しているものは、幼児が一つ一つの活動を効率よく進めるようになることではなく、幼児が自ら周囲に働き掛けてその幼児なりに試行錯誤を繰り返し、自ら発

達に必要なものを獲得しようとするようになることである。このような幼児の姿は、いろいろな活動を教師が計画したとおりに、全てを行わせることにより育てられるものではない。幼児が自ら周囲の環境に働き掛けて様々な活動を生み出し、それが幼児の意識や必要感、あるいは興味などによって連続性を保ちながら展開されることを通して育てられていくものである。

つまり、教師主導の一方的な保育の展開ではなく、一人一人の幼児が教師の援助の下で主体性を発揮して活動を展開していくことができるような幼児の立場に立った保育の展開である。活動の主体は幼児であり、教師は活動が生まれやすく、展開しやすいように意図をもって環境を構成していく。もとより、ここでいう環境とは物的な環境だけでなく、教師や友達との関わりを含めた状況全てである。幼児は、このような状況が確保されて初めて十分に自己を発揮し、健やかに発達していくことができるのである。

その際、教師には、常に日々の幼児の生活する姿を捉えることが求められる。教師は、幼児が何に関心を抱いているのか、何に意欲的に取り組んでいるのか、あるいは取り組もうとしているのか、何に行き詰まっているのかなどを捉える必要があり、その捉えた姿から、幼児の生活や発達を見通して指導の計画を立てることになる。すなわち、今幼児が取り組んでいることはその幼児にとって十分できることなのか、新たな活動を生み出すことができることなのかなど、これまでの生活の流れや幼児の意識の流れを考慮して指導の計画を立てることになる。しかし、どんなに幼児の願いを受け止め、工夫して計画しても、その中で幼児が何を体験するかは幼児の活動にゆだねるほかはない場合もある。しかし、「幼児をただ遊ばせている」だけでは教育は成り立たない。幼児をただ遊ばせているだけでは、幼児の主体的な活動を促すことにはならないからである。

一人一人の幼児に今どのような体験が必要なのだろうかと考え、そのためにはどうしたらよいかを常に工夫し、日々の保育に取り組んでいかなければならない。

(3) 環境を通して行う教育の特質

教育は、子供のもつ潜在的な可能性に働き掛け、その人格の形成を図る営みであり、それは、同時に、人間の文化の継承であるといわれている。環境を通して行う教育は、幼児との生活を大切にした教育である。幼児が、教師と共に生活する中で、ものや人などの様々な環境と出会い、それらとのふさわしい関わり方を身に付けていくこと、すなわち、教師の支えを得ながら文化を獲得し、自己の可能性を開いていくことを大切にした教育なのである。幼児一人一人の潜在的な可能性は、幼児が教師と共にする生活の中で出会う環境によって開かれ、環境との相互作用を通して具現化されていく。それゆえに、幼児を取り巻く環境がどのようなものであるかが重要になってくる。

したがって、環境を通して行う教育は、遊具や用具、素材だけを配置して、後は幼児の動くままに任せるといったものとは本質的に異なるものである。もとより、環境に含まれている教育的価値を教師が取り出して直接幼児に押し付けたり、詰め込んだりするものでもない。環境の中に教育的価値を含ませながら、幼児が自ら興味や関心をもって環境に取り組み、試行錯誤を経て、環境へのふさわしい関わり方を身に付けていくことを意図した教育である。それは同時に、幼児の環境との主体的な関わりを大切にした教育であるから、

幼児の視点から見ると、自由感あふれる教育であると言える。

例えば、木工の素材とかなづちを用意したとしよう。しかし、それらが置いてあるだけでは、初めて見る幼児は興味をもたないだろう。くぎをうまく打っている幼児を見ることにより、あるいは、教師が打ってみるという働き掛けにより、誘われてかなづちを手にするようになる。しかし、そのような姿を見て、やり始めた幼児も、初めのうちは、その幼児なりのやり方しかできないだろう。いろいろ試行錯誤を繰り返すうちに、くぎをうまく打ちつけるにはどうすればよいかを、上手に打っている友達や教師の動きをモデルにしてその動きをまねたり、考えたりしながら、身に付けたり、気付いたりしていく。このような環境との関わりを通して幼児は、自らの手で用具の使い方を獲得し、自らの世界を広げていくことの充実感を味わっていく。

このような環境を通して行う教育の特質についてまとめてみると、次のとおりである。

○環境を通して行う教育において、幼児が自ら心身を用いて対象に関わっていくことで、対象、対象との関わり方、さらに、対象と関わる自分自身について学んでいく。幼児の関わりたいという意欲から発してこそ、環境との深い関わりが成り立つ。この意味では、幼児の主体性が何よりも大切にされなければならない。

○そのためには、幼児が自分から興味をもって、遊具や用具、素材についてふさわしい関わりができるように、遊具や用具、素材の種類、数量及び配置を考えることが必要である。このような環境の構成への取組により、幼児は積極性をもつようになり、活動の充実感や満足感が得られるようになる。幼児の周りに意味のある体験ができるような対象を配置することにより、幼児の関わりを通して、その対象の潜在的な学びの価値を引き出すことができる。その意味においては、テーブルや整理棚など生活に必要なものや遊具、自然環境、教師間の協力体制など幼稚園全体の教育環境が、幼児にふさわしいものとなっているかどうか検討されなければならない。

○環境との関わりを深め、幼児の学びを可能にするものが、教師の幼児との関わりである。教師の関わりは、基本的には間接的なものとしつつ、長い目では幼児期に幼児が学べべきことを学ぶことができるように援助していくことが重要である。また、幼児の意欲を大事にするには、幼児の遊びを大切にして、やってみたいと思えるようにするとともに、試行錯誤を認め、時間を掛けて取り組めるようにすることも大切である。

○教師自身も環境の一部である。教師の動きや態度は幼児の安心感の源であり、幼児の視線は、教師の意図する、しないに関わらず、教師の姿に注がれていることが少なくない。物的環境の構成に取り組んでいる教師の姿や同じ仲間の姿があつてこそ、その物的環境への幼児の興味や関心が生み出される。教師がモデルとして物的環境への関わりを示すことで、充実した環境との関わりが生まれてくる。

3 幼稚園教育の基本に関連して重視する事項

環境を通して教育することは幼児の生活を大切にすることである。幼児期には特有の心性や生活の仕方がある。それゆえ、幼稚園で展開される生活や指導の在り方は幼児期の特性にかなったものでなければならない。このようなことから、特に重視しなければならないこととして、「幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」、「遊びを通して

の総合的な指導が行われるようにすること」、「一人一人の特性に応じた指導が行われるようにすること」の3点が挙げられる。

これらの事項を重視して教育を行わなければならないが、その際には、同時に、教師が幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成すべきこと及び教師が幼児の活動の場面に応じて様々な役割を果たし、幼児の活動を豊かにすべきことを踏まえなければならない。

幼児期の教育は、次の段階の教育に直結することを主たる目標とするものではなく、後伸びする力を養うことを念頭に置いて、将来への見通しをもって、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである。

(1) 幼児期にふさわしい生活の展開

① 教師との信頼関係に支えられた生活

幼児期は、自分の存在が周囲の大人に認められ、守られているという安心感から生じる安定した情緒が支えとなって、次第に自分の世界を拡大し、自立した生活へと向かっていく。同時に、幼児は自分を守り、受け入れてくれる大人を信頼する。すなわち大人を信頼するという確かな気持ちが幼児の発達を支えているのである。

この時期、幼児は自ら世界を拡大していくために、あらゆることに挑戦し、自分でやりたいという気持ちが強まる。その一方で、信頼する大人に自分の存在を認めてもらいたい、愛されたい、支えられたいという気持ちをもっている。したがって、幼稚園生活では、幼児は教師を信頼し、その信頼する教師によって受け入れられ、見守られているという安心感をもつことが必要である。その意識の下に、必要なときに教師から適切な援助を受けながら、幼児が自分の力でいろいろな活動に取り組む体験を積み重ねることが大切にされなければならない。それが自立へ向かうことを支えるのである。

② 興味や関心に基づいた直接的な体験が得られる生活

幼児の生活は、そのほとんどは興味や関心に基づいた自発的な活動からなっている。この興味や関心から発した直接的で具体的な体験は、幼児が発達する上で豊かな栄養となり、幼児はそこから自分の生きる世界や環境について多くのことを学び、様々な力を獲得していく。興味や関心から発した活動を十分に行うことは、幼児に充実感や満足感を与え、それらが興味や関心を更に高めていく。それゆえ、幼稚園生活では、幼児が主体的に環境と関わり、十分に活動し、充実感や満足感を味わうことができるようにすることが大切である。

③ 友達と十分に関わって展開する生活

幼児期には、幼児は自分以外の幼児の存在に気付き、友達と遊びたいという気持ちが高まり、友達との関わりが盛んになる。相互に関わることを通して、幼児は自己の存在感を確認し、自己と他者の違いに気付き、他者への思いやりを深め、集団への参加意識を高め、自律性を身に付けていく。このように、幼児期には社会性が著しく発達していく時期であり、友達との関わりの中で、幼児は相互に刺激し合い、様々なものや事柄に対する興味や関心を深め、それらに関わる意欲を高めていく。それゆえ、幼稚園生活では、幼児が友達と十分に関わって展開する生活を大切にすることが重要である。

(2) 遊びを通しての総合的な指導

① 幼児期における遊び

幼児期の生活のほとんどは、遊びによって占められている。遊びの本質は、人が周囲の事物や他の人たちと思うがままに多様な仕方で応答し合うことに夢中になり、時の経つのも忘れ、その関わり合いそのものを楽しむことにある。すなわち遊びは遊ぶこと自体が目的であり、人の役に立つ何らかの成果を生み出すことが目的ではない。しかし、幼児の遊びには幼児の成長や発達にとって重要な体験が多く含まれている。

遊びにおいて、幼児が周囲の環境に思うがままに多様な仕方で関わるということは、幼児が周囲の環境に様々な意味を発見し、様々な関わり方を発見するということである。例えば、木の葉を木の葉として見るだけではなく、器として、お金として、切符として見たりする。また、砂が水を含むと固形状になり、さらには、液状になることを発見し、その状態の変化とともに、異なった関わり方を発見する。これらの意味や関わり方の発見を、幼児は、思考を巡らし、想像力を発揮して行うだけでなく、自分の体を使って、また、友達と共有したり、協力したりすることによって行っていく。さらに、遊びを通じて友達との関わりが深まってくるにつれて、ときには自分の思いや考えを意識して表現し、相手に伝えたり、互いの考えを出し合ったりするようになっていく。

そして、このような発見の過程で、幼児は、達成感、充実感、満足感、挫折感、葛藤などを味わい、精神的にも成長する。

このように、自発的な活動としての遊びにおいて、幼児は心身全体を働かせ、様々な体験を通して心身の調和のとれた全体的な発達の基礎を築いていくのである。その意味で、自発的な活動としての遊びは、幼児期特有の学習なのである。したがって、幼稚園における教育は、遊びを通しての指導を中心に行うことが重要である。

② 総合的な指導

遊びを展開する過程においては、幼児は心身全体を働かせて活動するので、心身の様々な側面の発達にとって必要な経験が相互に関連し合い積み重ねられていく。つまり、幼児期には諸能力が個別に発達していくのではなく、相互に関連し合い、総合的に発達していくのである。

例えば、幼児の言語を使った表現は、幼児が実際にいる状況に依存しているため、その状況を共有していない者にとって、幼児の説明は要領を得ないことが多い。しかし、友達と一緒に遊ぶ中で、コミュニケーションを取ろうとする意識が高まり、次第に状況に依存しない言語で表現する力が獲得されていく。

言語能力が伸びるにつれて、言語により自分の行動を計画し、制御するようになるとともに、自己中心的な思考から相手の立場に立った思考もできるようになる。こうして社会性、道徳性が培われる。そのことは、ますます友達と積極的に関わろうとする意欲を生み、さらに、友達と遊ぶことを通して運動能力が高まる。そして、より高度で複雑な遊びを展開することで、思考力が伸び、言語能力が高まる。象徴機能である言語能力の発達は、見立てやごっこ遊びという活動の中で想像力を豊かにし、それを表現することを通して促される。このように、遊びを通して幼児の総合的な発達が実現していく。

遊びを通して総合的に発達を遂げていくのは、幼児の様々な能力が一つの活動の中で関

連して同時に発揮されており、また、様々な側面の発達が促されていくための諸体験が一つの活動の中で同時に得られているからである。例えば、幼児が何人かで段ボールの家を作っているとする。そのとき幼児たちは大まかではあるが、作ろうとする家のイメージを描く。そのことで幼児は作業の段取りを立て、手順を考えるというように、思考力を働かせる。一緒に作業をするために、幼児たちは自分のイメージを言葉や身体の仕事などを用いて伝え合うことをする。相互に伝え合う中で、相手に分かってもらえるように自分を表現し、相手を理解しようとする。このようなコミュニケーションを取りながら一緒に作業を進める中で、相手に即して自分の行動を規制し、役割を実行していく。また、用具を使うことで身体の運動機能を発揮し、用具の使い方を知り、素材の特質を知っていく。そして、家が完成すれば、達成感とともに、友達への親密感を覚える。

このように、一つの遊びを展開する中で、幼児たちはいろいろな経験をし、様々な能力や態度を身に付ける。したがって、具体的な指導の場面では、遊びの中で幼児が発達していく姿を様々な側面から総合的に捉え、発達にとって必要な経験が得られるような状況をつくることを大切にしなければならない。そして、幼稚園教育のねらいが総合的に実現するように、常に幼児の遊びの展開に留意し、適切な指導をしなければならない。幼児の生活そのものともいえる遊びを中心に、幼児の主体性を大切にする指導を行おうとするならば、それはおのずから総合的なものとなるのである。

(3) 一人一人の発達の特性に応じた指導

① 一人一人の発達の特徴

幼児の発達の姿は、大筋で見れば、どの幼児も共通した過程をたどると考えられる。幼児を指導する際に、教師はその年齢の多くの幼児が示す発達の姿について心得ておくことは、指導の仕方を大きく誤らないためには必要である。しかし、それぞれ独自の存在としての幼児一人一人に目を向けると、その発達の姿は必ずしも一様ではないことが分かる。

幼児は、一人一人の家庭環境や生活経験も異なっている。それゆえ、一人一人の人や事物への関わり方、環境からの刺激の受け止め方が異なってくる。例えば、同じ年齢の幼児であっても、大胆で無秩序な世界を好む幼児もいれば、逆に、自制的で整然とした世界を好む幼児もいる。そういう二人が、幼稚園生活を送る過程で、前者の幼児が秩序を受け入れるようになっていたり、後者の幼児が大胆さを受け入れるようになっていたりする。

このように、幼児一人一人の環境の受け止め方や見方、環境への関わり方が異なっているのである。すなわち、幼児はその幼児らしい仕方で環境に興味や関心をもち、環境に関わり、何らかの思いを実現し、発達するために必要ないろいろな体験をしているのである。幼児のしようとしている行動が、多くの幼児が示す発達の姿から見ると好ましくないと思えることもある。しかし、その行動をし、その行動を通して実現しようとしていることがその幼児の発達にとって大事である場合がしばしばある。それゆえ、教師は、幼児が自ら主体的に環境と関わり、自分の世界を広げていく過程そのものを発達と捉え、幼児一人一人の発達の特徴（その幼児らしい見方、考え方、感じ方、関わり方など）を理解し、その特性やその幼児が抱えている発達の課題に応じた指導をすることが大切である。

ここでいう「発達の課題」とは、その時期の多くの幼児が示す発達の姿に合わせて設定

されている課題のことではない。発達の課題は幼児一人一人の発達の姿を見つめることにより見いだされるそれぞれの課題である。その幼児が今、興味や関心をもち、行おうとしている活動の中で実現しようとしていることが、その幼児の発達にとっては意味がある。したがって、発達の課題は幼児の生活の中で形を変え、いろいろな活動の中に表現されることもある。例えば、内気で消極的な幼児が、鉄棒をしていた友達がいなくなってから一人で鉄棒にぶら下がってみたり、あるいは皆が縄跳びに興じているのをすぐそばで楽しそうに掛け声を発したりしながら見ている場合、その幼児はそれまで苦手になっていたことに挑戦しようとしていると理解することができるだろう。そして、挑戦した結果、成功すれば、その幼児は自信をもつと考えられる。そうであれば、今この幼児の発達の課題は自信をもつことであるといえる。

このように、教師は幼児一人一人の発達の特性と発達の課題を把握し、その幼児らしさを損なわないように指導することが大切である。

② 一人一人に応じることの意味

①に述べたように、幼児は一人一人が異なった発達の姿を示す。それゆえ、教師は幼児の発達に即して、一人一人に応じた指導をしなければならない。幼児は、自分の要求を満たしてくれる教師に親しみや自分に対する愛情を感じて信頼を寄せるものである。しかし、幼児一人一人に応じるといえるとき、ただ単にそれぞれの要求にこたえればよいというわけではない。このような要求や主張を表面的に受け止めてこたえようとすれば、教師は幼児の要求ばかりに振り回されて応じきれなくなり、逆に幼児に不信感や不安を抱かせてしまう。また、応じ方の度が過ぎれば幼児の依頼心やわがままを助長するなど、自立を妨げることにもなる。教師の応答は、幼稚園教育において育みたい資質・能力を育むために、幼児一人一人の何に応じればよいのか考えたものでなければならない。

教師は、あるときは幼児の要求に即座にこたえるのではなく、自分で考えさせたり、幼児同士で教え合うように促したりする必要がある。また、同じような要求であっても、幼児に応じてこたえ方を変える必要がある。そのような応答のためには、教師が、幼児の具体的な要求や行動の背後に、意欲や意志の強さの程度、心情の状態（明るい気分、不満に満ちた状態、気落ちした気分など）など幼児の内面の動きを察知することが大切である。そして、その幼児がそれらの要求や行動を通して本当に求めていることは何かを押し量り、その幼児の発達にとってどのような経験が必要かをそれぞれの場面で可能な範囲で把握していることが大切である。

例えば、幼児数人と教師とで鬼遊びをしているとする。ほとんどの幼児が逃げたり追いかけたり、つかまえたりつかまえられたりすることを楽しんでいる中で、ある幼児は教師の仲立ちなしには他の幼児と遊ぶことができないことがある。その幼児はやっと泣かずに登園できるようになり、教師を親のように慕っている。教師と一緒に行動することで、その幼児にとって教師を仲立ちに他の幼児と遊ぶ楽しさを味わうという体験にしたいと教師は考える。そう考えた教師は、鬼遊びのルールを守って遊ぶということにならなくても、その幼児の要求にこたえ、手をつないで一緒に行動しようとするだろう。

このように、ある意味で一人一人に応じすることは、一人一人が過ごしてきた生活を受容し、それに応じることなのである。それはまず、幼児の思い、気持ちを受け止め、

幼児が周囲の環境をどう受け止めているのかを理解すること、すなわち、幼児の内面を理解しようとするところから始まるのである。そして、その幼児が真に求めていることに即して必要な経験を得られるように援助していくのである。このことは、幼児一人一人をかけがえのない存在として見て、それぞれ独自の生き方（行動の仕方、表現の仕方など）をしていると考え、その独自性を大切にすることなのである。

ただし、幼児一人一人に応じるとはいっても、いつでも活動形態を個々ばらばらにするということではない。幼稚園は集団の教育力を生かす場である。集団の生活の中で、幼児たちが互いに影響し合うことを通して、一人一人の発達が促されていく。それゆえ、一人一人の発達の特性を生かした集団をつくり出すことを常に考えることが大切である。

③ 一人一人に応じるための教師の基本姿勢

②に述べたように、幼児一人一人に応じた指導をするには、教師が幼児の行動に温かい関心を寄せる、心の動きに応答する、共に考えるなどの基本的な姿勢で保育に臨むことが重要である。

また、一人一人の教師がこのような基本的姿勢を身に付けるためには、自分自身を見つめることが大切である。

一人一人に応じた適切な指導をするために、教師は幼児一人一人の発達の姿や内面を理解する必要があるが、教師の目の前に現れる幼児の姿は教師との関わりの下に現れている姿でもある。ところが、幼児たちの中に入っているとき、教師は自分はいったいどういう在り方をしているのか十分意識しているわけではない。例えば、泥遊びの場面を見るとつい幼児から身を引いてしまっているかもしれない。

このように、教師には、必ずしも自覚していない仕方で幼児に関わっている部分がある。それが幼児の姿に影響を及ぼしていることが十分考えられるのである。それゆえ、幼児の姿を理解しようとするならば、教師は幼児と関わっているときの自分自身の在り方や関わり方に、少しでも気付いていく必要がある。実際に行った幼児との関わりを振り返り、自分自身を見つめることを通して、自分自身に気付いていくことができるのであり、繰り返し、そのように努めることで、幼児一人一人に応じたより適切な関わりができるようになるのである。

また、教師は自分の心の状態を認識し、安定した落ち着いた状態でいられるように努めることも大切である。いらいらしたり、落ち込んだりしているときには、幼児の心の動きに寄り添い、幼児と同じように感じていくことが困難になる。それゆえ、時々自分の心の状態を冷静に見つめ、不安定にしている要因があれば、それを取り除くように努め、心の安定を図ることが大切である。

4 計画的な環境の構成

2で述べているように、幼稚園教育は、幼児自らが積極的に事物や他者、自然事象、社会事象など周囲の環境と関わり、体験することを通して、生きる力の基礎を育て、発達を促すものである。

幼児は遊ぶことが好きであるからといって、教師は幼児が遊ぶのをただ放っておいてよいわけではない。なぜなら、幼児は常に積極的に環境に関わって遊び、望ましい方向に向

かって発達していくとは限らないからである。幼児が望ましい方向に向かって発達していくということは、幼稚園教育のねらいに示された方向に向かって発達していくことである。どのような環境にいかに関わるかを、全て幼児自身にゆだねていたのでは、偶然の出来事に頼ることとなり、発達に必要な体験を保障することが困難な場合も生じてくる。また、幼児は一人一人興味や関心を向けるものが異なる。一人一人の幼児に幼稚園教育のねらいが着実に実現されていくためには、幼児が必要な体験を積み重ねていくことができるように、発達の道筋を見通して、教育的に価値のある環境を計画的に構成していかなければならない。一人一人の幼児が関わっている活動の各々の展開を見通すとともに、学期、年間、さらに、入園から修了までの幼稚園生活、修了後の生活という長期的な視点に立って幼児一人一人の発達の道筋を見通して現在の活動を位置付け、幼児の経験の深まりを見通すことが大切である。そして、望ましい方向へ向かうために必要な経験ができるよう環境を構成していく必要がある。

見通しをもち、計画を立てることによって初めて、幼児が今行っている経験の意味を理解し、発達を促す関わりや環境の構成を考えることができる。しかし、幼児の活動の展開は多様な方向に躍動的に変化するものであり、常に見通しと一致するわけではない。したがって、計画を立てて環境を構成すればそれでよいというわけではない。常に活動に沿って環境を構成し直し、その状況での幼児の活動から次の見通しや計画をもち、再構成し続けていくことが必要となるのである。

① 幼児の主体的な活動と環境の構成

幼児が意欲をもって積極的に周囲の環境に関わっていくこと、すなわち、主体的に活動を展開することが幼児期の教育の前提である。幼児が主体的に活動を行うことができるかは環境がどのように構成されているかによって大きく左右される。幼児が興味や関心をもち、思わず、関わりたくなるようなものや人、事柄があり、さらに、興味や関心が深まり、意欲が引き出され、意味のある体験をすることができるように適切に構成された環境の下で、幼児の主体的な活動が生じる。そして、その基礎には安心感や安定感がある。例えば、ジャングルジムの1番上まで登ってみたいと興味を示しても、恐怖心や自分にできるだろうかという不安から取り組むことをためらっている幼児がいる。このときに自分を守ってくれていると感じられる教師のまなざしや励ましの言葉、楽しそうにジャングルジムに登り始めた友達の姿や友達からの誘いがあることなどによって、幼児は活動を始める。

幼児が主体的に活動できる環境を構成するためには、幼児の周りにある様々な事物、生き物、他者、自然事象・社会事象などがそれぞれの幼児にどのように受け止められ、いかなる意味をもつのかを教師自身がよく理解する必要がある。環境を構成するためには、遊具や用具、素材など様々な要素が、遊びを通して幼児の発達にどう影響するかを考える必要もある。また、遊びの中での事物や事象との関わりが、発達の過程でどのような違いとなって表れるかを知らなければならない。例えば、砂と土では、それぞれ固有の性質があり、そこから引き出される遊びの展開には違いが見られる。また、砂で遊ぶときにも発達の過程によって関わりは異なってくる。同じ事物でも幼児の発達によって関わり方は異なるし、同じ場であっても、幼児のそのときの状況によって異なる。砂場が一人で安心して

いられることを求める場であったり、いろいろな型に詰めて形を作れるという砂のもつ面白さにひかれる場であったり、また、友達と一緒にトンネルを掘ることを楽しむ場であったりする。幼児の行動や心情によって、同じ場や素材でもそこで幼児が経験するものは違っている。したがって、教師の援助もそれぞれにふさわしいものに変えなければならない。幼児の興味や関心に即しながらも、その時期にその幼児の中にどのような育ちを期待したのか、そのために必要な経験は何かを考え、その経験が可能となるように環境を構成していくことが大切である。

このように、幼児の主体的な活動のための環境を構成することは、一言でいえば、幼児を理解することにより可能となる。その時期の幼児の環境の受け止め方や環境への関わり方、興味や関心の在り方や方向、1日の生活の送り方などを理解し、そこから幼児一人一人にとって必要な経験を考え、適切な環境を構成するのである。ここで念頭に置かなければならないことは、教師自身が重要な環境の一つであることである。幼児期には、一緒に生活している大人の影響を特に強く受ける。先に述べたように、教師の存在（身の置き方や行動、言葉、心情、態度など）が幼児の行動や心情に大きな影響を与えている。したがって、教師は自分も幼児にとって環境の非常に重要な一部となっていることを認識して環境の構成を考える必要がある。

このようにしてあらかじめ構成された環境の下で、幼児は主体的に環境と関わり、活動を展開する。主体的に関わるとは、幼児なりに思いや願いをもち続け、関わっていくことである。幼児の興味や関心は次々と変化し、あるいは深まり、発展していく。それに伴って環境条件も変わらざるを得ない。それゆえ、環境が最初に構成されたまま固定されていでは、幼児の主体的な活動が十分に展開されなくなり、経験も豊かなものとはならない。したがって、構成された環境はこのような意味では暫定的な環境と考えるべきであり、教師は幼児の活動の流れや心の動きに即して、常に適切なものとなるように、環境を再構成していかなければならないのである。

② 幼児の活動が精選されるような環境の構成

幼児が積極的に環境に関わり、活動を展開する場合、その活動は多様な仕方で展開される。この多様な仕方でということは、様々な形態の活動が行われることも意味するし、一つの活動が変容し、新たな発展をしていくことも意味する。幼児一人一人の興味や関心を大切にして指導するためには、様々な形態の活動が行われることも重要である。しかし、幼稚園教育のねらいを達成していくためには、幼児が活動に没頭し、遊び、充実感や満足感を味わっていくことが重視されなければならない。活動を豊かにすることは、いろいろなことをできるようにすることと同じではない。重要なのは、活動の過程で幼児自身がどれだけ遊び、充実感や満足感を得ているかであり、活動の結果どれだけのことのできたか、何ができたかだけを捉えてはならない。なぜなら、活動の過程が意欲や態度を育み、生きる力の基礎を培っていくからである。

そのためには、一つの活動に没頭して取り組むことができることも大切である。いろいろな活動を次から次へと行っているのでは、多少の楽しさはあったとしても充実感や満足感を覚えることはできない。それゆえ、教師は幼児が本当にやりたいと思い、専念できる活動を見つけていくことができるように、つまり、いろいろあり得る活動の中から興味や

関心のある活動を選び取っていくことができるように、しかも、その活動の中で発達にとって大切な体験が豊かに得られるように環境を構成することが必要である。このような環境の構成は、教師の行動としてみれば、新しい事物を出したり、関わりを増やしたりしていくことだけではない。反対に、その活動にとって不要なものや関わりを整理し、取り去ったり、しばらくはそのままに見守ったりしていくことも必要となる。

幼児の活動が精選される環境を構成するには、幼児の興味や関心の在り方、環境への関わり方、発達の実情などを理解することが前提である。その上で幼児が興味や関心のある活動にじっくり取り組むことができるだけの時間、空間、遊具などの確保が重要である。さらに、教師自身が活動に参加するなど、興味や関心を共有して活動への取組を深める指導が重要になる。

このように、活動を充実することは、いろいろな活動を行うことと同じではない。まして幼児が取り組もうとしている活動を早く完了させることではない。幼児が活動に没頭する中で思考を巡らし、心を動かしながら豊かな体験をしていくことである。そして、教師は、このような活動がより豊かに行われるように、幼児と活動を共にしながら環境の構成を工夫する必要がある。

5 教師の役割

幼稚園における人的環境が果たす役割は極めて大きい。幼稚園の中の人的環境とは、担任の教師だけでなく、周りの教師や友達全てを指し、それぞれが重要な環境となる。特に、幼稚園教育が環境を通して行う教育であるという点において、教師の担う役割は大きい。一人一人の幼児に対する理解に基づき、環境を計画的に構成し、幼児の主体的な活動を直接援助すると同時に、教師自らも幼児にとって重要な環境の一つであることをまず念頭に置く必要がある。

また、幼稚園は、多数の同年代の幼児が集団生活を営む場であり、幼児一人一人が集団生活の中で主体的に活動に取り組むことができるよう、教師全員が協力して指導にあたる必要がある。

① 幼児の主体的な活動と教師の役割

幼稚園教育においては、幼児の自発的な活動としての遊びを中心とした教育を実践することが何よりも大切である。教師が遊びにどう関わるのか、教師の役割の基本を理解することが必要であり、そのために教師には、幼児の自発的な活動としての遊びを生み出すために必要な教育環境を整えることが求められる。さらに、教師には、幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境をつくり出していくことも求められている。そのための教師の役割は、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成する役割と、その環境の下で幼児と適切な関わりをする役割とがある。

教材を工夫し、物的・空間的環境を構成する際には、様々な遊具や用具、素材などを多く用意すれば遊びが豊かになるとは限らないことをまず自覚することである。重要なのは、幼児が遊びに没頭し充実感を味わうことである。そのためには、特に幼児とものとの関わりが重要であることを認識し、幼児の関わり方を予想して物の質や量をどう選択し、空間をどう設定するか考えていくことが重要である。また、ときには幼児自身が興味をもって

関わることで教師の予想をこえて教材としての意味が見いだされていくこともあることに留意が必要である。

教材を精選していく過程では、幼児理解に基づき、幼児の興味や関心がどこにあるのか、幼児同士の関わり合いの状況はどうなのか、教師の願いや指導のねらいは何かなどを考慮することが必要である。

また、教師が幼児と適切な関わりをするためには、幼児一人一人の特性を的確に把握し、理解することが基本となる。教師には、幼児を理解する者としての役割、共同作業を行う者としての役割など、様々な役割を果たすことが求められるのである。

このような教師の役割を果たすために必要なことは、幼稚園教育の専門性を磨くことである。その専門性とは、幼稚園教育の内容を理解し、これらの役割を教師自らが責任をもって日々主体的に果たすことである。

つまり、幼児一人一人の行動と内面を理解し、心の動きに沿って保育を展開することによって心身の発達を促すよう援助することにある。そのためには専門家としての自覚と資質の向上に教師が努めることが求められる。

幼児の行動と内面の理解を一層深めるためには、幼児の活動を教師自らの関わり方との関係で振り返ることが必要である。幼児と共に行動しながら考え、さらに、幼児が帰った後に1日の生活や行動を振り返る。このことが、翌日からの指導の視点を明確にし、更に充実した教育活動を展開することにつながるのである。これらのことを日々繰り返すことにより、幼稚園教育に対する専門性を高め、自らの能力を向上させていくことができるのである。

各幼稚園では、教材研究を通して、幼児と教材との関わりについて理解を深め、遊びを展開し充実していくような豊かな教育環境の創造に努めることが必要である。

② 集団生活と教師の役割

教師が幼児一人一人を理解し、心の動きに応じることとは、一人一人の幼児の活動を援助することや幼児と一対一で関わるようにすることだけを意味するものではない。幼児の主体的な活動は、友達との関わりを通してより充実し、豊かなものとなる。そこで、一人一人の思いや活動をつなぐよう環境を構成し、集団の中で個人のよさが生かされるように、幼児同士が関わり合うことのできる環境を構成していくことが必要である。

集団には、同じものへの興味や関心、あるいは同じ場所にいたことから関わりが生まれる集団や同じ目的をもって活動するために集まる集団もあれば、学級のようにあらかじめ教師が組織した集団もあり、それぞれの集団の中で幼児は多様な経験をする。幼児の発達の特徴を踏まえ、それぞれの集団の中で、幼児が主体的に活動し多様な体験ができるように援助していくことが必要である。

幼児期は自我が芽生える時期であり、友達との間で物をめぐる対立や思いの相違による葛藤が起こりやすい。幼児は、それらの経験を通して、相手の気持ちに気付いたり自分の思いを相手に分かってもらうために伝えることの大切さを学んだりしていく。また、自分の感情を抑え、相手のことを思いやる気持ちも学んでいく。この意味で、友達との葛藤が起こることは、幼児の発達にとって大切な学びの機会であるといえる。

ここで教師は、幼児一人一人の発達に応じて、相手がどのような気持ちなのか、あるい

は自分がどのようにすればよいのかを体験を通して考えたり、人として絶対にしてはならないことや言ってはならないことがあることに気付いたりするように援助することが大切である。また、集団の生活にはきまりがあることに気づき、そのきまりをなぜ守らなければならないかを体験を通して考える機会を与えていくことが重要である。

集団における個々の幼児への指導で大切なことは、幼児が単に集団の中で友達と関わっていればそれでよいということではない。重要なのは、幼児一人一人が主体的に取り組んでいるかどうかを見極めることである。例えば、集団に入らずに一人での幼児については、その幼児の日々の様子をよく見て、心の動きを理解することが大切である。何かに興味をそそられ、一人での活動に没頭していて加わっていないのか、教師から離れるのが不安で参加していないのか、集団に入ろうとしながらも入れないのかなど、状況を判断し、適切な関わりをその時々にしていくことが必要である。また、一見集団で遊んでいるように見えても、主体的に取り組んでいない幼児がいることから、皆で楽しく遊べないこともある。このようなときには、目的をもって充実した活動が展開できるよう環境を再構成し、援助していくことが必要なのである。

また、様々な集団がある中で、学級は幼児にとって仲間意識を培う基本となる集団である。教師は一年間を見通して、幼児の様子をよく見ながら、時期に応じた学級での集団づくりへの援助を行っていかなければならない。

例えば、入園当初や学年の始めには、新しい友達や先生の中で不安を抱き、打ち解けられずに緊張しているため、主体的に活動ができないことが多い。そこで、教師が幼児の心情をよく理解し、受け止め、一人一人のよさを認め、学級として打ち解けた温かい雰囲気づくりを心掛け、幼児が安心して自己を発揮できるようにしていくことが必要である。

また、友達関係がある程度できてくると、決まった友達とだけ遊ぶことも起こってくる。時期を見て、いろいろな友達と関わり合うきっかけとなる環境の構成や援助をしていくことも教師の役割である。

幼児は、様々な友達との関わりの中で多様な経験をし、よさを相互に認め合い、友達とは違う自分のよさに気づき、自己を形成していく。集団で一つのものを作ったり、それぞれが役割を分担して一つのことを成し遂げたりすることを通して、仲間意識が更に深まる。皆で協力し合うことの楽しさや責任感、達成感を感じるようになり、友達にも分かるよう明確に自分の思いを主張したり、ときには自分のやりたいことを我慢して譲ったりすることを学んでいくのである。このような集団での活動を通して、自分たちのもの、自分たちの作品、そして、自分たちの学級という意識が生まれ、幼稚園の中の友達やもの、場所などに愛着をもち、大切にしようとする意識が生まれる。

また、幼稚園は、異なる年齢の幼児が共に生活する場である。年齢の異なる幼児間の関わりは、年下の者への思いやりや責任感を培い、また、年上の者の行動への憧れを生み、自分もやってみようとする意欲も生まれてくる。このことから、年齢の異なる幼児が交流できるような環境の構成をしていくことも大切である。

③ 教師間の協力体制

幼児一人一人を育てていくためには、教師が協力して一人一人の実情を捉えていくことが大切である。幼児の興味や関心は多様であるため、並行して様々な活動をしている幼児

を同時に見ていかなければならない。このためには、教師同士が日頃から連絡を密にすることが必要であり、その結果、幼稚園全体として適切な環境を構成し、援助していくことができるのである。

連絡を密にすることのよさは、教師が相互に様々な幼児に関わり、互いの見方を話し合うことで、幼児理解を深められることである。教師は自分と幼児との関係の中で一人一人の幼児を理解している。しかし、同じ幼児について別の教師は違う場面を見ていたり、同じ場でも異なって捉えていたりすることもある。また、幼児自身がそれぞれの教師によって違った関わりの姿を見せていることもある。したがって、日々の保育を共に振り返ることで、教師が一人では気付かなかったことや自分とは違う捉え方に触れながら、幼稚園の教職員全員で一人一人の幼児を育てるという視点に立つことが重要である。

このような教師間の日常の協力と話し合いを更に深め、専門性を高め合う場が園内研修である。園内研修では、日々の保育実践記録を基に多様な視点から振り返り、これからの在り方を話し合っていくことを通して、教師間の共通理解と協力体制を築き、教育の充実を図ることができる。教師一人一人のよさを互いに認め合い、教師としての専門性を高めしていく機会とすることができる。

そのためには、園長が広い視野と幼稚園教育に対する識見に基づいてリーダーシップを発揮し、一人一人の教師が生き生きと日々の教育活動に取り組めるような雰囲気をもった幼稚園づくりをすることが求められる。つまり、教師同士が各々の違いを尊重しながら協力し合える開かれた関係をつくり出していくことが、教師の専門性を高め、幼稚園教育を充実するために大切である。

・「幼稚園教育要領解説」 第1章総説 第2節 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

(幼稚園教育において育みたい資質・能力)

幼稚園においては、幼稚園生活の全体を通して、幼児に生きる力の基礎を育むことが求められている。そのため、幼稚園教育要領第1章総則の第1に示す幼稚園教育の基本を踏まえ、小学校以降の子供の発達を見通しながら教育活動を展開し、幼稚園教育において育みたい資質・能力を育むことが大切である。

幼稚園教育において育みたい資質・能力とは、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」である。

「知識及び技能の基礎」とは、具体的には、豊かな体験を通じて、幼児が自ら感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりすること、「思考力、判断力、表現力等の基礎」とは、具体的には、気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりすること、「学びに向かう力、人間性等」とは、具体的には、心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとすることである。

これらの資質・能力は、第2章に示すねらい及び内容に基づき、各幼稚園が幼児の発達の実情や幼児の興味や関心等を踏まえながら展開する活動全体によって育むものである。

実際の指導場面においては、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」を個別に取り出して指導するのではなく、遊びを通し

た総合的な指導の中で一体的に育むよう努めることが重要である。これらの資質・能力はこれまでも幼稚園で育んできたものではあるが、各幼稚園においては、実践における幼児の具体的な姿から改めて捉え、教育の充実を図ることが求められている。小学校以降の教育は、各教科等の目標や内容を、資質・能力の観点から整理して示し、各教科等の指導のねらいを明確にしながら教育活動の充実を図っている。

一方、幼稚園教育では、遊びを展開する過程において、幼児は心身全体を働かせて活動するため、心身の様々な側面の発達にとって必要な経験が相互に関連し合い積み重ねられていく。つまり、幼児期は諸能力が個別に発達していくのではなく、相互に関連し合い、総合的に発達していくのである。

幼稚園教育において育みたい資質・能力は、こうした幼稚園教育の特質を踏まえて一体的に育んでいくものである。

(「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」)

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、第2章に示すねらい及び内容に基づいて、各幼稚園で、幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより、幼稚園教育において育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿であり、特に5歳児後半に見られるようになる姿である。

幼稚園の教師は、遊びの中で幼児が発達していく姿を、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて捉え、一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくったり必要な援助を行ったりするなど、指導を行う際に考慮することが求められる。

実際の指導では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が到達すべき目標ではないことや、個別に取り出されて指導されるものではないことに十分留意する必要がある。もとより、幼稚園教育は環境を通して行うものであり、とりわけ幼児の自発的な活動としての遊びを通して、一人一人の発達の特性に応じて、これらの姿が育っていくものであり、全ての幼児に同じように見られるものではないことに留意する必要がある。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は5歳児に突然見られるようになるものではないため、5歳児だけでなく、3歳児、4歳児の時期から、幼児が発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことに留意する必要がある。

さらに、小学校の教師と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに子供の姿を共有するなど、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図ることが大切である。その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は幼稚園の教師が適切に関わることで、特に幼稚園生活の中で見られるようになる幼児の姿であることに留意が必要である。幼稚園と小学校では、子供の生活や教育方法が異なっているため、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」からイメージする子供の姿にも違いが生じることがあるが、教師同士で話し合いながら、子供の姿を共有できるようにすることが大切である。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼稚園教育を通した幼児の成長を幼稚園教育関係者以外にも、分かりやすく伝えることにも資するものであり、各幼稚園での工夫が期待される。

・「幼稚園教育要領」 第1章総則 第3 教育課程の役割と編成等

5 小学校教育との接続に当たっての留意事項

- (1) 幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにするものとする。
- (2) 幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。

・「幼稚園教育要領解説」 第1章総説 第3節 5 小学校教育との接続に当たっての留意事項

(1) 小学校以降の生活や学習の基盤の育成

幼稚園は、学校教育の一環として、幼児期にふさわしい教育を行うものである。その教育が小学校以降の生活や学習の基盤ともなる。小学校においても、生活科や総合的な学習の時間が設けられており、学校教育全体として総合的な指導の重要性が認識されているといえる。

幼児は、幼稚園から小学校に移行していく中で、突然違った存在になるわけではない。発達や学びは連続しており、幼稚園から小学校への移行を円滑にする必要がある。しかし、それは、小学校教育の先取りをすることではなく、就学前までの幼児期にふさわしい教育を行うことが最も肝心なことである。つまり、幼児が遊び、生活が充実し、発展することを援助していくことである。

学校教育全体では、いかにして子供の生きる力を育むかを考えて、各学校の教育課程は編成されなければならない。幼稚園教育は、幼児期の発達に応じて幼児の生きる力の基礎を育成するものである。特に、幼児なりに好奇心や探究心をもち、問題を見いだしたり、解決したりする力を育てること、豊かな感性を発揮したりする機会を提供し、それを伸ばしていくことが大切になる。幼児を取り巻く環境は様々なものがあり、そこでいろいろな出会いが可能となる。その出会いを通して、更に幼児の興味や関心が広がり、疑問をもってそれを解決しようと試みる。幼児は、その幼児なりのやり方やペースで繰り返しているようなことを体験してみること、その過程自体を楽しみ、その過程を通して友達や教師と関わっていくことの中に幼児の学びがある。このようなことが幼稚園教育の基本として大切であり、小学校以降の教育の基盤となる。幼稚園は、このような基盤を充実させることによって、小学校以降の教育との接続を確かなものとすることができる。

幼稚園教育において、幼児が小学校に就学するまでに、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うことが重要である。創造的な思考の基礎として重要なことは、幼児が出会ういろいろな事柄に対して、自分のしたいことが広がっていきながら、たとうまくできなくても、そのまま諦めてしまうのではなく、更に考え工夫していくことである。うまくできない経験から、「もっとこうしてみよう」といった新たな思いが生まれ、更に工夫し自分の発想を実現できるようにしていく。主体的な態度の基本は、物事に積極的に取

り組むことであり、そのことから自分なりに生活をつくっていくことができることである。さらに、自分を向上させていこうとする意欲が生まれることである。それらの基礎が育ってきているか、さらに、それが小学校の生活や学習の基盤へと結び付く方向に向かおうとしているかを捉える必要がある。また、小学校への入学が近づく幼稚園修了の時期には、皆と一緒に教師の話を聞いたり、行動したり、きまりを守ったりすることができるように指導を重ねていくことも大切である。さらに、共に協力して目標を目指すということにおいては、幼児期の教育から見られるものであり、小学校教育へとつながっていくものであることから、幼稚園生活の中で協同して遊ぶ経験を重ねることも大切である。

一方、小学校においても、幼稚園から小学校への移行を円滑にすることが求められる。低学年は、幼児期の教育を通じて身に付けたことを生かしながら教科等の学びにつながる時期であり、特に、入学当初においては、スタートカリキュラムを編成し、その中で、生活科を中心に合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定なども行われている。

このように、幼稚園と小学校がそれぞれ指導方法を工夫し、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続が図られることが大切である。

(2) 小学校教育との接続

幼稚園では計画的に環境を構成し、遊びを中心とした生活を通して体験を重ね、一人一人に応じた総合的な指導を行っている。一方、小学校では、時間割に基づき、各教科の内容を教科書などの教材を用いて学習している。このように、幼稚園と小学校では、子供の生活や教育方法が異なる。このような生活の変化に子供が対応できるようになっていくことも学びの一つとして捉え、教師は適切な指導を行うことが必要である。

小学校においては、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすることとされている。

子供の発達と学びの連続性を確保するためには、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、幼稚園と小学校の教師が共に幼児の成長を共有することを通して、幼児期から児童期への発達の流れを理解することが大切である。すなわち、子供の発達を長期的な視点で捉え、互いの教育内容や指導方法の違いや共通点について理解を深めることが大切である。

また、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図るため、小学校の教師との意見交換や合同の研究会や研修会、保育参観や授業参観などを通じて連携を図るようにすることが大切である。その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有して意見交換を行ったり、事例を持ち寄って話し合ったりすることなどが考えられる。

例えば、固くてピカピカの泥団子を作りたいという思いをもった幼児は、これまでの経験から、砂場の砂よりも花壇の土を使う方がよいことや、粒の細かい砂をかけて磨いて仕上げることなどを発見しながら、思考力が芽生えていく。園内の様々な場所で砂の性質等に気付き工夫しながら、多様な関わりを楽しむ幼児の姿が見られるようになる。

このように具体的に見られる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を生かして、幼稚園の教師から小学校の教師に幼児の成長や教師の働き掛けの意図を伝えることが、円滑

な接続を図る上で大切である。

さらに、円滑な接続のためには、幼児と児童の交流の機会を設け、連携を図ることが大切である。特に 5 歳児が小学校就学に向けて自信や期待を高めて、極端な不安を感じないように、就学前の幼児が小学校の活動に参加するなどの交流活動も意義のある活動である。
(第 1 章 6 節 3 学校間の交流や障害のある幼児との活動を共にする機会を参照)

なお、近年、幼稚園と小学校の連携のみならず、認定こども園や保育所も加えた連携が求められている。幼稚園・認定こども園・保育所・小学校の合同研修、幼稚園教師・保育士・保育教諭・小学校教師の交流、幼稚園・認定こども園・保育所の園児と小学校の児童の交流などを進め、幼児期の教育の成果が小学校につながるようにすることも大切である。

